



マンガ大賞2022決定!
選考員コメント掲載!

マンガ大賞
Cartoon grand prize
2022 マンガ読みが選ぶ2021年の一推!!

「ダーウィン事変」うめざわしゅん

選考員コメント・1次選考

- アメリカを舞台に、チンパンジーと人間の間に生まれたチャーリーを巡り、進化とは、尊厳とは、命とは、ヒトとは、思想とは、たくさんの難しいテーマに対峙している作品なのに一分の隙もブレもない、でもしっかりがっちりエンタメなんです。ともすれば暑苦しく押し付けがましくなりがちなのメッセージが作品の裏にあるはずなのに、作者のおそろしく豊富な文化への理解や学識が土台にあり、しっかり計算されているかと思いますが、その上でクールに物語が進んでいくので読みにくさや重たさを全く感じません。ダーウィンが唱えた進化論を揺るがすまさしく「事変」。タイトルも刺さりますね。まだまだ謎だらけな段階なのにおもしろい！めちゃくちゃ先が気になります。

公務員 / 宇田川結衣子

- 禅問答のようになりがちで難しいテーマを扱いながらも主人公がどっしりぶれない軸を持っていることで進んでいく作品。それだけで作品のテーマになりそうな問題達どれも無視されずに描かれていて、圧倒されます。

株式会社来知 WEB デザイナー / 河本智芳

- ヒトとチンパンジーのハーフ、ヒューマンジーを主人公としたサスペンスもの。どちらかと言うと、彼を取り巻く人々のエゴや社会の権力、そこから生まれる争い等を軸にストーリーは進み、ヒューマンジーとは対照的な醜い人間の愚かさを見せられるような印象を受けます。舞台がアメリカなのもあり、まさにハリウッド映画を見ているようなエンターテインメントを味わえます。

会社員 / 三浦佑樹

- キャラクターの顔がリアルすぎて動かしづらそうに感じる時もあるけれど、物語は常に不穏さをはらんで疾走しささかも緩みなし。先が気になって目が離せない。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 主人公は人間と天才チンパンジーの交雑種（ハイブリッド）の“ヒューマンジー”で、一般の人間以上の運動能力と思考力を持つチャーリー。成長してハイスクールに通うようになると、そこには偏見と“危険な予兆”が…。その複雑な生い立ちがゆえに、本人の意志とは無関係にさまざまな悲劇を呼んでしまう。人はその存在自体が正しいのか、害悪なのか。そもそも地球上に生きる生物としての正しさとは何か。その他、個と集団、親と子、人種や民族、生き物の境界”ひとり”のヒューマンジーを通して、個、関係性、コミュニティなど人間の営みのまわりにある、さまざまな課題を問いかける。

(有) 馬場企画 編集者／ライター / 松浦達也

- 海外映画と海外ドラマを足してマンガで割ったような作品だと感じている？と言うと、なんだか既視感のあるものっぽく聞こえてしまいそうですが、何かと何かを足して割ると、別物なのかもしれない……いや、でも作中でもそのテーマについて触れているような気もするし、違った見解な気もするし……と、こんがらがります。良い意味で。言葉のチョイスなどもキャラクターによって細かく選別されておりテーマとしっかり向き合っているのも、いろんな意味でしっかり考えさせられる作品です。

イロイロ屋 / 杉本善徳

- この作品は現実世界とマンガの世界を照らし合わせてしまうほどのリアリティを感じます。フィクションだと分かっているにもかかわらず、こういった事が本当に起こるのではないかと考えてしまいますほどです。悪役が自分を悪だと思っていない、何が正解で正義なのか？深く考えさせられる作品です。

会社員 / 竹本慧

- ストーリーのリアルさに引き込まれて、他者に対しての自分自身を覗き込まれるような肌触りの作品でした。面白すぎる。

オフィスオーガスタマネージャー / 樋口健

- 面白いが、テーマが難しく、コメントに悩みます。主人公のチャーリーがどのように成長するのか、正義なのか、悪なのか。今後の展開が気になるストーリーなのでおすすめです！

デザイナー / 平沼寛史

- 人間とチンパンジーの間に生まれた「ヒューマンジー」であるチャーリーは、テロ組織「動物解放同盟（ALA）」の思惑に巻き込まれ窮地に陥る。人間は特別か？ 他の動物とどこまで平等に扱えるか？ 環境問題、SDGS、アニマルウェルフェアなど今後さらに複雑さを増していくだろう人間と動物の関係。そんなことを考える上で一つの視点を与えてくれるマンガだろう。って、そんなことを書いていたら、遺伝子操作した豚の心臓を人間に移植しただって！？ なんだか五十嵐大介先生の『ディザインズ』の世界がどんどん現実味を帯びてくる…。

鳥取県立図書館司書 / 野間勤

- 半分ヒトで半分チンパンジーの「ヒューマンジー」チャーリーの物語、動物愛護や、社会的な考えをさせられながらも、ストーリーがきになります！

Hair Make Lounge tetote 代表 / 力丸真

- 今一番今後の展開が楽しみな漫画

会社員 / 齋藤隼

選考員コメント・2次選考

- 先が知りたい……と思いながら、マンガのページをめくることこそ、面白さの源泉と思うのです。それをキッチリ再現した作品で、ワクワク感ではぶっちぎりでした。チンパンジーとヒトから生まれた生物「チャーリー」という意外な主人公に加えて、テロ組織を始め、立場の違う人たちの価値観がぶつかる場所も刺激的です。

サブカル専門ライター / 河村鳴紘

- 既にベテランの域に達している作家さんではありますが、画面や構成、漫画としての作品力がやっぱり強い！読んで「面白かった」で終わるのではなく、何かしら考えさせるモノ、心に引っ掛かるモノが残るのもうめざわ作品の魅力。期待を裏切らないという意味では一番の漫画なのではないでしょうか。

元書店員 / 井出麻悠美

- 「ヒューマンジー」チャーリーの周りがどんどん不穏に変化していき事件が大きく深刻になっていくなかで、チャーリー自身は常にシンプル。芯が通っていて揺るがない。それが余計に「人間」たちが滑稽に見えるという仕掛け。疾走感のあるストーリー展開も巧い。しびれました。

元書店員 / 内野智未

- ヴィーガンや動物愛護といったテーマを正面から取り上げている点が面白い。読者は、「ヒューマンジー」というヒトではない存在の視点から現代社会を見直すことになる。異なる思想に基づく思惑が複雑に絡み合うように見えるのに、「ヒューマンジー」からすれば至極単純で答えは一つという対比がうまく機能している。

弁護士・三村小松山縣法律事務所 / 三村量一

- 主人公はヒトとチンパンジーの間に生まれた子供です。ヒトと同等の知性を持ち、身体能力はヒトを大きく上回る。そんな存在からみた、人間や、人間社会はおかしなことだらけ。私達人間が当たり前すぎて疑いもしなかったことに素直に疑問を突きつけてきます。その疑問が素直で真っ直ぐで、同族の中でストレスなく疑問もあまり感じずに生きるということの楽しさと恐ろしさを強く感じました。ダイバーシティやインクルージョンが必要とされる世の中を生きていくうえで、大切な示唆をくれるマンガだと思います。

システムエンジニア / 廣瀬公将

- 個人的に、漫画に限らずテーマ性の強い作品で、キャラクターにそれを多く代弁させるような物語は嫌いなのですが、これはそれを超越するほど面白かったです。シュールリアリスム的な考え方に自信があった自分ですが、ハッとさせられる台詞が多く、新しい価値観を与えてくれるのは読んでいてとても気持ち良かったです。スピード感も丁度良く飽きが来ないまま、ドンドンと物語に吸い込まれていく感じも好きです。リアリティの中に突飛な主人公を一人入れ込む構成は稀にありますが、周りのキャラクターも魅力的で、同じようなもの（←個人的な分類ですが）では「ファブル」以来のやられたぜ感でした。

バーテンダー / 村井真也

- 近年のマンガは「設定」が重視された作品が多いが、本来、設定とは伝えたいストーリーや世界観の土台となるべきものであり、だからこそ強固さが求められる。どこか設定頼みな香りがする近年のマンガに比して、本作は焦点の絞り込まれた世界観と、圧倒的に骨太な設定のもと、説得力の高いストーリーが構築されている。物語は「意識の流れは虐げられた人種からすべての動物へと広がり、そしてすばらしい進化論的な解答へと至る。C・ダーウィン（1838年2月のノートの走り書きより）」という書き出しに始まり、人種論、生物学、優生思想など、歴史上人間が抱えてきた課題をモチーフに、主人公（人間とチンパンジーのハイブリッド！）とその周囲に起きる事件を描いていく。ハイブリッドだからこそ、無邪気に本質を突く主人公のセリフや思考、そしてふとした瞬間に見せるチャーミングな振る舞い。時折ページをめくる手が止まり、世界の有り様について考えさせられる作品世界の深み。ごまかしのない確かな画力も含めて、本年ダントツの一作。

（有）馬場企画 編集者／ライター / 松浦達也

- 半分ヒトで半分チンパンジーのヒューマンジーのチャーリー。内容が濃く重い話ですが、とても読みやすく海外ドラマを観ているようで、続きを早く！となっています。ん？なんだろう？という謎の残し方が好きです。それらがどう繋がっていくのか推理しつつ待つのも楽しい。チャーリーが言う皮肉も好き！ダーウィン事変の第一話をwebでもう一度読んで気づいたのですが、第一話に限り、クリエイティブ・コモンズのもと公開されていたんですね。適切な表示をし、非営利目的で改変しない場合に限り、自由に複製や再配布が可能とのこと、そういうプロジェクトの存在を初めて知りました。たくさん拡散してもっと多くの人に読んでもらいたい！

声優 / 富岡美沙子

- 我々は大なり小なり「既存の視点」、つまり過去に支配されているわけですが、そういったある種の「お約束」にでっかい一石を投じる漫画作品になり得るのではないかと。

音楽家・閃き堂店主 / 谷澤智文

- 人間とチンパンジーの間に「ヒューマンジー」として産まれたチャーリー。彼がいいはなった「人間だけを特別にする理由があるの？」ということをつたびたび突きつけられるマンガだ。テロ組織「動物解放同盟（ALA）」の思惑に巻き込まれるなど、アクション的な要素も加わってますます目が離せない。

鳥取県立図書館司書 / 野間勤

- 難しいテーマにも真正面から切り込みつつ、フラットな視点も投げ込んでくる作品。このスケールの規模で逃げずにどこまで描ききってくれるのか楽しみです。

株式会社来知 WEB デザイナー / 河本智芳

- 生物学、倫理観、哲学など、様々な面でとても考えさせられる作品です。世間含め周辺が騒がしくなるにつれ、渦中の中心にいる主人公が一番フラットに物事を見ていて、自分ならきっとSNSで発信される情報を面白おかしく見ているんだろうなと思うと、とても考えさせられました。

Books アイ蒲生エキナカ店 / 野口忠義

- 難しいテーマを臆せず扱っていて、どこまで描かれるのか気になります。

大日本印刷 / 佐々木愛

- サスガ鬼才うめざわしゅん！ようやく時代が先生に追いついた。いままでの作品もオススメ！

本と文具ツモリ / 津守晋祐

- ちょうど今回の選考の対象になった3巻のところまでが一つの区切りとなっているように思います。ここから先の展開が非常に楽しみな作品でした。スケールの大きなSFサスペンス作品で、作中の各人物、団体、地域社会の様々な思惑が入り乱れ、複雑な読み応えのある作品だと感じました。

会社員 / 林礼春

- どこへ向かって進むのか。どんな未来が待っているのか。うめざわしゅん『ダーウィン事変』をページを繰るごとにそんな興味が湧いてくる。チンパンジーと人間の間に生まれた「ヒューマンジー」のチャーリーを巡って起こる騒動を描いたシリーズでは、動物解放同盟（ALA）という組織がチャーリーをシンボルに祭り上げようとしてテロを起こし、人間はチャーリーを厄介者扱いする。その中であってチャーリーを信じる人々もいて、種族や見た目の違いを超えた理解の可能性を感じさせる。動物とは何かを問うことは、ひるがえって人間とはどのような存在なのかといった問いにも挑むこと。鏡のような物語から争い憎み奪い合う人間の業を見つめ直しつつ、人類が次へと進むための道を探りたい。チャーリーが見せる身体能力をフルに発揮したアクションも見どころ。彼こそが次の世代の人類なのか？

書評家／ライター / タニグチリウイチ

- SF はフードについて思考を深めるための最高のジャンルだと思う。いや？おもしろかった？！最高のフードまんがですね。わたしは個人的にこういうマンガをフードまんがと呼んでいます。

菓子研究家 / 福田里香

- ヴィーガン問題や、動物保護問題、銃の乱射事件と実際にあるイデオロギーをベースに、現実だとほぼありえない人間とチンパンジーの子供を主人公にすることでフィクションと現実社会とをいい感じにファンタジーにしつつも風刺を効かせた強いメッセージ性のある作品だと感じました。

デザイナー / 高永貞光

- デビューコミックスのユートピアズが最高にクールだったうめざわしゅんが、連載ものでもその魅力を発揮してくれてとてもわくわくしている。少し未来の、今の生活の延長線上にあるかもしれない世界を描くのが本当にうまい。そしてこの作品では今起こっている問題もうまく描けている、普段あまり深く考えてこなかったところを考えさせてくれる作品。

bar 図書室店主 / 岡部愛

- 奥深い作品。若干デリケートかつ社会派な内容ゆえに意見が分かれそうだけれど、読んでいく中で自分の考えが整理される瞬間があったり、違った見解が見えたりして、とても読み応えがある。

イロイロ屋 / 杉本善徳

- 1 巻では、米国が舞台のハリウッド映画のような世界観を、過度に誇張しない絵柄で漫画に落とし込めるのが凄いなと思いました。物語が進むにつれて、素晴らしいなと改めて思ったのはまずウェットに飛んだ会話！ネイティブな英語会話が飛び交い、本当に映画を観ているよう。そしてアメリカの背景やヴィーガンについて相当調べているであろう知識の豊かさ。それを我々一般人にも伝わりやすい解釈にし、極上のエンターテインメントとして提示してくれる手腕が見事です！！3 巻の辛い展開だからこそ続きは「事変」の意味がわかるのでしょうか。構成が本当に凄い…

出版社営業 / 佐々木つむぎ

- 物語の中心人物であるチャーリーは人間とチンパンジーの間に生まれた「ヒューマンジー」と呼ばれる存在である。人間離れした容姿や身体能力、また唯一無二かつ未知の存在であることから人々からの注目から逃れられない。得体的に知れない存在に対する畏怖の念から彼を遠ざける人々もいる。その特徴から、自らの主張を広めるシンボルとして崇める人々もいる。しかし作中のチャーリーは非常に論理的に物事を捉え、嘘やごまかしのない個人的には好印象の青年だ。そのように特異性を度外視して本質に触れようとするものの難しさについて考えさせられる。ヒトという生物は皆各々において主義、主張、社会的立場、宗教、生い立ちなど様々な内的・外的要因によって己を形成している。しかしそれを自ら選び取ったものであるかどうかという点においては、ままたらないことが多い。ヒトの思考が前述の様々な要因からもたらされるバイアスにどれだけ捕われているのかを強く意識せざるを得ない作品。一人の学生として学校に通うことを望み登校を続けるチャーリーが、『友達』という大切な存在と今後どのような時間を過ごしていくのか。そして彼が捕われている様々なしがらみの着地点はどのようになるのか。今後の展開に目が離せない作品。

会社員 / 杉佳尚

- フィクションだと分かっているけど、もしかしたら近い将来、こういった事が本当に起こるのではないかと考えてしまうほどのリアリティ。何が正解で何が正義なのか？深く考えさせられる作品です。

会社員 / 竹本慧

- 人間でもチンパンジーでも無いチャーリー。彼をイレギュラーとして、または特別な存在として受け止める周囲に対してチャーリーが放つ、シンプルな言葉の 1 つ 1 つに考えさせられます。

教師 / 持丸宏司

- 現代の社会問題、動物愛護や、菜食主義、命あるものとは？テーマとして興味深いです、リアルに近いフィクションだからこそ漫画としての価値が高まる作品だと思います、それだけではない所も○

Hair Make Lounge tetote 代表 / 力丸真

- チャーリーってアベンジャーズに入るんじゃないですかね。

オフィスオーガスタマネージャー / 樋口健

- 一次でも推しましたが、説明しようとするとなんとも陳腐になってしまい、コメントに困ります(笑) ヒューマンジー(ヒトとチンパンジーの子)という現実離れた存在が主人公でありながら、ファンタジーに走ることなくハードボイルドなストーリー展開を可能にしているのは、豊富な知識で裏付けし緻密に組立てているであろう物語の土台が磐石だから。これからどんなに物語が飛躍しても、決してぶっとんだウソにはならないだろうと思います。主義・思想のぶつかりあいもこれからどんどん激しくなっていくと思いますが、先の理由により恐らくブレることなく進んでいくであろう物語運びに目が離せません！テーマが複雑かつ重いですが、さまざまな情報がきっちり整理されているせいかすっきり読めてしまう不思議。あまりの隙のなさにとどのようなバックグラウンドをお持ちの方が描かれているのでしょうか…気になります。映画を見ているのか？いや、もしかして、ノンフィクション…？と錯覚してしまうくらい。今後も楽しみです。

公務員 / 宇田川結衣子

- 沈着冷静でクール。人間とチンパンジーの間に生まれた「ヒューマンジー」であるチャーリーのキャラはとても魅力的だ。格好良くもかわいくもあり、作画は全体に乾いているのに、チャーリーだけは写実的すぎず、ほどほどにキャラクター的な造形（ぱっちりお目々がかわいい）なことも相まって、一度ハマれば無条件に応援したくなる。われわれ日本人読者の多くにとって、知っているような知らないような（たぶん知らない）、米国中西部のハイスクールを舞台にしているのも絶妙で、吹き替えされた洋画をみているようなバタ臭さを感じつつも、妙に「さもありなん」と思わせる説得力がある。うさんくさいのにリアルっていうのは、マンガとしては文句なく最高。日本が舞台だったら、こうは行かずにしらけてしまったかもしれない。初期短編を集めて話題になった「パンティストッキングのような空の下」（2015年）が、日本の半端な街に暮らす半端な日本人（つまり読者自身）の目を覆いたくなるようなダサさを割と青臭く追求していて（すごく絵がうまい大学漫研男子が描いた作品みたいな印象も）、鼻奥がムズムズするよううれしい気持ちにさせるのに対し、「ダーウィン事変」は分断とポリコレが行き着くところまで行った現在の米国社会をシリアスに写し取っている（コロナは無し）ように感じさせるにもかかわらず、壮大な大風呂敷を安全地帯から楽しんでいるような安定したエンタメ感が醸される。どちらが好みかは読む人次第（どちらも好き）。人情ヤクザものをハードボイルド風味でトリッキーに料理した「ピンキーは二度ベルを鳴らす」（16年）を経て、ヒーローものの系譜を踏まえつつ、空前絶後のヒーローを生み出した本作。3巻ラストが衝撃の展開で4巻が待ち遠しい。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

- 今期1番難解な漫画だと思います。人間とチンパンジーのハーフ、チャーリーが主人公で、かなり硬派なストーリーです。主人公が過激な動物保護団体との戦いに巻き込まれることで、人間と動物の境界や動物の権利、人種差別やテロリズム、ヴィーガンなど、様々なテーマが描かれます。物静かなチャーリーから発せられる言葉にはハッとさせられ、生き物の権利について深く考えさせられます。ややもすれば、アンタッチャブルなテーマにあえて触れている、とても挑戦的な漫画だと思います。

会社員 / 佐藤優

- ヒトとチンパンジーのハーフ「ヒューマンジー」のチャーリーを中心に、アメリカ社会を描くユニークな作品。倫理や差別、思想。チャーリーを巡って人間社会の問題が浮き彫りになります。チャーリーは非常に論理的で知性があり、時に人間の方が浅はかにも見えます。ヒトに触れ、わずかながらチャーリーの行動に変化が現れるのもまた面白みを感じます。考える話が多いにもかかわらず、展開が早くスリルもあるため、飽きません。これからの進展も非常に楽しみな作品です！

デザイナー／シンガーソングライター / 平松新

- ヒューマンとチンパンジーの間に生まれた“ヒューマンジー”の彼と彼を取り巻く人々を切り口にして、様々な倫理、思想、政治的な問題を圧倒的な画力で描く意欲作。どこまで広く深く切り込んでいけるかという点に期待します。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

- 「オリバー君」世代の自分としては、人間とチンパンジーの交雑種「ヒューマンジー」という設定には興味津々である。その動物学的な当否は置いて、実際に「彼」が実在した場合の取りうる行動と周囲のトラブルはリアルだ。それがさらに過激なテロを行う動物愛護団体の思惑に巻き込まれ社会問題化して行く。物語化された思考実験とも言えるこの壮大なフィクションが、どんな「問い」を我々人類に突きつけるのか？ その一員として真摯に受け止めたいと思う。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

- 違法な遺伝子実験の結果生まれた人とチンパンジーの中間にあるヒューマンジー「チャーリー」と、もう出だしから往年のアフタヌーンっぽさが溢れており、チャーリーを人間として扱う里親や級友・人類の脅威として扱う警察やテロの旗頭に利用しようとする環境団体過激派、そしてそれぞれの思惑の斜め上をいくヒューマンジーたるチャーリー。久々に骨太なアフタヌーン作品という事で歓喜しました。

住職・ライター / 蟬丸P

- こんな設定を思いつき、(きっと) 念入りに調べて説得力を持たせ、エンタメとしておもしろいものに仕上げる…というとても労力に、そして覚悟を持って描き続けておられる胆力に敬服。

ライター / 門倉紫麻

マンガ大賞2022 ノミネート作品

少年ジャンプ+/集英社

「ルックバック」藤本タツキ

選考員コメント・1次選考

- 読み切りだと思っていたらまさかの単行本化で歓喜。好きなことを仕事にしようと決めた時の動機やきっかけは単純だけどシンプルだから強力なもので、そして実際に仕事にした時に現れる壁や辛いこと、それでも続けるのは…を台詞で説明せずに表現しようとしている所や、終盤の主人公の一つ一つのコマに作者の強いメッセージを感じます。折に触れて読み返す大好きな漫画がまた一冊増えました。

会社員 / ターシ

- まだ消化しきれていないし、落ちきっていない。喉の小骨のように、年が明けた今もひっきり続けているお話。うまいこと言葉をくんずねんずして、好きなマンガのためになんだからしい感想に整えたくはないな、と感じたので、すみません、やっぱりまだうまく言葉にはできません。言葉にはできませんが、感情を直接に強く揺さぶられて、目が潤んだのは確かな事実で。なんだかそれぞれの読み手が、自分の来し方に合わせて、なにをどう感じるかが変わってくるマンガなんじゃないかなと思ったのでした。ルックバックしていたのは読み手なのかもしれません。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- もはや余計なことばのいらぬ作品ですが、創作活動に留まらず、個々人にとって大切な何かを追究したい、突き詰めたいというその衝動、欲求、そして前進することの怖れなどがない交ぜになったものをこれ以上ないほどに表現してくれた作品として読みました。

会社員 / やのこうじ

- 素晴らしい読み切り作品でした。夢中になって読みました。ネットでいろいろ話題になってましたが、なにも前知識を入れず感じたまま読んでほしい。ジャンプでここまで短編をコンスタントに描く人っているのかな？短編好きとしてはコンスタントに描きつづけてほしいと思う。

bar 図書店主 / 岡部愛

- 「引きこもり世界大会決勝」の4コマ、京本の死という結果が届いた世界と届かなかった世界。結果をリセットできる4コマの特性が作品全体を構成するギミックになっているところに魅かれました。個人的に、本作を巡る言説には問題が多いと考えています。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- もう何と言っているのか。えぐられる話です。藤野と京本の表情が胸を揺さぶってきます。漫画の力って本当に人生を変えてしまうぐらい凄いなって思わせてくれる漫画。

主婦 / 岸本のぶ

- 自分個人の嗜好とか趣味とか諸々すっ飛ばして「このマンガすげえ！」と唸らせてくれた作品。素晴らしい、の一言。

図書館員 / 金田健太郎

- 2021年はこの作品を挙げないわけにはいかないでしょう！というぐらい話題を搔っ攫った藤本タツキ先生の作品。私もしっかり衝撃を受けてしまった一人です。絵を描くこと、それが繋がって未来になっていくことを体験した人は絶対苦しい思いをしながら読み切ったのでしょうか。私もその一人です。

フリーランス / 金輪英恵

- 現在のトップランナーが、マンガという表現でこの世界に積極的に関わろうとする意思をもっていることに感謝。読みつがれて欲しい。

往来堂書店 / 三木雄太

- 2021 年を代表する 1 作と言って過言ではないと思います。全ての「生きた人達」への応援歌。読んで感じる感情を、私は未だに明確な言葉にすることが出来ずにいます。全 1 巻で完結してますし、ページ数も多くはないので、何も言わずに「読んで」とお薦めします。

丸善ジュンク堂書店 営業本部 / 小磯洋

- この作品を「少年ジャンプ+」で読んだ時、「ファイアパンチ」は途中で放り出したままで、「チェンソーマン」も最初の数巻しか読んでいませんでした。この作家は、自分には合わないと思っていました。が、「ルックバック」を読んだ後、「チェンソーマン」→「ファイアパンチ」と逆に読んだら、あらあら不思議、びっくりするほど面白い！藤本タツキという異能を、私はまったく読めていなかった。脳内をそっくり塗り替えられたような気分。未来のマンガ界は、この人を中心に回るような気さえしてきました。この 3 作、実はテーマは同じだと思う。藤本さんの語りのテクニックが向上して、だんだん「わかりやすく」なってきたのかもしれない。どうも合わないと思っていた人に、この「逆順読み」を強くお薦めします。

読売新聞文化部編集委員 / 石田汗太

- とにかく描く描く。自分も読みながらいつの間にか一緒に机に座ってる感じがするすごい作品だと思いました。何かに没頭することは苦しいこともたくさん。でもやめられない。熱いものが伝わってくるお話。

ブックエース上荒川店・コミック担当 / 倉本かおり

- Web で公開されて衝撃を受けた作品！あまりの反響に単行本になって嬉しい限りです。何も語らず、とにかく読んで！！と声を大にして言いたい。何度読み返してもいい、読み返すたびに、胸の中を抉る作品です。藤本先生は長編より、こういう短編 & オムニバスっぽい作品を読むと天才！って思います。

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

- 2021 年に読んだマンガ単行本の中ではベスト。世の中には星辰が正しい位置にないと描けないマンガというものがあって、このマンガがそれ。全身からチェンソーが生えていないと描けない叙情や、全身から不消の獄炎が迸らないと描けない叙情があるように、世に起こる惨劇を視界の隅に捉えながら、ただただ机に向かってマンガを描くことでしか描けない叙情があるのだと思う。奇跡はそと、扉の下スキマからさしこまれる。

ソフトウェアエンジニア / 第貳齋藤

- 最初のページの右上にある「Don't」と、最後のページの左下にある「In Anger」でタイトルを挟むと、かの名曲「Don't Look Back in Anger」になる辺りに深い意味を感じます。マンチェスター・アリーナで起きた爆発物事件の追悼集会で合唱された、マンチェスター出身のバンド Oasis の名曲です。高校時代に友人と組んだバンドでコピーしていた曲でもあったので、何度か読んでいううちにハッと気づき、検索してみるとやっぱり皆さん気づかれていたようでした。京都アニメーション放火殺人事件への追悼も込められた作品という考察もあり、なるほどな、と。作品全体から漂うただごとじゃない熱感は、そういう想いからも来ているようにも感じました。誰かの「背中を見て」、人は成長していくもの。比べることを嫌う風潮が世に広まったこともありましたが、お互いの背中を追いかけて成長し続けたふたりの熱に、突き動かされるような衝動を感じました。「怒りとともに思い出さないで」というメッセージは、たくさんの人々に届くだろうと思います。

音楽家・閃き堂店主 / 谷澤智文

- 1話完結で1巻が出るって時点でもう常識が追いつかない。世界は加速しているのか？いや、大丈夫だ、たぶんみんな追っついてないって。そんでこの1話がどれくらい深い。刺さる。何なん？記憶領域の「だいじなもの」にノーマークで収納されたかのような浸透力。読んだ人みんなの奥深くに仕舞われるんだろうな。例えるならウン万もするような高級フレンチのフルコースを全品目の前に並べて数分で食べ尽くしちゃったような感覚。でも満腹なんだよ??多幸福感だよ??すごい作品です。今生の自分の語彙力の無さを恨みたい。さようなら天さん……時間経過を資料の冊数で表現したり、春夏秋冬を見開き4コマの服装 & 景色で表したり、もうなんか表現超絶技巧のバーゲンセールです。生まれて初めて心の底から震えあがった…京本家の廊下見た1コマとか…ホントもう凄すぎる…藤本名人による1秒間の視覚情報16連射されてますコレは。作品に没入した状態で見るとこのコマの情報量がやばい。どれだけの感情を読み取ればいいんだ…そして雨の中で嬉しそうに踊るなよおおお感情が追いつかないよおおおでもそれ分かるんだああああそんで擬音語が少ない。たぶん2個しか無い。これが最先端なのかよ?そうなんだろうな??

会社員 / 布施直人

- 藤野の心が折れた瞬間を表したのが“振り返って”後ろの席の友達に言う「ね 今日さ 帰りアイス食べてかない？」のコマだ。「私はマンガを止める」なんて野暮な説明台詞は一言もなく、ただ友達を放課後アイスに誘うだけ。ここだけ切り取れば、女子小学生の楽しげな会話と読めるが、その前の経緯を読んでいけば、これは藤野の断筆宣言であり、さらに彼女の矜持と絶望の深さすら読み取れる。こんな見事なフード演出はなかなかない。

菓子研究家 / 福田里香

- 震えた。言葉にするのは全部間違っている気がして、何度も感想を書いては消した。この作品にある「背中」がどれだけの想いや意味を表現したのか、読み返す度に新たな気づきがあって驚愕する。胸に刺さり、心に残る物語に圧倒されました。言葉にならない。

デザイナー / シンガーソングライター / 平松新

- めちゃくちゃ面白い。心情描写や複雑な感情をうまく表現していて没入感がすごい作品。

広告会社 プランナー / 平沼良章

- 表現することは殺意に似ている。どちらも事故のように訪れ、年月をかけてひたすら刃を研ぐ日々を生み出す。マシンガンを乱射するような連載だった「チェンソーマン」がひとまず幕を迎えたあとの、刀芸職人と達人による精密な居合いの一閃、それが本作でした。2021年のマンガを振り返れば、まずこの記憶が焼き付いています。

会社員 / 末永龍介

- ある朝、起きてツイッターを観たらタイムラインには『ルックバック』の評ばかりが溢れていて、「チェンソーマンの先生か。コワイ話なのかな。。」と、恐る恐る読み始めた。小学校って、こうだったなという懐かしさと主人公のがんばりを俯瞰的に見ながら、絵上手いとか、静かな世界だな。と思って読んでいたらある見開きの力強さに心をぐっとつかまれて、俯瞰的な視点から、グッと主人公と一緒に加速しながら読んで読んで読み終えてしまった。「すごいマンガだった。」その一言しか出ない。私は今まで結構マンガを読んでいると思う。けど、初体験だった。そして、大好きになった映画を何度も何度も観る時に「あの展開、今回観るときに変わってないかな」なんて、絶対にないことを思ったりしてDVDを再生する。『ルックバック』はまさにそう。実は展開とか変わるんじゃないかな。って、何度も何度も読んでしまう。そして、新たな発見をする。9月に、コミックスが発売された時、90年代後半と一緒にフジロックへ行っていた仲間に送った。今まで、コミックスのプレゼントとかしたことなかったのに、読んでもらって一緒に語り合いたってすごく思って、一方的に送ってしまった。そして、読み終わったあとに感想がきて、すぐあの頃に戻ったかのように『ルックバック』に関して語りあった。楽しかった。この時代だからこそこのマンガかもしれない。でも、21年にこの作品に出会えてよかった。友人たちと当時の思い出や今のこと、そしてこれからこのウィルスが落ち着いたら会おうという未来の話しが出来た。本当にすごい作品に出会った。

アニメイト / 鈴木寛子

選考員コメント・2次選考

- 廊下に積み重ねられたスケッチブックの牙城を見た瞬間、なにかが背筋をはいのぼる。あれを生み出す衝動をわたしは知っています。その強烈な力がどこからくるのか分からないのですが、そこに身をゆだねた時間が人生を抗いがたい流れにさせる、理不尽で破壊的で爽快な感覚を知っています。……そんな気がする。つまりそれが創作というものなのでしょう。

会社員 / 末永龍介

- 自分は元々そうなのですが、一コマ一コマの描写やタイトルの意味だとか、漫画好きならば気付くであろう事になり後から気づいたり、他の方の感想レビューを見て気づく事が多く、歳を重ねるにつれて特にそういう事が多くなっていったんですけどこの作品を読んだ時、漫画を読み始めて日中ずっと読んでいた子供時代のあの一コマ・セリフの一つ一つを喰い入るように読んでいた状態に戻してもらった気がしました。劇中で「雨の中嬉しくて徐々に心が走り出しているような」シーンや、心が折れるほど辛い事が起きた時、「それでもまた進み出す」過程をセリフを使わず表現していて、あの2つのシーンがずっと頭に残っています。読み切り作品はページ数に関わらず強烈に印象を残すものが多いので、今後どんなに売れても作者には定期的に読み切り作品を作っていって欲しいです。

会社員 / ターシ

- とにかく表情がいい。台詞よりも表情がいろんな感情を訴えてくる。雨の中で踊る藤野、最高です！背中を見て前へ進む物語。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店コミック担当 / 山本さとみ

- 何度読んでも泣いてしまうし、引き込まれて毎回あっという間に読み終わってしまう。良いシーンが沢山ある。特に主人公がライバル視していた同級生から、ファンです！と告白された後、雨の中テンションが徐々に上がってスキップ(?)を踏む見開きのページ、表情も何もかも全てよくて何度もみてしまう。ほぼ同タイミングで出た短編集2冊を合わせて読むと、主人公たちのように漫画を描き続けて成長してきた藤本タツキ本人のことも感じられて感慨深いものがある。それにしても度々出てくる猟奇的な変質者へは何か思い入れがあるのだろうか。

bar 図書室店主 / 岡部愛

- 何も考えずに読んでも面白いが、深読みしだすと止まらなくなる。ずっと座右に置いておきたい1冊になりました。

図書館員 / 金田健太郎

- まさに「衝撃」です。一般的な漫画に比べるとセリフ少なめ！？と思いながら読み進めるも絵の描写で時間や季節を物語り、ストーリー展開の強弱を際立たせている事で一気に結末まで読めてしまいます。そして繰り返し読んでも、まさに「衝撃」です。

(株) エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部大介

- 1話完結で1巻が出るって時点でもう常識が追いつかない。世界は加速しているのか？いや、大丈夫だ、たぶんみんな追っついてないって。そんでこの1話がどれくらい深い。刺さる。何なん？記憶領域の「だいじなもの」にノーマークで収納されたかのような浸透力。読んだ人みんなの奥深くに仕舞われるんだろうな。例えるならウン万もするような高級フレンチのフルコースを全品目の前に並べて数分で食べ尽くしちゃったような感覚。でも満腹なんだよ??多幸福感だよ??すごい作品です。今生の自分の語彙力の無さを恨みたい。時間経過を資料の冊数で表現したり、春夏秋冬を見開き4コマの服装 & 景色で表したり、もうなんか表現超絶技巧のバーゲンセールです。生まれて初めて心の底から震えあがった…京本の家廊下見た1コマとか…ホントもう凄すぎる…藤本名人による1秒間の視覚情報16連射されてますコレは。作品に没入した状態で見るとこのコマの情報量がやばい。どれだけの感情を読み取ればいいんだ…震えが止まん！そして雨の中で嬉しそうに踊るなよおおお感情が追っ付かないよおおおでもそれ分かるんだあああそんで擬音語が少ない。これが最先端なのかよ？そうなのかよ？そうなんだろうな??割と序盤で主人公と京本が比較されてなんだかなってシーンあるけど、そこからずっと漫画を描く事に打ち込んでるのってめちゃくちゃ凄いことなんだよな。この歳になってやっと分かる。続けるのって立派な才能。そんで主人公はとんでもない??く負けず嫌いなんだろうな。クラスでプリント渡される場面で初めて京本の画を見たコマ、す

んげえ顔してるなって思ったけど何周か読んでやっと分かったんだあれめちゃくちゃ悔しがってる顔だって。それで最後の事件のところ。あれがもう本当に本当に心の中を掻き回すんだよな…カラテキック、、きつと事件を知った人みんなが「もし知っていたらこうしかった！！」っていうそれなのよ…その場にいて防ぐことができたなら…それができなくて…ただただ何もできなかったっていう無力感があって…でもそんな自分を抱えて生きることでもできないし、いつか自己防衛で忘れてしまうんだって。だから、だからこそ、この作品名は「ルックバック (追想する) 」なんだと思う。あの事件のことも、この作品のことも、もう絶対に忘れられないな。

会社員 / 布施直人

- こんなにも心を驚掴みされてぐわんぐわん揺さぶられるなんて。これ以上ないくらい切なくて温かい物語。傑作だと思います。

PENICILLIN / HAKUEI

- 背中。この表現に、深く深く考えさせられました。様々なシーンが自分に重なり、人生を回帰するような感覚すらありました。どうしてこんなにも圧倒されるのか。どうしてこんなにも言葉にならないのか。理由が知りたくて何度も読み返しました。でも、よくわかりませんでした。言葉にすれば、芽生えた感情が消えてしまう気がして、口にすれば、その想いが安くなる気がしました。この作品を読む方によって、それぞれ違う感想を持つかもしれません。圧倒され、衝撃を受け、今思い返しても言葉になりません。

デザイナー／シンガーソングライター / 平松新

- 2021 年に読んだマンガ単行本の中ではベストの 1 冊。もっとも心に刺さり、もっとも痛みを伴い、もっとも再読したくなかったマンガでもあった。こんなものは、ただ 1 度読んでため息をついて、忘れてしまうべきものののだ。(それができりゃあ苦勞はしねえよ) 世の中には星辰が正しい位置にないと描けないマンガというものがあって、このマンガがそれなのだと思う。例えば、京アニ事件があったことだとか (どうしても、想起せずにはいられない！突然に起こる悲劇と不幸！「この世は何でも起こりうる 何でも起こりうるんだわ きつと どんなひどいことも どんなうつくしいことも」『チェーンソーマン』1 部が完結したとこだとか (『チェーンソーマン』終わって半年のタイミングでこの単行本でるのずるくねえ？)。そういう、もろもろの事柄が視界のはしにこびりついているところにこれを読むのだ。全身からチェーンソーが生えていないと描けない叙情。全身から不消の獄炎が迸らないと描けない叙情。同じように、ただただ机に向かってマンガを描くことでしか描けない叙情があるのだと思われた。奇跡はそっと、扉の下スキマからさしこまれる。(少なくとも、このマンガでは、さしこまれた。そして、俺たちの多くは、そっとさしこまれたそれに、気づかない／気づけないのであろう、という謎の哀しみがある。)

ソフトウェアエンジニア / 第貳齋藤

- もうこれしかない！何度読んでも胸熱で、泣いてしまう。ジャンプ+で初見読んだ時の衝撃。ある部分に物議が入ってしまった修正が入ってしまったけど、それでも、なお強いメッセージを感じます。マンガなのに、現実感、自分の身近に置き換えて考えてしまうというのが、やっぱり、藤本タツキ先生の力であり、その狂気性がこの作品魅力であると思う。

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

- 1 次選考で記載した内容になります。

アニメイト / 鈴木寛子

- 一次審査のコメントで、「まだ消化しきれていないし、落ちきっていない」と書かせていただいたのですが、その後、何回目かの物語に入って、遅まきながら本作最後のセリフが輝いて見えました。あの疑問の答えが、京本の表情なんですね。言葉で描かれなかったからこそ深く重い感動が、目やら喉やら鼻の奥やらから、ゆっくりとこみ上げてきた一作でした。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- 人によってマンガの読み方が大きく違うことを教えてくれる作品。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- Twitter で自分のタイムラインに流れてくる、サイトで無料公開されている、そういうマンガは概ね「読み流される」ものだと感じ、悲しく思っていた。しかし、ある特別な夜に無料公開されたこの読切マンガは読んだ人々がこぞって「考察」した。そうせずにはいられない強烈な力、凄まじい熱量を持っている唯一無二の作品。読む専門のわたしの想像に及ばない、描き手の苦悩。しかしそこに同時に存在する喜びを強く感じた。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- 彼女を「かわいそうな人」にはしたくない。あの時の笑っていた彼女、驚いて喜んでいた彼女、頑張っていた彼女、その瞬間の彼女は幸せに生きていたはずだ。「かわいそう」で終わらせたくはない。けれど私たちは振り返る。あの時引き留めていたら。あの時あの場所にいなかったら。あの時そばにいたら。あの時助けられたら。彼女を「かわいそう」とは呼びたくない。けれど理不尽なものが全て壊して奪い去った。何度振り返っても何も解決しない。残された者は生きているから前方に向かって歩いてはいるけれど、一生救われることなんかない。何も納得できない。どこへも辿り着けない。どうしようもない終わらない感情が描かれている。面白い楽しい話ではない。落ち込んだ。けれどこの感情は、この感情を描いた作品は、消してはいけない、ずっと残しておかなければならないものだった。

金海堂イオン準人国分店コミック担当 / 園田美智子

- ネットで話題になった時期にスマホで読みましたが、紙の単行本で読むとさらにこみあげてくるものがあるのは、作中のふたりのような「紙」をベースにした漫画体験が、私にもあるからかもしれません。クラスメイトと回し読みしたノートの漫画、単行本の貸し借り、自分で買ってみた初めての原稿用紙。そんな自分の思い出とともに本作を読み返すたびに、タツキ先生の「漫画愛」に鼻の奥がツンとして泣きたくなります。漫画創作をテーマにしたこの作品こそが、漫画という表現自体の素晴らしさを体現しているとあらためて思いました。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 独特の世界観ながらも、どこか身近に感じるテーマ設定で読んでいて魅了されてしまいます。あーすればよかった、コースればよかった。人間そんなことをよく考えてしまいますが、この作品はタイムリープでそのあたりを描きながらも、繰り返される悲劇、そしてそれを乗り越える人間的な強さ。そういったところをしっかりと描いていて、非常に楽しめました。

広告会社 プランナー / 平沼良章

- 日々の積み重ねの先にあんな事があるなんて。毎日の色んなニュースの個々をみてみたら色んな積み重ねがあって。それを知ったら突然起こる色んなニュースは怖すぎて聞いていられないな。

カメラマン / 平沼久奈

- マンガ家マンガの新地平。青春ではなく業（ごう）としてのマンガ家。殺しても殺されても描かずにはいられない、本当に一握りの人間しか、マンガ家になれないのだと思う。

角川文庫編集部部長 / 関口靖彦

- たらればを言っても仕方がない、と思っていた時期が俺にもありました。たらればがおおいなる希望になる物語でした。

コメディアン / インコさん

- 「漫画を描く」ことへの思いを研ぎ澄まし研ぎ澄まして一冊に凝縮している作品。外見は比較的薄い一冊。しかし内容からは想像もつかない熱量が発せられています。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

- 時事性があり、鎮魂でもあり、作者が脳内で「こうだったらよかったのに」と考える内省がすべて渦巻きのようにならざる展開が心に迫る。1 巻完結マンガの傑作。

菓子研究家 / 福田里香

- この作品が「少年ジャンプ+」で無料公開されたのは今年の「事件」だったと思うし、約 140 ページで税込み 484 円のコミックスになったのも、出版の常識を覆す出来事だったと思う。藤本タツキは自由だ。作品も、値段も、発表形態も。そして新しい。表現も、絵も、語り口も。マンガのキャラクターの「演技」に関して、この人ほど、きちんと演出意図を持って描いている作家はいないんじゃないか。しかも、メジャーのど真ん中で。実は、このことに思い当たったのは、3 時間の映画「ドライブ・マイ・カー」を観た直後。この 2 作品の間に表面的な類似点はまったくないが、濱口竜介監督と藤本タツキは、かなり似たことを考えているのではないかな。そう思えて仕方ない。

読売新聞文化部編集委員 / 石田汗太

- 読切で公開された時の衝撃は今も忘れられない作品。何かを彷彿とさせるかもしれないが、訴えたい事はビシビシと伝わってくる。改めて単行本になって読み返してみても、鳥肌は立つものは立つ。才能が溢れている作品だと思う。読切としての魅力も伏線の回収もすべて納まっており、本当に巧い。このタイトルの“ルックバック”も読み手の一人一人で見え方が変わりそうなのもいい。解釈が何通りでもいいような気がする。多くの人に読んでもらいたい。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

- 気鋭のセンスが凝縮された道標的な一冊。漫画創作のモチーフも本賞向きだろう。

書評家 / 福井健太

- 京アニの事件を下敷きにした作品。心の底からの祈りというものがあるとすれば、これがそれなんだろう。生きているものは、いろいろな気持ちを飲み込んで、それでも人生を続けなければならない。だから生まれた作品と思う。

漫画読み / サイトウマサトク

- もし話題賞というものがあっても個人的には 2021 年はこれが一番なのかなと。不器用ながらも認め合い、育む心が次第にすれ違いを生んでしまう。。。そんなほろ苦い青春の群像劇をたった数ページの一瞬の理不尽によって止められてしまう恐怖。この作品から受け取るものは十人十色色々かもしれませんが、私はその理不尽さにどうしようもなく「今」を突きつけられたような気がしました。読み切りという最もスピード感のある形式でこの作品が放たれたことは結果的にとても衝撃的で、多くの方、しかも普段漫画に興味のない人にも届いた稀有な作品だと思います。

フリーランス / 金輪英恵

- 残された人にできる事は、描き続ける事。2 人を結びつけた四コマが切ないです。

教師 / 持丸宏司

- どこかの田舎町の風景が自分の中での風景と重なって切なくなりました。二人の過ごした日々、ひたむきさに何度読んでも涙が出てしまいます。

主婦 / 紺野泉

- 実写でもアニメで良いので、全編の PV を作って欲しい。それを 1 日中流しっぱなしでいたい。疲れたとき、やる気がでないとき、腹が立ったとき、苦しいとき、コミュニケーションがうまくいかず悲しいとき、自分の出来なさに落ち込んだとき、そういったマイナス・ネガティブな気分のときに読み返せば、その度に何度でも助けてもらえる、精神に効く薬のような漫画です

丸善ジュンク堂書店 営業本部 / 小磯洋

- 一冊でこの完成度は凄い。心を抉ってくるような鋭さ。登場人物に感情移入して心を揺さぶってくる。とくに京本の表情は感情を揺さぶられた。

主婦 / 岸本しのぶ

- ポロッと発表されて、当初大変話題になった本作であり、既にたくさんのマンガ読みに知られているところではありますが、二次にノミネートされて改めて読んでみて、ストーリーが進むにつれ主人公たちの世界が広がってもなお生々しく弱々しく痛々しいまま描き、何よりマンガでしかできない表現で描ききったこの作品を、今年のマンガと銘打って挙げる場において見過ごすことはできませんでした。作者の他作品も惨いシーンは少なくなく、それは作品の題材的にそうなんだと思ってましたが、現代を題材にしても、血を流さなくてもこんなに惨く描けるんだな…と思いました(笑) 見栄っ張りな主人公も決していいようには描かない、最後まできれいな人間にしたりせず弱さを崩さず、それでも最後のコマで答えを描いてくれる。お見事でした。無音のシーンとセリフがあるシーンの緩急、コマと絵と表情とコントラストでこんなにも雄弁に表現できるんですね。しかも紙の上で。マンガってすごい。これぞマンガです！と叫びたい。ルックバックという一見素っ気ないタイトルも、言ったら無粋ですが含みがありますよね。たまらないです。やっぱり一冊完結の名作だと思います。

公務員 / 宇田川結衣子

「ひらやすみ」真造圭伍

選考員コメント・1次選考

- 好きなんです。この空気感と言うのか匂いと言うのか、適した言葉が見つかりませんがほっこりするんです。

(株) エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部大介

- 東京は阿佐ヶ谷を舞台に、あまり器用じゃないけど優しい若者たちが送るマイペースな生活が、たまらなく愛おしい。日々せわしなくストレスの多すぎる昨今だからこそ、主人公の青年ヒロトの人柄と生き方は、結局は気の持ちようというか、どんな状況であっても生きることを楽しめる、どこかに置いてきたかもしれない忘れちゃいけない何かを思い出させてくれる。素朴で温かな人柄とご飯は、どうしたって好きなんだ。

会社員 / 伊東敬祐

- 世界を揺るがす流行り病で鬱屈した世の中を、読んでいる間一瞬忘れさせてくれる、夏の日陰で飲むやわらかい炭酸のラムネのような作品。ただただ日常を等身大で生きていることって素晴らしいなとしみじみ思います。よくある日々をつまんで描き取ったような作品なのに、あったかくてやさしくて、なんでこんなに癒されるんだろう？ご飯を食べ、おしゃべりをし、友達がいて、喧嘩したりじゃれあったり。気づかずに取りこぼしてしまいそうな日々の暮らしやそこにいる人の気持ち、丁寧に優しく切り取って詰め込まれています。とにかく心地よいです。読むとまるで温泉に入ったみたいに肩の力が抜けてほわわ〜んとします。うーんしあわせ。なんでだろう。。

公務員 / 宇田川結衣子

- どのキャラも地に足がついた感じで「近くにいるわこういうヤツ」と好きになる。と同時に、ふと遠い目になる瞬間が来て、読んでいるコチラも「どこか遠くへ」フッと飛ばされる。ほっこり心地いい世界に時たま風のように流れるほのかな切なさがいい。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 日常をトゥーマッチに描くわけではなく、あくまで日常として描かれていることに、ものすごく心をくすぐられました。読後感がたまらなく、心の深いところが喜んでいるような、気持ちのよい余韻を感じながら、どこかもの寂しくもなるような。主人公 生田ヒロトのように生きられない自分への寂しさなのかもしれません。僕らをとりまくどんな日常も、見る人次第、感じる人次第でどれだけでも美しく変容することを教えてくれているような漫画。そして、登場人物全員、大好きです。

音楽家・閃き堂店主 / 谷澤智文

- うまく「生きられない」ひとたちのたわいのない日々の記録は、私の生活を軽やかにする。どこを切り取っても「人のよさ」であふれている、都内の平屋暮らし漫画です。つらいときほど読めばラクになれる。大好き。

(株) プロプラス 商品部 / 池本美和

- 平屋って贅沢だよなあ、としみじみ思う。舞台が阿佐ヶ谷で、我が家の隣町なのも親近感が深い。ここいらにはこんな古い家屋がまだ残っているのだ。キャラ配置もセオリーをしっかりと押さえつつ、少しだけ踏み込む描写が秀逸。70年代の中央線文化が世代を重ねてアップデートされるような楽しさがある。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

- 「明日は忘れるような話をしながら一晩中歩き通した夜のことをきくと忘れない」「友達が出来たら、昨日と同じ景色が今日はちょっぴりキラキラして見える」日常の中に時々ふと現れる小さな幸せの風景がたくさん詰め込まれたマンガ。ストーリー、キャラクター含め、今までの真造圭伍さん作品の中で一番好きです。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- 前作「ノラと雑草」（全4巻）で、虐待や子供の貧困という重たいテーマを描ききった作者による新連載は、人と人との小さなつながりをほのぼのと、しかし情感たっぷりに描く。絵がうまいので、さまざまな世代のさまざまな境遇の人たちの気持ちの揺れや高まりが漏れ出る表情に引き込まれます。主人公・ヒロトは、ひょんなことから知り合って親しくしていた「ばーちゃん」の遺言で、おんぼろの平屋を譲り受けた28歳フリーター。美大に受かって同居を始めた従妹のなっちゃんをして「マイペースを通り越しておおらかすぎる」と呆れられる性格であり、生前のばーちゃんにも「アンタは優しすぎる、いつかぜったい騙される」と心配されたほど。でもかつては役者として芽を出しかけたこともあって……という筋立て。とにかくこのばーちゃんとの回想シーンが毎回うるうる来る。平屋暮らしなので「ひらやすみ」なのだが、20代後半という、人生の決断の時にギリギリ迫った年代でやり過ごすモラトリアム、ひと休みの日々が、なんとも切なくおいしい。舞台となる阿佐ヶ谷は、同じ中央線沿線の高円寺とも吉祥寺ともまた違い、地味ながら落ち着いた東京らしい街。新歓コンパで酔い潰れて終電を逃したなっちゃんを迎えに行った帰り、とぼとぼ歩いて帰る青梅街道でかいだ春の夜の匂い。閉店間際の釣り堀の夕暮れ。七夕祭りの商店街。庭先の白いアジサイの花。縁側——。街と家こそが本作の主役なのだった。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

- 日々の生活で大切な何かを教えてくれる漫画重大な事件が起こるわけではなく、ただ平凡な毎日こそが重要今、この時代に人との繋がりを大切にしたいと思わせてくれる作品

あゆみ BOOKS 杉並店店長 / 土屋修一

- 作品の舞台となっている阿佐ヶ谷は東京の真ん中に位置しながらも都会っぽさはなく、住んでいる人たちの温かみを感じる街で、それが作品の中で所々感じ取ることができます。それが物語の中でとても活かされており、郷愁を感じたり既視感が生まれてきました。生田ヒロトという青年には素朴で派手さはない。だけど、どこか人を魅きつける。一読者としてヒロトのこれからをずっと見ていたいと思った。

会社員 / 八重田幸子

- ずーっとずーっと読んでいたい。

オフィスオーガスタマネージャー / 樋口健

- 読み始めてすぐ、とてもしっくりくる心地よさを感じました。ただただ平凡で穏やかな日常。その尊さ、愛おしさ。今日も特別なことは何もしなかった。でも、手作りしたご飯がおいしい。陸橋から眺める景色がきれいだった。それでいいじゃないか。生きる目標を高くして、幸せのハードルを上げるのはもうやめたい。エスカレーターの話は常々思っていたことでしたが、ヒロトくんのように実践する勇気をまだ持てません……。

主婦 / 堀江千秋

- 真造圭伍先生の絵のタッチで「平屋」「阿佐ヶ谷の住宅地」「あの釣り堀」が描かれているのだけでも、静かな興奮が沸き立ちますが平屋が似合う主人公のヒロトくんの心持ちや行動が心地良い。まわりの人たちの時間の流れと一線を隔して心や行動が忙しいのにも関わらず、ヒロトくんとふたりになるとヒロトくん側の時間が流れるのが不思議で面白い。そして、ばーちゃん想いなのが本当に最高です！

アニメイト / 鈴木寛子

選考員コメント・2次選考

- とても羨ましい時間と空間で、自分の人生の中にもこんな期間が欲しいと心底思いました。一時でよいのでこんな生活がしたい！ただ、このお話は決して閉じた空間でのものではないので、描写の中でも少しずつ現実が侵食する瞬間が出てきます。作中の人物たちがどのように変わっていくのか、最後まで見たいと思う作品です。

会社員 / 林礼春

- 〈本当はさ、売れなかったら負けて世界だから、辞めたんだあ〉 第2巻で、ヒロトがぼつりとばーちゃんに言うセリフ。つい最近、レジェンド級のマンガ家から、同じような言葉（と、私には受け取れた）を聞いたばかりだったので、ハッとした。ヒロトは自分の俳優業について語っているから、もちろん二つの言葉は全然違う意味。ムリやりくっつける必要はない。が、どうしてもなく、重なって聞こえてしまったのだ。 本作は、いわゆる「スローライフ・ほのぼの癒やしマンガ」になるのだろうけど、その根底にある「苦さ」は相当のものだ。しかし、すばらしいと思うのは、ものすごくスムーズに、物語が体にしみ入ってくる語り口のうまさ、絵の見せ方のうまさ。実を言うと、真造圭伍には、その「志の高さ」ゆえ、ちょっと苦手意識を持っていた。（さらに告白すると、松本大洋に対してもそう。）しかし、本作は何もかもが気持ちいい。何度でも読み返したくなる。 候補には入らなかったけれど、松本大洋の『東京ヒゴロ』とも、どこかで響き合っているような気がする。本作はたぶん、本質的に「マンガ家マンガ」なんだろう。〈どうかずっと今のままのヒロ兄でいて〉となつみは願うけれど、私たちが変わってほしくないと思うのは、これからプロになるなつみの方なんだと思います。

読売新聞文化部編集委員 / 石田汗太

- なんでもないような、いち日常漫画と言えそうだけど、家族、友達、そしてそれ以外の人たちとの関わり合いから、温かさや優しさ励みを得られるとても和やかで素敵な漫画。主人公の人としての優しさが伝わってくる。この作品を読んでいると、主人公が従妹に友達に、そしておばあちゃん（亡くなってしまった他人といえば他人）に、そして不動産屋のお姉さんに語りかける何気ないセリフでも、読み手に語りかけて、応援されている気持ちになれる。心優しく温かく包み込まれるこの作品を全年齢におすすめしたい。新生活始める方にもおすすめ。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

- 作品に漂う空気感がとても心地よく、ずっとそばに置いておきたいと思わせてくれる作品。疲れたとき、凹んだときに読みたい最強の癒やし漫画。

あゆみ BOOKS 杉並店店長 / 土屋修一

- 6畳2間に台所。エンジュの木が枝を伸ばす庭と陽あたりのよい縁側。古くても手入れが行き届いた平屋建て……。さりげなくも実は得がたい幸せの象徴のような家と、その家がある東京・阿佐ヶ谷の街を舞台に、相手をいたわり、ただ傍にしようとするのは良きことだとしみじみ感じられるような物語がつむがれる。派手な演出は何もなく、商業マンガとしては地味と言ってよい作品が、各マンガ賞でここまで存在感を放つのは、一日一日、地に足を付けて暮らすことが生きることの肯定に地続きなのだという「あたりまえ」に、照れず正面から向き合っているからだろう。そこがこの作品の得がたさだと思う。おいしいものを食べれば楽しい気持ちになるし、友達ができれば世界がキラキラして見えるし、季節が移ろえば新芽の匂いだって感じられる。新型コロナで痛んだ心に染み入るやさしい雰囲気、ひとときとっぷり浸って読むことができるのは、なんてぜいたくで幸せなことだろう。そして、そんな世界が絵空事にならないのは、作者の姿勢と描きたいことがずっとブレていないからではないだろうか。地球侵略をもくろむエイリアンが東京の大学生になりすます（という突飛な設定ながら日常のエピソードが展開する）「トーキョーエイリアンブラザーズ」、貧困と虐待に直面して虚無に陥った女子高生が小さくとも信じられる場所をみつける「ノラと雑草」を、この「ひらやすみ」と読み合わせてみれば、作者がこだわってきただろう都市論、東京論と、今の時代に生きる人々に向ける視点、視線を共有することができるような気がする。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

- 主人公・ヒロトはとてもポジティブ。時には周りの人をイラつかせるほどのスーパーポジティブ。人と争うことを厭う性格で、損をしたり、傷ついた経験もたくさんあっただろう。それでもいじけることなく自分の根っこを守ってきた優しい彼が放つまっすぐな言葉が、小さな世界を少しずつ変えていく。こんなに読み心地が良いマンガに出会えて、とても幸せだ。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- やわらかい気持ちになります。平屋、気になっていたのですよね。人が恋しくなりますね。友達、良いですね。

書店員 / 桶谷佳代

- 何度も読み返しています。読むたびに、ああ、いいなあと思います。大きな悩みを持つことはやめても、今日のご飯はどうしよう、は絶対悩む。でも、そういう日々の小さいことを大事にして生活したい。ばーちゃんもなっちゃんもヒデキも、クセはあってもいい人ばかり。忙し過ぎてヒロトくんとすれ違っちゃうよもぎさんだって、全然悪い人じゃない。登場人物ひとりひとりに共感しながら、楽しく暮らすってどういうことなのかを考えています。ずっと読んでいたいマンガです。

主婦 / 堀江千秋

- 初めて読むのに、どこか懐かしい。それは主人公のヒロト青年が「変わらない男」だからなのかもしれません。悩んでも仕方がないことでは悩まないし、クヨクヨしない。でも、パッカンと能天気にも明るいかというとそうでもなくて、ときどき愁いを見せたり、見せなかったり。ちっとも頼れる感じがしないのに、でも芯を食ったいいことを言ったりもする。そりゃ、ばあちゃんも心配するし、家をあげたくなるし、きっともっと一緒にいたかっただろうなあと。いろんな生きづらさはあっても、でも、人と人とかかわる限り、何かしらの救いがあるって、どこかで折り合いもつく。しんどいときに本棚にあったら、助けてくれそうな気がする一冊。

ライター・老年学研究者 / 島影真奈美

- 浅野いにお先生、石黒正数先生、高松美咲先生、田島列島先生、松本大洋先生、和山やま先生、(阿佐ヶ谷姉妹さん)の皆さんが推薦している帯を見て読まない人はいないでしょう。読んだらやっぱり最高だったから、先生たちもやっぱりすげーってなりました。マンガ大賞に選ばれたらこの帯も見られなくなってしまうんでしょうか、、、心配。

オフィスオーガスタマネージャー / 樋口健

- 世間の空気が息苦しく感じる今、一番読んでもらいたい作品です。一次選考でも投票しましたが、作中に出てくる人と人の交流がしみじみあたたかくて、ちょうどいい温度感、ぬる湯なのに冷めることなくずっとぽかぽか心地いいような絶妙な温度感のある作品だなと改めて思いました。登場人物はもちろんそれなりに悩み葛藤生きているわけですが、そっと垣間見るようにしてこの優しい手触りの作品を読むと、日々何気なく過ごしている(しかもさほどのんびりもしてない)自分の生活も肯定したくなるような、肩の力がふっと抜けるような、そんな気持ちになります。いわゆる日常系とカテゴライズされるのかもしれませんが、ひとコマにふと出てくるキャラクターの表情から伝わる感情が胸を締め付けられるように豊かで、ああこの人は、この世界のなかで、これまでを確かに生きてきたんだなあ、と読みながら噛み締めてしまいました。今だからこそ、たくさんの人にこの作品を、何にも囚われることなく思いっきり深呼吸するような気持ちで味わってもらいたいと思います。

公務員 / 宇田川結衣子

- 僕はこのマンガで感じる時間が好きです。ちょっとした出来事や何気ない日常と、登場人物の人間くささが読んでいる僕を優しい気持ちにしてくれた読み心地が良いマンガでした。

(株) エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部大介

- 一番騒いでる人が一番つらいわけじゃないし、別に大きい声を出してなくても傷ついたり癒やされたり怒ったり喜んだり、いろいろ忙しくしてますよ、誰もがみんな。「なに」もなくともなんかある。真造先生はそこにいる「人」をちゃんと描いていてくれる。とてもとてもとても良作。

(株)リプラス 商品部 / 池本美和

- 役者を辞めてフリーターになった主人公ヒロト君が、偶然仲良くなったお婆ちゃんからもらった平屋に住む話。美大生の従姉妹や高校からの親友、街の人々。阿佐ヶ谷を舞台に、ヒロト君たちの人間模様が描かれます。のんびりしながらも、ふと胸に残る言葉をくれるヒロト君にすごく親しみを覚えます。とまり木のような存在にみんなが癒やされて、読んでいた自分も笑みがこぼれました。特にお婆ちゃんとのエピソードはどれもグッときて、泣けてしまいます…！心をほぐしたい時にぜひオススメの一冊です。

デザイナー／シンガーソングライター／平松新

- こういう作品にひかれてしまうのは、疲れてるときだからなのだろうか？否、疲れてないときだって読んでいた。この「すこしだらしない」主人公に癒しを感じ、そして日曜日の昼下がりの縁側の陽の暖かさのような、ぽかぽかしたような人間性になんだから紙を飛び出して暖かさを感じるのだ。1巻のお婆あちゃんを、なんのためらいもなく抱きしめる姿や、花をプレゼントする姿。私のなりたいあったかい人間。たまにこういう人現実にもいる。けどとてもまれだ。その優しい人を思い出しながら読むから、勝手に心が癒される。疲れた時は「ひらやすみ」

会社員／西尾美里

- 落ち込んだとき、何もしたくない時そんなときを優しくそっと縁側で肯定してくれるようなこの漫画。たくさんの人におすすめしてます。

フリーアナウンサー・本屋 SENSE OF WONDER／松尾翠

- やわらかい絵柄と相まって、読んでいると心の奥の方があったかくなる作品です。ヒロトの自然体で丁寧な生き方を見てみると、日々少しずつ心をすり減らしながら生きているおそらく大多数（自分も含め）の人は癒され、憧れ、そしていっぽう自分は…？と考えさせられるんじゃないでしょうか。最近ちょっと疲れちゃったなーって人は必見の作品だと思います。

会社員／小野塚博之

- 自然体の優しさが暖かい。赤の他人のお婆あちゃんから貰った平家で暮らすヒロト君。そこにやってきたいとこのなっちゃんは何だか大学に馴染めていない様子。未来が不安で鬱々としてしまう現代で、ちょっと息抜きできる漫画。買った物でも作った物でも、自分が好きだと思える物を食べて、近場でいいから少し散歩に出かけたくなる。

声優／富岡美沙子

- 阿佐ヶ谷での生き方、人生の生き方。ヒロトくんの過去には何があったのかどんどんその世界観にはまっていきます。人生を楽しむコツが詰まっています。今、ちょっと疲れてる人は絶対に読んでください！

ヘアメイク／北原由梨

- タワマンでなく平屋というぜいたく。

マンガ研究／ライター／会田洋

- ほのぼのとした空気感が心地よい。読む人に若い頃のモラトリアムを感じさせる。主人公の過去が少しずつあらわになるにつれて、共感や葛藤を感じさせてくれます！

デザイナー／平沼寛史

- 日々慌ただしく過ぎていく中で、ほっこり暖かい気持ちにさせられる。主人公が自然体で、自分では気づいていないかもしれないが優しさにあふれている。ゆっくりした何気ない日常に癒され、読んでいて心地よい作品。

コミック担当／実松由夏

- 寅さんとかサザエさんを観てる時のような懐かしさと安心感があるけど、二十代の内に出会うか否かで印象が変わりそう。ほんわか日常系の作品は多々あれど、拗らせたモラトリアムのヒリヒリ感を滲ませないながらも感じさせる、ドヤ感無く絶妙な距離感で描けるのは、貴重な才能だと思います。

元書店員／井出麻悠美

- 優しくのんびりした世界で、これこそ癒しという作品。

医師 / 岸本倫太郎

- とってもやさしい物語。人ってやっぱりいいなあ。ヒロト君の天然すぎる人柄がしみわたるお話。読んでると胸がきゅっとなる瞬間がいっぱいです。

ブックエース上荒川店・コミック担当 / 倉本かおり

- 読むことで癒やされてます。そしてヒロトくんの生き方にも憧れています。推す理由はそれかもしれません！

ロングランプランニング / 小森和博

- 楽しみが二つ。これからどんなゴハンが出てくるのか。彼らはどんな風に秋や冬を過ごすのか。じっくりのんびり、味わいたい。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 温かさや懐かしさやさしさがゆったりと混ざった感じのマンガです。登場人物はどこか生きずらさを抱えた人たちばかり。そんな人たちの交流も平屋とその周りの風景がすべてを優しく包んで温かい話に変えてくれているような気がします。こんな町、こんな家とその周りの雰囲気にも包まれて生活したいな。

システムエンジニア / 廣瀬公将

- ゆるりと流れていく日常と、そこに暮らす人々への「愛おしさ」が、満ちに満ちている作品。主人公 生田ヒロトがこの世界の人々を変えていく様子に、バシャバシャと心を洗われます。

音楽家・閃き堂店主 / 谷澤智文

- じんわり、あったかくなる部分と、なんとも恥ずかしくなる青春の塊の気持ちを思い出させてくれます。

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- へらへら気楽そうに生きてる三十前後のヒロト。特技はおばあちゃんに気に入られること。時々夕食をご馳走になっているおばあちゃんが急死して、持ち家を引き継ぐことに……。大学生の従妹も一緒に住みはじめ……。とにかくおばあちゃんに白いアジサイを贈れるような男でありたいと思う。

鳥取県立図書館司書 / 野間勤

- クセがあって不器用で、人間臭くて温かくて、登場人物がみな愛しい。真造先生の描く人は本当にいいな、好きだなと感じる。そして、なかなかうまくはできないんだけど、こうありたいな、これは忘れちゃいけないなという小さくも大切な気持ちを、主人公のヒロトが思い出させてくれる。ちょっと疲れたとき、ふと手を伸ばせばきっと優しく寄り添ってくれて、素朴で美味しいご飯が食べたくなくて、きつとちょっと元気になれる。そんな素敵な作品です。

会社員 / 伊東敬祐

- 登場人物たちの日常をまったりと見届けたい作品。

ブックファースト新宿店 / 渋谷孝

「女の園の星」和山やま

選考員コメント・1次選考

- ビビッドに描かれる女子高生の無邪気さ・凶暴さ・能天気さと、淡々としていながらどこかずれている星先生はじめとする教師陣が最高です。2021年に一番笑ったマンガ。

漫画読み / サイトウマサトク

- もはや面白すぎて説明不要の域にまで到達してしまった気がする和山先生のマンガですが、今作の2巻も素晴らしかったです。絶妙に突拍子もない展開の面白さもさることながら、高校生くらいの子たちのナチュラルだけれどどこか妙に人間味の無い不気味な会話のおかしさとか、世界の切り取り方が唯一無二です。オフの日の小林先生のTシャツはNUMBER GIRL。

株式会社アニメイト アニメイト秋葉原 / 岡部真矢

- もーっ大好き！漫画好きには既に知られている作品だろうけど、まだ2巻にして独自の世界観がありゆったりと流れる時間の中に急にむちゃくちゃ笑かしてくれる。堪えられない。

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- 女子高のことは知らないけど、こういう日常が繰り広げられているのだろうかと思えるほど楽しい。何よりも星先生を始め、登場人物たちのキャラ設定が秀逸！

ロングランプランニング / 小森和博

- 女子校の男性教諭主人公という字面から思い起こされるような展開や話は一切無く、ただただ絶妙に一般的発想からはズレた生徒とのやり取りや同僚との会話だけで面白さを引き起し、絶妙にワンテンポ遅れてくるズレた笑いは作者の卓越したキャラ作りと日本語能力の成せる技であると感嘆しきり。

住職・ライター / 蟬丸P

- うっかり静かな喫茶店で読み始めてしまい、あまりに何度も吹き出してしまうので、耐えきれず帰宅しました。僕は漫画を読みながら声を出して笑ってしまうということはあまりない人間なのですが、女の園の星はものすごく巧妙にトリガーが仕掛けられているように感じます。どのエピソードもいちいちツボに入ってしまう、人目をばからず笑ってしまう…。何か苦しいことがあったときにも、これを読んだらどうでもよくなってしまいそうな気すらします。そういう意味で、この時代に最も求められる漫画になり得るのではないか、と。

音楽家・閃き堂店主 / 谷澤智文

- 女子校教師が主人公のありそうでなさそうでやっぱりありそうな日常の話。2巻のクワガタボーイの話で自分でも引くほど笑いました。

会社員 / 津田圭

- 1巻の時も推させていただきましたが、2巻目も全くパワーは衰えず和山やまワールド全開だったので今回も推させていただきます。先生達の謎の生態も面白いのですが、女子高生たちのだる〜い生態もリアルでくすっとさせられます。うどんまん、食べてみたい。

会社員 / 畑中瀬路奈

- 本当に好き。女子高生の会話の意味不明な部分とか理解し難いところの表現が秀逸で、体の奥から込み上げてくるおかしさは和山先生だからこそできることだと感じる。この異星人かもしれない女子高生と相まって、星先生と小林先生の掛け合い(?)も読んでいる私の心をぎゅっと掴んでくる。

会社員 / 八重田幸子

- 2巻もめっちゃくちゃおもしろかった。昨年も、たしか一昨年も（あまりのおもしろさに）上位に2作入ってしまい、結果として票が割れて受賞を逃しましたよね。今年こそは！私が考えるに、落語の笑いが最も近いと思う。落語には超有名噺を上げただけでも「黄金餅」、「時そば」、「饅頭怖い」、「目黒のさんま」等と枚挙に暇がないほどフードネタが多彩だ。題名がフードでないネタでも大抵、酒かお茶か煙草くらいは登場する。食を笑うことは根源的な笑いで、ひとはそれに対して無力だ。年代も性別も関係なく、何時でも何度でも心に不意打ちを“喰らって”しまう。和山さんも落語と同様にフードを使って意外なシチュエーションを作り出すことに長け、常にそこはかとない可笑し味を創出する。登場人物たちの些細なやりとり思わず声を出して笑ってしまうのは、一度や二度ではすまない。しかしまた、どの作品も純然たるコメディやギャグ作品とも言い難い読後感があり、この機微を読ませる可笑しさは千語万語を費やしても表現不能だ。

菓子研究家 / 福田里香

- やっぱり面白い。女子校に通ってた人は是非とも読んで欲しい懐かしい思い出が蘇ります。実写版のドラマをやってほしいなあ

カメラマン / 平沼久奈

- 女子高ってこんなところなのかなあという秘密を覗いたような気持ちと、自然体すぎる先生たちくにクスクスと笑ってしまう楽しさ。まあ、理屈なんてどうだっていいわ、高校ってそんなもんだからなー、ってのが全体を占めている。ちなみに僕の行ってた高校はこんな若い先生が全くいなかったんで、恋愛や結婚ネタなんて完全にフィクションにしか思えないけどね。でもいいんだ、楽しいんだもん。

ブランド October Beast 代表 / 北山友之

- 安定したシュールな笑い

会社員 / 齋藤隼

- 唯一無二の絵柄とテンポとセンス。もう何十回と読んでいるはずなのに、何度読んでも笑ってしまいます。この味わい深さと面白さはこの漫画でしか味わえないと思うので、きっとまた何度でも読み返してしまうのです。あとどうしたってみんな星先生のこと好きになっちゃう。あんな先生居たら人生狂います。

女優 / 齋藤明里

選考員コメント・2次選考

- やっぱり、何度読んでも笑ってしまう。そして考えてしまう。こんなふうに落語的笑いを視覚的に堪能できるなんて。奇跡。

菓子研究家 / 福田里香

- ローテンションギャグの醸す空気感がまさに絶品。情報と場面の取捨選択も巧い。

書評家 / 福井健太

- 女子高生の日常のアホさ加減がとても好きです。ふっと笑ってしまいます。外で読めません。

公務員 / 東くるみ

- 女子校時代のあの懐かしさ。そして面白さ！是非とも実写化をお願いしたいです！

カメラマン / 平沼久奈

- 独特の間合いと一瞬遅れてくる笑いの破壊力は抜群で、今までの女子校に於ける男性教諭を題材とした作品では見たことの無いパターンを提示され、素直に「これはやられた」と脱帽する。今までのマンガ大賞エントリーでもシチュエーションの妙で候補に上がることは多かったのですが、今作品は突破力が極まった感があり文句なしで推させていただきます。

住職・ライター / 蟬丸P

- 大好きで大好きで、今1番新刊を待ち望んでいる作品です！漫画好きには既に知られている作品だろうけど、まだ2巻にして独自の世界観がありゆったりと流れる時間の中に急にむちゃくちゃ笑かしてくれる。電車の中で読んでしまった日には堪えられない。

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- まだ1位を取ってなかったのかとびっくりするくらい面白い作品。これは男女問わず好きになれます。先生のワードチョイスやギャグセンスが高すぎて電車では絶対に読めない漫画です！面白い！絶対にみんな読んで！

ヘアメイク / 北原由梨

- 圧倒的に上手い。しかし「上手いマンガ」にありがちな「あざとさ」がまったく感じられない。「読者に愛されるように」という以前に、「著者自身が愛してやまない」キャラクターたち。

角川文庫編集部部長 / 関口靖彦

- 会話の妙をここまで楽しませてくれる漫画は初めて読んだかもしれません。ちいさな引っ掛かりこそが人が忘れてはいけないものですね。

コメディアン / インコさん

- 何度読んでもゆる～っとぬる～としたテンポがたまりません！脱力したのち、フフッとさせる和山ワールド…。あと、先生同士の会話もちろん好きなのですが、生徒同士の会話もう凄くリアルで…！女の子たちのリアルなかわいさが丁寧に描かれているところも、おすすめしたいポイントの一つです

会社員 / 畑中瀬路奈

- ありそうでなさそうで、でもやっぱりありそうな女子高の先生と女子高生の話。ただそれだけでこんなに笑える作品になるのか、と思いました。クワガタボーイ大好きです。

会社員 / 津田圭

- 女子高の日常ギャグマンガ、というとしも蓋もありませんが、まあそうです。ザ・日常。で、そのギャグが秀逸。電車の中で読んでいて、笑いをこらえるのに必死でした（いや、むしろその読み方を勧めます。味わい深いです。）。真顔で面白いことを次から次へと言われることがこんなにも耐えがたいこととは思いませんでした。

第75期司法修習生 / 三葛敦志

- ポチ（クワガタ）の話が好きです。リーダー格のクラスメイトが小脇にポチを抱えるシーン、好きです。小林先生、謎多いなあ。

書店員 / 桶谷佳代

- いやもうこんな先生たちがいたら最高。だけどそこにまた魅力的な生徒たち登場。何度読んでも笑える中毒性のある漫画です。

ブックエース上荒川店・コミック担当 / 倉本かおり

- 日常の何気ないシーンを切り取って、毎回だれずに読者の斜め上を展開していく和山ワールドに1巻からハマっています！まだまだいろいろ隠し玉を持っていそうな今後の展開を楽しみにしています！

ロングランプランニング / 小森和博

- 女子高生の無軌道な自由っぷりが無茶苦茶楽しい。もちろん先生たちも自由で素っ頓狂で味があって実に良い。ダウンテンポなのにこれほど爆笑できる作品を描けるのはなかなか稀有な才能。全方位全角度で笑えて良い作品。

漫画読み / サイトウマサトク

- ニヤッとしたり、ふふってなったり。単純に爆笑ギャグという事ではなく、日常を切り取った「日」「会話」や「間」「空気」を傍観者だから笑えてしまう。「今日こんな面白い事があった」という誰かの話を映像で直接見ているような。それがたまらなく面白く、なんだか愛おしく、自分のことも思い出す。人間臭くて楽しい作品。こんな人、いるよなあ。

図案家 / 橋本寛子

- ずっと平熱だけれど、どこかが確実におかしい、そんな奇跡のようなバランスの漫画です。入りやすい世界観だからフワッと読み始めると、いつの間にか術中にハマリ抜け出せなくなっている……。そんな幻術のようなギャグにやられてしまいます。最も優れたギャグ漫画は、それがギャグだと気づかないうちに笑わせてくる（今考えた名言）……！

株式会社アニメイト アニメイト秋葉原 / 岡部真矢

- 大きな流れや山場はなく、日本全国どこにでもある女子高の教室で似たような日常が繰り広げられているのかもしれないが、とても丁寧な描かれた絵とユーモアのセンスで「空気感」を巧みに表現している。『動物のお医者さん』や『よつばと！』のように長く読み継がれる作品になるのだろうか。ゆっくり長く続いてほしい作品。

弁護士・三村小松山縣法律事務所 / 三村量一

- 「これが商業誌初連載?!」と疑いたくなるほど圧倒的なセンスと貫禄を持ったギャグ漫画だと思います。日常系学校モノにありがちな安易なあるあるネタでは終わらず、一話一話高い構成力と絶妙な間が笑いだけでなく上手さとしての面白さを引き上げていると感じました。ていうか絵柄が（あの作者に似てるなあ）と思ったら、それを作者がネタにした時には本気でズルいと思いながら声出して笑いました。ズルい。

バーテンダー / 村井真也

- とある女子校の先生や生徒たちの日常。登場人物たちは至って真面目に普通に過ごしているのに面白すぎます。こんな学校、ぜひ見学に行きたいです?。

主婦 / 紺野泉

- 女子高ってこんなところなのかなあという秘密を覗いたような気持ちと、自然体すぎる先生たちにくすくすと笑ってしまう楽しさ。まあ、理屈なんてどうだっていいわ、高校ってそんなもんだからなー、ってのが全体を占めている。ちなみに僕の行った高校はこんな若い先生が全くいなかったのも、恋愛や結婚ネタなんて完全にフィクションにしか思えないけど。でもいいんだ、楽しいんだもん。

ブランド October Beast 代表 / 北山友之

- 女子校で国語教師をしている男性の星が主人の和山やま『女の園の星』は、ベランダから犬がぶら下がっているビジュアルだけで大爆笑だった 1 巻に負けず、第 2 巻でも“女子校あるある”エピソードが連発して繰り出される。通学途中の駅で毎朝降りる女子生徒はいったい何をしているのか。自習時間にはどのような会話が繰り広げられるのか。ありそうな上におかしいエピソードを重ねて読者を笑いの沼に引きずり込んで話さない。第 1 巻に引き続いての候補入り。大賞を与えて実写化されて笑いの渦を全世界に。

書評家／ライター／タニグチリウイチ

- 本作者の独特の間やユーモアのセンスが光る作品だと思います。別作品にも感じるのですが、この作者だからこそ描ける独特の世界観がとても好感がもてます。

デザイナー／高永貞光

- 私は共学育ちだけど女子校に通ってみたかった。異性がない世界の方が「ちょっとはみだしがち」な本流に乗り切れない人もおおらかに受け止めてくれる気がする。和山先生は男子校の世界も描いてるしそちらでも似たような空気を感じる。思春期に女子校で星先生みたいな人に出て、同級生といじり倒したかった。そして多分彼女たちは 20 年後の同窓会とかでも星先生っていたよね？から始まって、あの頃の様々を思い出したりするのだろうな。

元書店員／内野智未

- ノミネートにあたり久々に読み直そうと 2 巻を手にとった瞬間、表紙の小林先生で笑ってしまいました。寄生獣のくだりはズルい。。そしてタペストリーの回はもっとズルい。星先生のクワガタ回も面白いですが、2 巻では小林先生のキャラが炸裂していて、和山ワールドはやっぱり凄い！！和山先生の癖の強い独特のセンスが女子校という世界観とぴったりハマってて、和山先生作品の中では私は一番読みやすいです。

出版社営業／佐々木つむぎ

- 女子校に勤める「星先生」を中心に、その同僚や生徒の日常で起こる出来事をコメディ調に描く本作品。読後に最初に思ったのが、久しぶりに声を出して笑ったな、ということ。登場人物の癖が強い。とにかく強い。しかしはちゃめちゃんな奇人変人が描かれているわけではなく、「探せば周りにこういう人実はいそうだな……」と思わせられるような絶妙な癖なのである。これには参った。この推薦文を書かせていただいている間も読み返しながらクスクス笑い、何回読んでも自身のツボで吹き出してしまう。落ち込んでいた時に大笑いさせてくれた小林先生には感謝しても仕切れない。是非多くの方に読んで欲しい。そして遠慮せずに声を出して笑っていただきたい。

会社員／杉佳尚

- 天才的なワードセンスと味のある絵柄に魅了されっぱなしです！小林先生のこと、もっと知りたい……

会社員／竹本慧

- めっちゃ笑えます。セリフの面白さはもちろんの事、登場人物の表情や独特の空気感で笑わせてくるセンスが尖りすぎていて最高です。どうしたらこんな話を思いつくのかほんと謎…。読み進めるたびにキャラの魅力がどんどん引き出されていっているので、早く続きを読みたくて仕方ありません。個人的には小林先生がとてもお気に入りです。

会社員／小野塚博之

- 言わずもがな、読んで無い人がいるのか？クワガタボーイのキラキラシールが欲しいです。

Hair Make Lounge tetote 代表／力丸真

- いろんなところで推薦されてるので、そういうのはやっぱり読んだ方がいいと思いました。絶対に面白いもの。

オフィスオーガスタマネージャー／樋口健

- ま、だいたいみんな油断して生きてるじゃないですか。人生の99%は。 1%、いいことしたり悪いことしたりしていると思いますが、こっちの99%の方が、圧倒的に人生の真実で、大切なんじゃないか、と思うわけです。普通は、そのいいこと1%の方が、マンガになりやすい訳ですが、この、『女の園の星』は、女子校に翻弄される男性の先生たちはもちろん、先生を軽やかにからかっている生徒たちも、全員、99%の方しかマンガに描かれてません。ただ、意識できないから99%の部分って普通は雑にしか扱われないんだけど、異常に緻密に、でも気合い入っちゃうと99%らしくなくなっちゃうから、ということで、緻密に息が抜ける、のです。一体どうしたら、何の作為もなく、犬を連れてホームルームを行う先生の、写真の様な完璧な構図のコマが登場させられるのでしょうか。こんな緻密な油断、なんでマンガにできるのー！！！！

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

「チ。ー地球の運動についてー」 魚豊

選考員コメント・1次選考

- 読むのが疲れるので軽い気持ちで読めないくらい、濃厚で狂気じみた精神性が渦巻いてる。重たいけど読まずにはいられない。

PENICILLIN / HAKUEI

- ロシアのクリスマスは1月7日。これはロシアを含む正教会系の用いる暦が、現在世界で広く使われているグレゴリオ暦に基づくものではなく、それ以前の標準であったユリウス暦に基づくことによる暦年のずれに起因する。ローマ帝国の分裂の後にビザンチン帝国から東に広がっていった正教会が、より現実の天体運動に則した新たな暦を採用して広めようとしたローマ・カトリックの姿勢に従わずユリウス暦を使い続けたことが今日までつながっている。われわれが生きるこの世界、宇宙をつらぬくさまざまな法則を見極めようとする科学の営みと、一方異なる角度からわれわれの生活を円滑にしようとした宗教とのせめぎ合い。この物語はその葛藤を二項対立に留めることなく描いている。

会社員 / やのこうじ

- 学ぶことも自由ではない知識が一部の人々だけに与えられる時代に、命懸けで自分の信念を貫き通す。このマンガはそんな生き様を描いたストーリー。

(株) エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部大介

- 前回のマンガ大賞選考時は対象がまだ1巻のみで、票を投じる判断は見送った。でも今回は迷わない。巻数を重ねるごとに勢いが増し、「チ。」を巡って動き続ける作品のパワーは圧倒的で、本物だった。決して美麗ではないが、淡々と物語に引き込まずこむ、恐ろしさを携えた魚豊先生のタッチ。そして計算された巧みな台詞の応酬に、毎巻衝撃を受ける。ついに物語は第三章に突入し、「チ。」のバトンがこれからどう繋がっていくのか。目が離せない。

会社員 / 伊東敬祐

- 一巻の出来が本当に素晴らしいと思う。もちろんその後も面白い。夢半ばで散ってゆく者たちの気持ちが熱い！

bar 図書室店主 / 岡部愛

- 舞台は中世ヨーロッパ。これは地動説と天動説を巡って、'血'ではなく'知'をうけつぐ大河ロマンです。自信の「好奇心」に殉ずるということは、社会の同調圧力や権力に反逆する事、つまり「怖さ」と向き合い「残酷」に耐え、さらにそれは人の持つ理性に寄り添って受け継がれて行くという事。自由と感動、それが本作のテーマなのだと思います。既に知られている作品ではありますが、刊を増すごとに、次こそは！と期待が高まります。非常にグロテスクな表現が多いのですが、歴史漫画が好きな人はにオススメです。

会社員 / 佐藤優

- 禁忌である地動説が書かれた本を巡る話。中世ヨーロッパの科学と宗教の複雑な関係性を背景に、しっかりと紡がれ、受け継がれていく想いの行く末が気になります。作者の作品に込められる情熱と絵の気迫が凄まじく、見開きで鳥肌が立たせられることもしばしば。史実をトレースするより、フラットな気持ちで読んだ方がよりのめり込めると思います。

会社員 / 三浦佑樹

- 閉塞的な中世ヨーロッパを舞台にした、オムニバス形式による物語。通奏低音としての「地動説」。「好奇心は猫をも殺す。」とはイギリスのことわざですが、地球が動くという、C教（なぜか伏字）の最大のタブーを、それでも暴かざるを得ない知性と好奇心の“暴走”は、知性の虜（とりこ）である21世紀の我々にある種の感動を呼び起こします。学生さんや、若い世代の方々に特に読んでほしい作品です。「地球を、動かすでしょう。」なんて、しびれますよね。

第75期司法修習生 / 三葛敦志

- 今、当たり前のように受け容れている考えは、実はこれまでの人々が紡ぎ、後世に遺してきた価値あるものだという事を教えてください。決して大袈裟では無く、それこそ命がけで。

教師 / 持丸宏司

- 圧巻のストーリー展開と、毎巻気になるところで終わらせる構成の上手さと伏線回収が素晴らしい！この物語がどこへ向かうのか、必ず最終話まで見届けたい作品！

ロングランプランニング / 小森和博

- 現在のわたしたちと世界とも重なる物語で、続きが楽しみな作品です。

自営業 / 小野裕子

- 新刊を読むたびに気が遠くなるほどに面白いです。この先どうなるのかを知っているような気もするけれど、きっと知らないんだな……と思わせられる不思議な、、、なんなんでしょうね、この感じは。作中に出てくる人物たちが何かに魅せられているように、自分もこの作品からえも言われぬ何かを感じ、魅せられていていのでしょうか。兎に角、引き込まれてしまっています。

イロイロ屋 / 杉本善徳

- 科学技術の徒としてはいろいろ思うところのある作品ですが、それ以前にエンターテインメントとしてよくできてるなーと率直に思います。それと、C教圏内で現代でどう受け取られるのかはちょっと興味があるかな。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

- 昨年のマンガ大賞にもノミネートされましたが、巻を重ねるたびに面白さの重力も増していくよう。魚豊先生ならではの理知的なセリフと、エモーショナルなシーンの対比が素晴らしいです。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- タイトルの「チ」の字には、いろんな意味が込められている。天に対しての「地」、禁忌とされる宇宙の法則を追い求めてしまう「知」への探求、血縁はなくとも知識欲で連綿と繋がる「知の血」族のような人々。そのために流された「血」の多さにドキドキしながらも読む手を止められない。

菓子研究家 / 福田里香

- まさかまさかの展開が面白い。最後はどうになってしまうのか、どうオチをつけるのか楽しみです。

広告会社 プランナー / 平沼良章

選考員コメント・2次選考

- 昨年に引き続きのノミネート。作品力からいっても順当。「人間」という生き物を考えさせられます。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

- 知、地、血。飽くなき探究心によって連鎖する静かなるたくらみはいつ成就するのか。科学が神を眠らせ、宇宙のからくりにもふれるまでを描く。壮大な物語に震える。

小説家 / 海猫沢めろん

- 「あなた方（異端審問者）が相手にしているのは…知性だ。」「僕の命にかえてでも、この（地動説の）感動を生き残らす。」。後の歴史を知り、科学の時代に生きている我々からすると、地動説に関心を持つだけで極刑に処せられる時代があったことを想像するのは容易くありません。これは、そんな時代、中世ヨーロッパにおいて、地動説に憑りつかれ、命で知識をつないでいく物語です。そしてそれは、やがて「地球を、動かす」こととなったことを我々は知っています。大切なのは結論ではなくその過程だということを教えてくれる素敵な物語です。

第 75 期司法修習生 / 三葛敦志

- 哲学的な漫画は数あれど、ここまで壮大な物語は稀なのではないでしょうか。大河ロマンさながらの形式を取っているのに、物語の期待感は巻を追うごと高まってきており、今年も一押しとさせていただきました。舞台は中世ヨーロッパ。これは地動説と天動説を巡って、“血”ではなく“知”をうけつぐ物語です。この漫画の主人公“たち”は自信の「好奇心」に殉じ、周囲の同調圧力や権力に反逆します。それはつまり「怖さ」と向き合い「残酷」に耐える“覚悟”と“葛藤”があるということで、それは必ずしも報われません。しかし主人公“たち”は理性に寄り添っているからこそ、人へ人へとその“意思”は受け継がれて行来ます。その瞬間に生まれる自由と感動、それが本作のテーマなのだと思います。去年時点で既に広く知られている作品ではありますが、刊を増すごとに、次こそは！と期待が高まります。非常にグロテスクな表現が多いのですが、歴史漫画が好きな人にはオススメです。

会社員 / 佐藤優

- 面白い……いや、それ以上なんだが、それ以上の表現を僕は知らない。。強いて言うなら「面白すぎる」というやつか？ いや、それ以上なんだよな……。うーん。とりあえず、とんでもなく凄い。毎巻毎巻、読後に目眩がするほどに。

イロイロ屋 / 杉本善徳

- 地動説という現在の常識が「非常識」だった、しかも肯定すること自体が命がけだった時代。禁忌の真理に手を伸ばしてしまった者たちの感動と興奮、とまどいと恐怖。魚豊先生ならではの理知的なキャラクターたちが、理性を超えた感情をむきだしにする場面の数々に、心揺さぶられます。自分の常識や価値観をゆるがす「何か」に出会ったときどういう態度をとるのか、読み手にも問われているかのよう。連載はクライマックスのようですが、「知ってしまった」者たちが去り、また現れる、世代を超えてつながる「知のリレー」がどう帰着するのか楽しみです。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 命がけの好奇心の物語。真の理に気づいてしまった人々が命をかけて繋いでいく展開に心を驚掴みされました。もうすぐ終わってしまうようですが最後まで単行本で見届けていきます！

ロングランプランニング / 小森和博

- 読めば読むほど、奥底の何かが着火する！文句なし！

フリーアナウンサー・本屋 SENSE OF WONDER / 松尾翠

- 昨年の推薦コメントに何を足せばいいのか！ 人類の初期衝動のその勢いのまま、大賞まで登ってほしい。昨年度の5巻では物語の円環が、ひとたび閉じ、また次の輪へと繋がっていきます。しばしば人間の運命は車輪に例えられますが、ここでは、人々の運命が天体の運命に重なります。「チ。」は地球の地、人間の知性の知。昨年末に届けられた最新刊では、いよいよ革命の火蓋が切り落とされます！文字通り！

教員 / 戸田穠

- タイトルにもある通り地動説についてのお話ですね。地動説に関する史実がどうだったのかは不勉強なのでよく知らないのですが、数学的なイメージと、きな臭さと、ぐいぐい引き込まれる展開が素晴らしいです。このまま最後まで突っ走って欲しい。そんな気持ちでこの作品を皆様にお勧めします。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

- 「地動説」を、「知性」をもって信じ、「血」であがなう物語。 観測的事実とその整合性を信じる感性を元に、中世の宗教的な教義に意義を唱えるなんて、言葉狩りと揚げ足取りが渦巻く現代の SNS 程度のもではなかっただろう。1 巻 16p の「世界、チョレ～」から始まる、妥協の産物である現実を生きる各章の主人公が、一瞬の心の惑いのあとに真実の人生を取り戻し、最期を迎えるまでに、悲劇を超えた、真理に殉じたものだけの充実を手にする。これは、論で説かれるべきではなく、物語でしか描けない。各章の主人公が衝撃をもった入れ替わり方をする異例な、通常ではまず有り得ないこの構成以外では描き得ない物語は間違いなく、今までの物語とは異質の価値を提供している。 この物語は、「最後まで出来上がっている」（作者談）という。 絶対に、リアルタイムで読みたいマンガ。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

- 天文学や宗教、歴史といったとっつきにくそうなテーマながら、1 巻でしっかりと引き込まれ、そこから毎巻打ちのめされながらあつという間に 6 巻まで来てしまった。まさに怒涛の展開が続く。色鮮やかとはほど遠く、全体的に重く冷たい雰囲気ながら、要所で凄まじい熱を発する魚豊先生の画もまた魅力的。言ってしまうと結末のひとつは見えているはずなのだが、物語をここからどう持っていくのか、楽しみで仕方ない。食わず嫌いな人が多いかもしれないが、この「チ」を巡る物語の熱量は、他ではなかなか体験できないはず。ぜひ一度触れてみてほしい。

会社員 / 伊東敬祐

- 文明が生まれ、いまではインターネットによって世界が常時接続されるようになった、その原動力には、なにかを知りたい、解き明かしたいと思う人間の衝動があるのでしょうか。それは崇高な使命感でも合理的な問題解決でもなく、本人に制御できないプログラムのようなもので、ひとたびその指示を受ければ抗えない。狂気と区別がつかないもの。それが個々人の人格を超えて現れるとき、わたしは美しいと感じるのです。

会社員 / 末永龍介

- 合理的に物事を考え、普通にしていれば、世渡り上手で不自由なく生きられたかもしれない主人公は、「地動説」と出会ってしまった。情熱というより狂気に近い思いで研究を続けた者たちの物語。タイトルも目を引き、非常に奥深い。

コミック担当 / 実松由夏

- チは地球の「地」かと最初は思いきや、それ以上に「知」であり「血」のことだったと、物語が進むごとに意味が広がっていくのは圧巻の一言。「C 教」とか「P 国」とかは、歴史ものとも一線を画すという作者のサインなのだろう。形而上ファンタジーというのか、哲学的寓話というのか、とにかくジャンル分類不能なのがすごい。本作はマンガの地平を確実に広げたと思う。ただ、読むのはつらいです。特に第 5 巻。これほど読者に精神的負荷をかけるマンガを、エンターテインメントと言っているのかどうか。もう少し、ナマでない見せ方があるのではないかな……。しかし、この「つらい読書体験」が、本作の最大の価値だということも、よくわかるのです。

読売新聞文化部編集委員 / 石田汗太

- 読み進めるほど肉体的にも精神的にも痛々しくて辛くなるのですが、すごいマンガだと思います。正しいとされていることを覆すことの難しさ。正しい、正しくない、自分は間違っていたかもしれない、でも真実は知りたい。矛盾と葛藤と、死してなお消えることのない知的探究心（という一言で片付けるにはあまりにも重いけれど）をまざまざと見せつけられて、ため息が出ます。皮肉な運命を交えた展開にも、うわ?! となりました。歴史を知っているのに、固唾をのんで読んでしまいます。

主婦 / 堀江千秋

- 知識欲や、真実を追い求める心は人間だけのもので、人間を人間たらしめていているものだとおもっています。このマンガでは、真実を追い求める難しさと、尊さを描いていて、それは人間の美しさをそのまま描いているものだと考えています。だからこそ、このマンガは心を打ち、人の心に残ります。このマンガは、昨年もノミネートされていて読んだ作品で、面白いと思いつつも投票しませんでした。でも、今年の選考対象となった5巻、6巻で更に面白くなり突き抜けました。今こそ、自信をもっておすすめできるマンガだと思います。

システムエンジニア / 廣瀬公将

- 中世の宗教的な倫理観は現代とはかけ離れているという一般的な知識はあれ、作中で描かれる地動説に殉教する主人公たちの運命はあまりに過酷だ。それでも「真理」に誠実であることと自らの命を引き換えにする彼らに謹んで祈りを捧げたい。人の価値は「真理」に相対した時に決まるのだと思うのだ。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

- 1,2巻くらいを読んだときは、地動説に関するマンガなのかと思ってた。今から思うとものすごく狭い評価基準だったと反省している。なんで「地。」ではなく「チ。」とカタカナで書かれていることをもっと深く考えるべきだった。おそらく「知」にも通じているのだろう。このマンガの中では、自分の生命よりも地動説を優先して、生命を落としていく人たちが数多く描かれている。凄惨な拷問にかけられても地動説が受け継がれていくことに命をかけた人々。人間が持つ知的好奇心の飽くなき躍動を感じさせてくれるマンガだ。

鳥取県立図書館司書 / 野間勤

- イカれ具合はやはり群を抜いていると思いました。

大日本印刷 / 佐々木愛

- 天動説と地動説という、少し難解なテーマだけに、誰もが楽しめるわけではないのは十分承知の上で、あえて推したい作品。そして行間からいろいろな考えが得られる上に、今のインターネット社会を考えるうえで、指標となる作品なのかも？ 当たり前なのが当たり前でない。常識って何？と思わずにはいられません。そして読めばわかるタイトルの絶妙さ！

サブカル専門ライター / 河村鳴紘

- 作品に流れる意志の強さが、衰えないどころか強くなってる感じがして毎回びっくりします。知に直結する本を仕事で扱っているので、身が引き締まる感じです。

図書館員 / 金田健太郎

- 誰もが教育を受けたり、自由な思想が許されなかった時代に信念を貫くことに命を懸ける想いは何なのか！？タイトルの「チ」の意味は！マンガだからこそできる表現が最大限に活かしたマンガがここにあり。

(株) エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部大介

- このマンガをすごいと思わない人はいないんじゃないかな？濃厚で狂気じみた精神性が渦巻いてる。何かの合間とかに軽い気持ちで読めない。覚悟して読まなきゃいけない作品。

PENICILLIN / HAKUEI

- 中世ヨーロッパ当時に禁忌とされていた地動説が書かれた本に纏わるストーリーで、その思いが受け継がれていく様を紐解いていくわけですが、構成が見事で且つ作者が話に込める情熱と絵の気迫が凄まじく、グイグイと引き込まれます。地球が自転、公転していることを当然知っている我々が読むこのお話で、当時の背景や人物への思いを馳せる、共感や体感ができるこの作品は素晴らしいと思います。

会社員 / 三浦佑樹

- 人間の持つ「知」への欲望。殺されても知りたい。憑かれたように突き進むキャラクターたちの、命がけのドライブ感が、読者の意識を作品世界に引きずり込む。

角川文庫編集部部長 / 関口靖彦

- 削ぎ落とした壮大さを感じさせる演出にシビれました！

コメディアン / インコさん

マンガ大賞2022 ノミネート作品

ビッグコミックスペリオール / 小学館

「トリリオンゲーム」 稲垣理一郎、池上遼一

選考員コメント・1次選考

- ムチャクチャでサイコーだな……何なんだこの作品は。。。笑いやでもムチャクチャではあるんだが、破綻しているわけではなく、辞書で引いて出てくるような意味を超越しているような……まあでもムチャクチャはムチャクチャだな（笑）兎にも角にも面白いです。

イロイロ屋 / 杉本善徳

- ものすごく速いテンポで各話の内容がとても濃いのですが、何故かスラスラ読めてしまう圧倒的構成力を感じます。2人の主人公がどの様に登りつめていくのか今後の展開も楽しみです！

会社員 / 竹本慧

- 二人の若者が財界で成り上がるサクセスストーリー。仲間集めやトリッキーな策略を盛り込み、明快なプロットを突き進める王道エンタテインメントぶりが好ましい。

書評家 / 福井健太

- 1兆ドルを稼ぐスタートアップ企業ストーリー。とにかく夢が大きく勢いが良い！奇をてらった発想の連続かと思いきや、地道な努力や綿密な計算が必要なことも多く描かれ、無理難題を越える際には妙に納得してしまう。時に騙し合い、時に正面からぶつかる、頭脳と体力を使ったトリリオンゲームに興奮させられます！そして、主人公2人の友情と人情が描かれているのも、見どころです。

デザイナー／シンガーソングライター / 平松新

- 思っていなかったこのコンビ。テンポが早く、あっという間に主人公たちが目的を達成してしまいそうと思わせてこの後色んな敵が現れたり、戦いがあるのか…と思ってしまう！

デザイナー / 平沼寛史

- 1兆ドル稼ぐなんて夢にも思わないような話を、ひょっとしたらできてしまうんじゃないかとワクワクさせてくれるストーリーとキャラクターに感服です。いま最もスカッとできるマンガです！

Books アイ蒲生エキナカ店 / 野口忠義

- あの池上遼一が今のITスタートアップ業界のことを描いてくれるだけで面白い

会社員 / 齋藤隼

選考員コメント・2次選考

- 1961年のデビュー以来、『男組』や『クライングフリーマン』といったヒット作を生み出し続けてきた大ベテランの池上遼一がマンガ大賞に初登場。『トリリオンゲーム』は『アイシールド21』で村田雄介、『Dr.STONE』ではBoichiと組んだ稲垣理一郎の原作で、不良学生が権力に挑む『男組』や、アメリカンフットボールが挫折を経て悪の巨大組織を倒す『傷追い人』の凄惨さとは違った、とことん前向きで明るい戦いぶりを楽しめる。1兆ドルを稼いで世界を買おうと目論むハルとガクという若者2人が、ハルは着想とハッタリ、ガクはITスキルを駆使して事業を軌道に乗せ、成り上がっていく様を描くストーリー。大企業のお嬢様を籠絡するかと思いきや、あっさり袖にして違うベンチャーキャピタルに乗り換える。伝説のプロデューサーを呼んでゲームを作ると言い出したその裏で、空前絶後の仕掛けを繰り出し世間を欺いてみせる。義理とか倫理といったものに照らすと道を外れているように見えて、結果をしっかりと出すことで誰も不幸にはしないぎりぎりのところを歩いている様子。フラワーアレンジメントの通販事業を奪われながらも次にいったいなにをやらかすか。楽しみだ。

書評家／ライター／タニグチリウイチ

- ふたりの主人公、ハルとガクの突破力、快進撃がスカッとする。それはまるで、長いキャリアでさらに新境地を開拓する様を見せてくれる池上遼一先生とそれを原作という形で支える稲垣理一郎先生のように。

医師／岸本倫太郎

- 物語が早いテンポで進み、各話の内容がとても濃いのですが、何故かスラスラと読めてしまう圧倒的構成力を感じます！それぞれが輝くものを持つ主人公達がこれからどの様に登りつめていくのか今後の展開も楽しみです！

会社員／竹本慧

- 起業というなかなか珍しいテーマを描いている作品。成功の為には手段を選ばず、ルールや常識の裏を突くハルの行動が毎回痛快で面白い！非常識なようでいて実は緻密に計算されている妙案の数々に「その手があったか！」「そんなのアリなん！？」と感心させられっぱなし。絵柄が若干劇画タッチなのもまた良い味を出していて個人的には最高です。

会社員／小野塚博之

- まずこの【池上遼一＆稲垣理一郎】両先生のタッグというだけでも読む価値があるのは分かっていた本作、恥ずかしながら今回の2次選考で初めて触れたのですが、読む前のイメージは「金！女！嘘！バイオレンス！友情？んなの知るかよ」といった具合のハードボイルドさを想像していたのでそれがいい意味で裏切られました。展開のスピード感・華々しさも勿論魅力の一つですが、それ以上に登場人物の魅力や関係性がしっかり丁寧に描かれて、でも恥ずかしくなるような安っぽさは無い。絵の持つ重厚さとカラッとした（いい意味での）現代的なノリの軽さが融合していてその絶妙さにこのタッグの妙そのものを感じて唖ってしまいます……。正直「今時お金稼いで大儲けしよう！なんて夢のある話流行らないんじゃない？」などと思ってましたが実はそうじゃなくて、「こんな風に読んでいて気持ちのいい、夢のある漫画が読みたかったのかもな」と思われました。本編はまだまだ夢の途中。世界一のワガママの行く末を今後も楽しみにしています。

フリーランス／金輪英恵

- ヒット作を書き続ける稲垣先生の原作と、リアル作画の巨匠である池上先生がタッグを組んで漫画を作ったら、こんなに面白くなるのかと！ストーリーはテンポが良くキャッチーで破天荒、ゴージャスでバブリーな作画も相まってクセになる面白さ。口八丁手八丁でお金を増やしていく様が痛快！辛い事が多い世の中で…この作品のように明るく笑えてスカッとする漫画が今1番読みたい！！

主婦／岸本しのぶ

- ネジのぶっ飛んだハルと天才プログラマーガクが起業し、トリリオンの売り上げをあげ、長者番付に載った軌跡を辿る現代立身伝。嘘を嘘と知って突き通せる人間は怖い。でもフィクションだとこんなに面白かったりもする。いや実際このハッタリができる人間しか未曾有の金など手にすることはできないのかもしれない。本田と藤沢、盛田と井深、ジョブスとウォズニャック、タッグでベンチャーから這い上がる人間の業も加わる傑作。

ブランド October Beast 代表／北山友之

- カネを追い求めるというシンプルなテーマと、魅力的なキャラという二本立てが爽快感あり！

明文堂書店金沢野々市店・店長 商品部 / 木村俊介

- このコンビでのマンガ。期待感をもちながら、裏切られず面白かった。内容もトリリオンを目指すコンビのワクワクさせる展開がたのしい。状況が苦境に陥った時に挽回する爽快感がたまらないです。

デザイナー / 平沼寛史

- 主人公の凸凹コンビが実に魅力的。ベンチャー起業をテーマにしながら、起業のダイナミズムを実に面白く読ませてくれます。展開を予想しながら読むとさらに楽しくなります。主人公コンビの周囲の人々も生き生きと描かれているのも良きかな。

サブカル専門ライター / 河村鳴紘

- 人脈構築ドラマとトリックで骨太の「成り上がり譚」を彩った直球の娯楽作。

書評家 / 福井健太

- 原作:稲垣理一郎、原画:池上遼一という、この組み合わせがなった時点で勝ち。この並びだけでももう面白いもんな。原作は良い意味で相当に荒唐無稽なんだけど、それが完璧にスマートな形でマンガにされて、涼やかですらある。一気に読んでただただ楽しんだ。このマンガがしれっとノミネートされるのが、マンガ大賞の怖いところだな…。

ソフトウェアエンジニア / 第貳齋藤

- 才色兼備で奇想天外な人たらしと若干コミュ障のエンジニアがコンビを組んでスタートアップし、大金持ちになっていく（だろう）物語・・・なのですが、これ、作中の2人だけでなく、原作&作画の先生方のコンビがもうそれだけでマンガみたい。重厚で色気たっぷりの池上先生の絵で、たしかに今風なボケツッコミが繰り広げられる展開は、ちょっと経験したことのない贅沢なマンガ体験でした。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- 稲垣理一郎先生と池上遼一先生という、強烈なタッグで作られた作品。1話にしてビジネスで成功するという結末を描き、如何にしてそこに行きつくのかという過程をトレースしていく展開がお見事。テンポが素晴らしく、登場人物の個性も凄まじく、まったく止めどころが見つかりませんでした。結末が分かっているからこそストレス無く読める構成が上手いなと思います。

会社員 / 三浦佑樹

- 作画が池上先生だけに令和のサンクチュアリを彷彿させるキャラ配置と大金を稼ぎ出すギミックの演出がスピード感を倍増させており「労働力の対価に報酬を得る」という一般的なケースでは無い金銭の儲け方や人の転がし方というダイナミズム溢れる景気の良い作品で、サクッと続巻をポチらせてくれる心地よさがありました。

住職・ライター / 蟬丸P

- リアルとエンタメのバランス配分や、話のスピード感が絶妙。描かれるベンチャービジネスも予備知識無しですんなり入り込め、すぐに「面白い！」と感じさせてくれる。続く展開への期待感も十分。組むべくして組んだ破天荒な凸凹コンビのサクセスストーリーを、組むべくして組んだ熟練の作家コンビが描いているというのもまた痛快。誰にでも気兼ねなく薦められる、早く続きが読みたくなる良作。

会社員 / 伊東敬祐

- 痛快。ホントに大金を手にするのでは？と思える主人公たちの仕事っぷりに惹きつけられる、スタートアップストーリー。仕事で上手いかなかったり、モヤモヤした気持ちを抱えたときに読みたい作品です。

Books アイ蒲生エキナカ店 / 野口忠義

- アメフトでも科学知識によるサバイバルでも、本気であるなら躊躇せず最短の道を歩むべきであり、そのためには考えを尽くさなければいけない。お金を稼ぐこともビジネスゲームにもまるで興味はないのですが、ここにある純粋な熱情にはあらゆる世界を変える原動力を感じ、ああマンガを通じて得たかったのはこれだよな、と思い出すことができました。

会社員 / 末永龍介

- 濃い味付けのキャラクターとストーリーが池上遼一先生の絵柄とがっちり？み合って、エネルギーに溢れた満漢全席のような作品に仕上がっています。とてもわくわくさせてくれる作品。続きが楽しみです。

会社員 / 津田圭

- 巨匠の画力と原作者のアイデアが超合体！傑作、『サンクチュアリ』から長い時を経て、また若者に刺さる！

小説家 / 海猫沢めろん

- ゴール地点からの回想。最終的に成功することは判っているから、ドキドキハラハラはしないけれど、どうやって？の部分がワクワクさせてくれる。さしずめブラックボックスの中を覗くような。人たらしのハルと小市民的なガクが面白いコンビです。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店コミック担当 / 山本さとみ

- 博打も投資もゲームも、だいたいそんなに簡単なものではないと思っているが（人によっていろいろな意見あるでしょうけど）、痛快に進んでいくので俯瞰で見る物語として愉快。そして主要人物たちの性格が気持ちいい。マンガというかフィクションはこうあるべき？という1つの良い例を見ているようだ。

イロイロ屋 / 杉本善徳

- 池上遼一先生といえば、「課長バカー代」のようなパロディーになるほどの大御所。なのに稲垣先生という新しい才能と組んで、ヒット作を生み出す手腕とバイタリティはすごい。ギャグシーンなどに最近の漫画のノリを入れつつ、クセの強い巨大企業の面々や「夜の世界」の描写はベテランならではの、そのギャップが新鮮で面白い。ビジネスには大なり小なりハタリがつきもの、というのは自分の会社員経験のなかでも実感できる真実。荒唐無稽なストーリーに「ほんの少しのリアル」を混ぜるのは、今も昔も面白い漫画の黄金ルールだと実感しました。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- お金をかけたビジネスマネーゲーム＆サクセスストーリーなのですが、とにかくキレがすごい。それがどうして、そうなるの？！という振り回され感が爽快です。1話1話の内容がとにかく濃いので、没頭します。

図案家 / 橋本寛子

- トリリオン（1兆）ドル規模の会社を作るというゴールに向けてトップスピードで物語が進んでいく。絶望的なトラブルと、それを乗り越えていく主人公の姿は、読者を強く惹きつける。資本主義のゲームの中で主人公の若者らの欲望がどこまで成長していくのか、今後の展開が楽しみである。

弁護士・三村小松山縣法律事務所 / 三村量一

- 大池上遼一先生の画が、稲垣理一郎先生のストーリーで躍動している。強い男が賢い男とタッグを組んで、世界もおまえもまるごといただく。まさに王道。

教員 / 戸田穠

- Dr.Stone とはまた違ったテイストで、こうくるか！！って展開で、とにかく小気味よい！！シリコンバレーのスタートアップ的なストーリーかな？と思ったけど、どんどん展開が変わって行って、毎回次のどんでん返しを期待しちゃってます。

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

- 派手でバカバカしくて好き。終わりそうで終わらない、ダラダラ続くコロナ禍の中で、スカッとさせてくれる作品。友達が元気がないとき、自分に元気がないとき、一緒に読んでゲラゲラ笑いたい。大ベテランの思い切った方向転換にも励まされる。チャレンジ精神が凄い。

ライター・老年学研究者 / 島影真奈美

- 『サンクチュアリ』と併せて読みたい。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

マンガ大賞2022 ノミネート作品

少年ジャンプ+ / 集英社

「ダンダダン」龍幸伸

選考員コメント・1次選考

- ストーリーや設定も面白いけど、どのキャラクターもクセが強く魅力があって楽しい。

PENICILLIN / HAKUEI

- アクションの描写の勢いが圧倒的。妖怪・宇宙人のデザインもクセが強い。そして不意にぶっ込まれる感動する話、全て、、、好き！読み手のテンション、イメージを上回る作画は快感的で、更にストーリー展開や人物描写にも作者のモットーというか怒りや悲しみや願いを感じるような気がして、また新たな推し漫画が出来ました。

会社員 / ターシ

- 昭和のオカルトを存分に咀嚼して、令和の世に新たなアクション作品の世界を送り出した快作！高く緻密な画力とこの360度自在な画角イメージはどうやってできるのか…。そして界限では伝統的に、宇宙人にアブダクションやキャトルミューティレーションされる生物はなぜか牛が多いというのがあったのだが、なんとその理由の解題が本作中で突如示されてウケました。

会社員 / やのこうじ

- 圧巻。1話目の引き込み方から世界観に飲み込まれます。書き込みも凄まじい量ながら画面に煩雑さを感じません。キャラクターも生き生きとしており、敵役もなんとなく好きになっていくのが面白い。オカルトといいながら、いちばん怖いのは生きてる人間……！！今後の展開も全く読めない、期待値しかない作品です。

図案家 / 橋本寛子

- オカルト、アクションバトルに青春ラブコメと、とにかく全部盛りなのに破綻することなく描かれる外道のような王道漫画。とにかく勢いがすごい。画力が非常に高くどんな見せ方もできるため、アクションシーン、ギャグシーン、謎の生物などどのコマを見ても勢いで説得させられてしまう。

デザイナー / 高永貞光

- オカルト満載でバトルでラブコメ！UMAも妖怪も見た目怖いけど面白くて続きが気になってしまう作品です。モモちゃんが強く可愛い！強い女の子大好き！

主婦 / 紺野泉

- ジャンルとして凄く新しいマンガと感じ、推薦しました。オカルトとSFの共存という、ありそうでなかった組み合わせに、キレのあるギャグ要素が加わることで、とても軽快な世界観でありつつ、躍動感たっぷりのバトルアクションが満載！たしかにジャンプらしい王道さを感じさせつつも、おもちゃ箱をひっくり返したかの様な賑やかさのあるマンガです。

会社員 / 佐藤優

- オカルト、怨霊、UFO、宇宙人、怪物退治、快活な美少女と地味なメガネ君…素材はありがちだが組み合わせの妙で「妙ちきりん」としか言いようのない快作ができあがった。話も絵もスピード感いっぱい、シリアスとギャグの切り替えも気持ちいい。少年漫画らしいスケベさも効いてます。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 話のテンポが良くてどんどん読めてしまいます。絵も可愛く怖くでメリハリがついていて面白いです。ネタに昭和の香りがするの私も好きです笑早く続きが読みたい作品です。

自営業 / 川崎綾子

- これこれ！待ってました！ムー好きにはたまらない漫画話のテンポの良さはもちろん、随所に散りばめられた小ネタがとても魅力的飽きることなく読み進められる。甘酸っぱい恋愛模様も忘れてはならない。全ての要素を盛り込んだこの作品をぜひ！

あゆみ BOOKS 杉並店店長 / 土屋修一

- ジャンプの三大原則「友情！努力！勝利！」に「超常！能力！憑依！」を加えたような、まさに新時代とか最先端とかいう謳い文句が文句無く付けられる名作。とにかく面白いんだよ ??? 話の構成も絵の構図もキャラの性格も全部がイイ。次が気になってしょうがない！キャラクターも魅力的でダンダダンの世界にグイグイ引き込んでくるんだわ？。正直、最初の方はどう読んでどう解釈して読めば良いのか分からなかったのだけど、3話ぐらいから急に「ある日ダンダダンの歯車がガッシリとかみ合ったのを実感した」「暗闇に光がさし込むような実に晴れ晴れとした気分」になった……話の途中で常識をアブダクションされたんだきっと。擬音語？擬態語？っていうの？あまり使わないのよ。それもスゲェ。画だけで勢いとか重さとか超伝わってくる。圧倒的作画力ッセルポ式測量法！！仕事の現場とかで使っちゃいそう。そもそもプロジェクト・セルポを何人が知ってるんだつつうのよ。キャトルミューティレーションのシーン超大好き。小学生の時に図書室の妖怪図鑑で知ったターボばあちゃんが大人になってからこんな面白いマンガに登場するとか最高かよ

会社員 / 布施直人

- 王道だけど、新しい境地。描写も美しくメリハリがあって非常に面白い。

広告会社 プランナー / 平沼良章

- 幽霊肯定 UFO 否定の女学生・綾瀬桃と UFO 肯定幽霊否定の学生・オカルト君とのバディがそれぞれの世界に踏み込んだ結果、お互いが特殊能力を得てしまうというトンでも話。ジャンプコミックはここまで際どい表現が OK になってしまったのかというくらいエログロ表現があるが、昨今「チェーンソーマン」や「怪獣 8 号」なんてのがあったのでこれくらいは許容範囲になってしまったのかも。いい意味でそのキレっぷりは面白い。

ブランド October Beast 代表 / 北山友之

- 設定が面白いオカルト漫画。心霊写真の本や都市伝説の本を子供のころたくさん読んでいた僕にはとても刺さります。あと、バトルシーンとかもすごい見やすくて状況がわかりやすい。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

選考員コメント・2次選考

- 絵もとてもかっこよく、話のテンポも良いので読みやすいです。これからも頑張ってください！

自営業 / 川崎綾子

- 青春、恋愛、ギャグ、アクション、オカルトと、ここまでいろいろな要素を詰め込めるだけ詰め込んでしっかりと成立しているのがとにかくすごい。また本当に毎週ペースでの連載？というレベルの描きこみと画力がすさまじいレベルです。

デザイナー / 高永貞光

- 「オカルティック怪奇バトル漫画」ってなにそれ？ってなるけど本当だからしかたがない。それに付け加えるなら「若さ」と「ラブ」。思春期の多感な時期に、めちゃくちゃやばそうなものと戦わされる理不尽さ。最高か。「ジャンプ+」の圧倒的な懐の深さを感じ入る、今期最凶の少年マンガ。「ドライブ感で溢れる画力でゴリゴリぶん殴られる恍惚さ」もあわせて追記しときますね。

株式会社プロプラス 商品部 / 池本美和

- 物語の内容も飽きさせることなく、素晴らしいですが、それに加えて週刊と思えないほど緻密に精密に描かれた背景に圧倒されます。バトルシーン等もありますが、擬音が使われていません。けれども揺れや音を感じさせる画力に本当にしびれます。主人公とヒロインもどうなっていくのか、王道でありながら斬新な作品、今後も楽しみです。

図案家 / 橋本寛子

- ダンダダンにダンダン心惹かれてしまいました。まず、絵が可愛い。だけど怪奇なオカルト現象たちは絶妙に気持ち悪い。そこがまずいい。そしてキュン要素やコメディ要素など、しっかりと学園もので、青春要素もある贅沢さ。なぜかなつかしさを感じる。ジャンプ+の作品だけど、過去の週刊少年ジャンプで、その後大ヒットする期待値が膨らむような序盤。魅力的なキャラクターと怪異ごとに話がコンパクトに完結している読みやすさ。シンプルに面白く、どこか懐かしい。老いも若きも楽しめるのではないだろうか。

会社員 / 西尾美里

- ジャンプっぽさはちゃんとあるんだけど、「ダメ」とか「ヘン」を要所で効かせて脱臼させた感じ。そこが面白い。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 宇宙人や都市伝説の妖怪、とにかく強いし見た目も怖いんですが！怪奇バトルに学園青春ラブコメに泣ける話まででんこ盛りにつまってすごいです。続きが気になって仕方ない！モモちゃん強くてかわいくて好きです！オカルンがんばれ！！

主婦 / 紺野泉

- 都市伝説好きの私には、どハマリな漫画、色々なオマージュが入っていて、かつ、キャラ立ちが秀逸かつ、ザ、ジャンプ作品ワクワクがある漫画！

Hair Make Lounge tetote 代表 / 力丸真

- 作品内に埋没させるようなアクション描写、ストーリーやキャラクターデザインも最高です。宇宙人と妖怪達の書き込みが半端ないので皮膚感というかヌメヌメ感が伝わってくるようです。水中や限定された場所での戦闘シーンと重力による攻撃シーンなどの表現について、まだそういう手法があったのかと。。これまでアクション漫画を読んでこれ以上は無いかなと勝手に決めていたレベルをブチ超えて新たな表現世界を見せてもらいました。

会社員 / ターシ

- 宇宙人も妖怪も出てくる漫画はあろうけど、呪いの力と超能力で宇宙人や幽霊と戦うなんてあったっけ？しかも激しい戦いの合間に挟まれるのは、オカルンとモモちゃんの、友達以上恋人未満の甘酸っぱい恋模様。バトルモードと初々しさのギャップがヤバい。お前らもう付き合っちゃえよ！

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店コミック担当 / 山本さとみ

- 第1巻のオビの惹句に「オカルト×バトル×アクション×ラブコメ×青春＝全部盛り」とあるが、まさにそれ。ギャルとオタクがスクールカーストを越えて接点を持つ導入部もそこそこに、間髪入れず、有無を言わずに廃病院での「ターボババア」（キモい）、心霊トンネルでの「セルポ星人」（もっとキモい）との遭遇そしてノンストップのバトルに突入する。刺激に刺激を塗り込めたような第1話の64ページに、ギャグも下ネタも友情も胸ずっきゅんのエモさも、少年マンガに求められるすべての要素がぶち込まれていて読後の満足度は120%。めくるめくスピードで爆走するのに、細部まできっちりと構築されたエンタメっぷりは胸がすくような熟練の技で、読めばとりこになること必至だ。自分は単行本で一気に読んだけれど、もし雑誌連載で読んでいたら次回が楽しみすぎて悶絶しただろう。見逃せないのが、異形の怪異をけれん味たっぷりに描きながらも、その怪異を通じて「哀しみ」がしっかり読み取れるところだ。ターボババアが力を得るきっかけには地縛霊にまつわる哀しい挿話があり、2巻に登場する「アクロバティックさらさら」が妖怪化したのも、愛娘と引き裂かれた母の情愛の強さゆえと明かされる。古今東西、子どもが妖怪変化に惹かれるのは、妖怪を生むのが人の哀しみだからだ。無力な子供でいることは哀しく、子供らはその哀しみに無自覚なようでいて実は敏感だ。その子供のなれの果てである人間は本質的に哀しい存在であり、哀しみが現世に遺されるから妖怪が生み出されるのだ、というような、作者のまっとうな人間観に心打たれる。「クソが」「クソメガネ」「クソだらあ」とクソクソ連発する割には全体的に品良く感じられるのは、このマンガが根っから真面目につくられているからだと思う。怪異を可視化する絵ずカラも快感で、老若男女に安心しておすすめできる少年マンガの到達点。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

- オカルトを題材にしつつも全く陰にならない明るさが楽しい。キャラクターのセリフややりとりのテンポの良さも心地よい。

医師 / 岸本倫太郎

- 必ずしも新しいわけでもなく、ややもすればマンネリと言われるジャンルこそ“王道”と言われるものだと思うのですが、その枠組みの中でまた新たな切り口のマンガだと感じ推薦しました。オカルトとSFの共存という、ありそうでなかった組み合わせに、キレのあるギャグ要素が加わることで、とても軽快な世界観かつ、躍動感たっぷりのバトルアクションの漫画となっています！おもちゃ箱をひっくり返したかの様な賑やかさのあるマンガで、今期真っ向勝負で王道にチャレンジしている漫画だと思います。

会社員 / 佐藤優

- 今の時代の漫画の面白さが詰まってる作品だと思いました。キャラクターの魅力だけでも読めてしまうぐらいキャラクターの描き方が素晴らしい。

PENICILLIN / HAKUEI

- 皆さんお気づきでしたか？この漫画、全く擬音が描かれていないんです。なのにばっちり音が聞こえてくるんですよ…。圧倒的な画力と構成力。毎週楽しみにしている漫画です。

音楽家・閃き堂店主 / 谷澤智文

- すごすぎる画力で毎週連載というところで本誌レベル。ジャンプでも掲載してほしい。

明文堂書店金沢野々市店・店長 商品部 / 木村俊介

- 勢いがとにかく凄い。このクオリティでほぼ週刊連載なのにも驚きます。魅力的な登場人物が繰り広げるオカルトコメディ。今後の展開も楽しみです。

ブックファースト新宿店 / 渋谷孝

- 不思議がてんこ盛りで、つかみどころがありません。が、つかみどころがないのがこのマンガのいいところなのだと思います。オカルト好き少年と霊媒師の孫娘とのボーイミーツガール。なのけど、ストーリーがとにかく怒涛の展開で、幽霊、宇宙人、妖怪、超能力、エトセトラ。先が読めずこれからの物語、目が離せません。

第75期司法修習生 / 三葛敦志

- 一風変わったオカルト青春バトル漫画！？話のテンポの良さと至るところに散りばめられている小ネタ。ムー好きにはもちろん、そうでない人でも楽しめます。ちょっと甘酸っぱい展開に目が離せません。

あゆみ BOOKS 杉並店店長 / 土屋修一

- ジャンプの三大原則「友情！努力！勝利！」に「超常！能力！憑依！」を加えたような、まさに新時代とか最先端とかいう謳い文句が文句無く付けられる名作。とにかく面白いんだよ??? 話の構成も絵の構図もキャラの性格も全部がイイ。次が気になってしょうがない！キャラクターも魅力的でダンダダンの世界にグイグイ引き込んでくるんだわ？。正直、最初の方はどう読んでどう解釈して読めば良いのか分からなかったのだけど、3話ぐらいから急に「ある日ダンダダンの歯車がガッシリとかみ合ったのを実感した」「暗闇に光がさし込むような実に晴れ晴れとした気分」になった……話の途中で常識をアブダクションされたんだきっと。擬音語？擬態語？っていうの？あまり使わないのよ。それもスゲー。画だけで勢いとか重さとか超伝わってくる。圧倒的作画力ッでも時々ふと素になって「登場人物が何のために戦っているのか？」って視点に立ってみると、超絶バトルの理由ってえんぴつとかきんのたまなんすよね…ええいみなまで言わせるな。ところどころのワードセンスも好き。セルポ式測量法！！仕事の現場とかで使っちゃいそう。そもそもプロジェクト・セルポを何人が知ってるんだっつうのよ。職場で「クソだらあが」とかつい言っちゃうわ小学生の時に図書室の妖怪図鑑で知ったターボばあちゃんが大人になってからこんな面白いマンガに登場するとか最高かよ

会社員 / 布施直人

- オカルト×バトル漫画の最先端。文献に載っているような日本古来の妖怪変化ではなく、UMA や宇宙人、インターネット怪談で名を馳せた怪異など、『月刊〇一』が増刊号を発行するほど喜びそうなナウい「そっち系」のモチーフが先行してくる上、バトル漫画としてもラブコメとしてもしっかり熱い作品です。怪異と合体した後のキャラクターデザインもカッコ良すぎる。有名な怪異への独自の解釈も思わず頷かせるような、オカルトへの大きなラブも魅力です。

株式会社アニメイト アニメイト秋葉原 / 岡部真矢

- 少年漫画にありがちな設定っぽくて斬新さを生み出したのは本当に凄いと思います。「細かいことは気にすんじゃねえ！」と言われているかのような圧倒的なキャラクターの個性と、「擬音なんかてめえで勝手につけろ！」とほぼ言われている圧倒的画力。「週刊でどうすればここまで描けるの？」と叫びたくなるくらいの描き込みは、逆に心配になるほどです。あとホラー的な要素の部分は普通に怖いので、それ系が苦手な人は明るいところで読んだほうが良いと思います。

バーテンダー / 村井真也

- オタクとギャル！しっかり怖い怪異！不穏な宇宙人！スピード感あふれるバトル！バナナとタマ！高倉健！魅力的な要素が渋滞を起こしそうなのに詰め込まれているのに、絵やコマ割りのちからで楽しく交通整理されている、これぞジャンプ (+) 漫画！

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- ポップでありながら、ダークヒーロー的な主人公たち。久々の王道で爽快でファンタジーを掛け合わせた、すがすがしい作品です。本誌ジャンプはなかなか次の王道マンガが勢いを出せない中、自由にのびのびと、そして新しい世界観をしっかり描いています。今後の展開や伏線の改修が非常に楽しみです

広告会社 プランナー / 平沼良章

- オカルト×アクション。勢いよく展開されていくストーリーに目が離せず、一気に3巻まで読んでしまいました。読みごたえ、爽快感、ワクワクがとまらないので4巻を早く読みたい！

会社員 / 伊藤千恵

- 妖怪や宇宙人とのバトルも小気味よく、三角関係に発展しそうな学園ものとしても面白く、作品が謳っているテンコ盛りに偽りなし。

Books アイ蒲生エキナカ店 / 野口忠義

- お腹いっぱい盛り込んで、飽きさせずに展開がはやい。

大日本印刷 / 佐々木愛

- 少しオヤジ臭いギャグが織り込まれながらも、ヒーロー要素もあり、楽しく読める。ジャンプのマンガ！と思える設定が楽しくもあります。オカルト要素満載でどんな宇宙人や妖怪がでてくるのか。普通の登場人物が強すぎるのも良いです。

デザイナー / 平沼寛史

マンガ大賞2022 ノミネート作品

週刊ヤングジャンプ / 集英社

「【推しの子】」赤坂アカ×横槍メンゴ

選考員コメント・1次選考

- ハイスピードでハイテンションなアイドル転生マンガ。主人公たちのアイドルとしての有り様の描き方に集中しすぎて、当初の謎が置いてきぼり気味だけどそれも気にならない牽引力。

漫画読み / サイトウマサトク

- アイドル、リアリティショー、2.5 次元と、その舞台裏が垣間見えるのだけでも面白いのですが、ここにきて主人公の変化とキャラの深掘りが物語をより興味深くしてくれています。

会社員 / やのこうじ

- 一巻からずっと面白い。2,5 次元舞台編もリアルだと感じる部分とマンガっぽい表現のバランスがすごくて度々感心させられる。

bar 図書店主 / 岡部愛

- 一巻が予想もつかない怒涛の展開。表紙から受け取る感じを良い意味で裏切ってくるし、続きが読みたくなる。メインの〇〇探しの他に、芸能界の話も上手くストーリーに絡めているのが上手い。

主婦 / 岸本しのぶ

- この世は推しで溢れている。そのことを思い知らせてくれるマンガ。横槍メンゴ先生の描く女の子はみんなかわいい。箱推しするしかない。キャラたちのノリの良さ、ストーリーの運びのテンポの良さ。もう来てるマンガ大賞！はこれですよ。

教員 / 戸田穂

- 今年 1 番の推しの本です！

教師 / 持丸宏司

- 基本は謎を追うサスペンスなのですが、舞台編が凄く面白く読めました。個人的には謎を解くのはゆっくりで良いので芸能界の裏側をもうちょっと見せて欲しい作品。

ブックファースト新宿店 / 渋谷孝

- 芸能界ものというと、天性の才能でいきなり成り上がっていくか、逆に業界の暗部を描くみたいな「特殊な人々と世界」なことが多いですが、【推しの子】は特殊な設定で始まるものの、描くのは等身大の芸能人の卵である少女少女たちの青春群像劇となっていて、しかもリアリティをすごく感じさせます。実際に芸能界など知らないので本当のところはわからないものの、そうなんだろうなと思わせる説得力がすごいのだ。その理由は、脇役の 1 人 1 人に至るまでのキャラクターの感情に違和感を全く感じないからだと思いますが、それは相当に大変なことです。しかも「犯人探し」というミステリー要素もあるので、作品全体に大きな流れと緊張感があります。先が楽しみで仕方がないです。

丸善ジュンク堂書店 営業本部 / 小磯洋

- 主人公の復讐劇がメインとなっているはずのこの物語。とても大きな負の感情によって突き動かされているはずの主人公。しかし自身の持つ才能や努力を用いて周囲に影響を及ぼし、また利用して彼は復讐へと歩みを進める。暗い主題と表から見た明るい芸能界の対比、明暗が物語の中ではっきりと描かれ、本筋のストーリーに魅了され、劇中劇に魅了され、またキャラクターたちの歩む日々にも魅了される。役柄があり、それを演じる人間がいる。前者が描く物語も、後者が歩む道のりも双方に魅力を感じる作品。

会社員 / 杉佳尚

- 相変わらず、濃くて凄い。芸能界ネタ縛りとは言え、情報を収集し、整理し、如何に想像を巡らせるのか、計り知れない。終着点が楽しみでもあり、怖くもある。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

- 新刊が出るたびにここが面白さのピークなのでは、と思うのに毎回そこを更新してくる作品。回を重ねるごとに主人公たち以外のキャラクターの内面も掘り下げられていって、本筋のサスペンス的ストーリーのほか群像劇的な面白さも増していている印象です。とりあえず有馬かなちゃん頑張れ。

会社員 / 津田圭

- 切磋琢磨な作品。誰もが自分が正解で不正解。そんな全力な日々が羨ましい。

カメラマン / 平沼久奈

- 現代のアイドルが芸能人が抱える問題目白押し。エゴサに拡散に炎上、芸能界の闇もジャンジャンてんこ盛り。謎に迫る主軸の話もちろん気になるが、今エンタメをサバイヴするにはどうしたらよいのかを漫画という媒体を通じて教えてもらっている気にすらなる。こんな世界は嫌だと思いつつも、そこに何か糸口を示しているのはさすが。ただのドロドロで終わらないのは本当にうれしい。

ブランド October Beast 代表 / 北山友之

選考員コメント・2次選考

- お話が進むごとにタイトルに新たな意味が重なっていくのが面白く、驚きと楽しさが毎回更新されていくように感じます。。主軸のサスペンスストーリーだけではなく、芸能界でもがき進もうとするキャラクターたちの群像劇としても楽しめる作品です。

会社員 / 津田圭

- アイドル業界・若手俳優業界マンガとしてのクオリティがすごい。母親の死の謎を追うミステリ部分のことを忘れがちになるぐらい、人間が生き生きと描かれているのが良い。読みながら自然に「推し」を発見してしまうぐらい、ルビーも有馬かなも黒川あかねも MEM ちょも（もちろんアクアも）、みんなそれぞれ違ったアイドルとしての輝きを持っているんだよな。

漫画読み / サイトウマサトク

- 相変わらず濃い。とくに近巻の創作論、演出論にまつわるエピソードは、売れっ子作家タッグの仕事だけに説得力は抜群だ。同時に子供だった主人公達は次第に成長して行く。ただの成長譚で終わらないことはあらかじめ予告されている物語だけに、どのような終幕を迎えるのか、怖れつつ待ちたいと思う。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

- 赤坂アカ先生も横槍メンゴ先生もファンなので、そりゃ生み出される作品も大好物に決まってるだろうなと思って読み始めましたが、遥かにそれを凌駕する面白さでした。ポップな絵柄でキャッチーなアイドルについてのストーリーが進むかと思えば良い意味で裏切ってくれます。アイドルや芸能界の表と裏を、奇抜な設定で描写する展開は見事の一言。必読です。

会社員 / 三浦佑樹

- 主人公とその周囲の面々に光が当てられ、本当に見せ場が盛り沢山です。そして登場人物が織りなすストーリーもグイグイ前に動き出し、目が離せません。イチオシの本です。

教師 / 持丸宏司

- サスペンス要素をメインにしつつも芸能界の裏側を魅せるのがとても上手く続きがとても気になる作品。

ブックファースト新宿店 / 渋谷孝

- 連載が続けば続くほど面白くなる稀有なマンガ。すごすぎるだろ！

小説家 / 海猫沢めろん

- 「演技とは？」に深入りしてきて面白い。不幸な経緯で打ち切りになったあの作品からバトンを受け取ったん？という気にもなるけれど。群像劇の厚みも出てきて、序盤から想像したよりもずっとスケールの大きな作品になりそう。

朝日新聞記者 / 小原篤

- 毎週水曜深夜は0時を跨ぐまで寝られません。小気味よくテンポ良くまわっていくお話に、こちらの気持ちもくるくるふりまわされます。重曹ちゃん推しだったのに、いまはあかねを応援したい！とか。女の子男の子だけでなく、おっさんもけっこう光るのがうれしい。とはいえ、いつ誰に忍び寄るのか魔の手。犯人探しにあの手この手で、でもそろそろ物語も本格的に動きそうですよ。

教員 / 戸田穠

- アイドル、舞台、復讐劇と自分の好みのネタ満載でこれまでのところたっぷり楽しんで読めてます。主人公が若干無双気味なのが気にはなるけどこの辺は最近の流行りというところでしょうか。今後彼が深く葛藤するところを見てみたい気はします。ああ、この話で作画が横槍先生というのはちょっとずるい飛び道具という気はしますね（笑）今、風呂敷をうまくたたむところを見てみたい作品の一つ。今後も期待してます。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

- 「推していたアイドルの子供に転生する」という奇想天外な設定の「転生恋愛サスペンスアイドルマンガ」(?)。前提となる設定を描く展開で作品の世界観にグッと引き込まれ、第一章終盤の衝撃展開でもう一段強く引き込まれる。主要なキャラクターは眩しいほどの光を放ちつつも、何かの欠落や不全感を抱えているが、そのコントラストが丁寧に描かれていて、キャラクターを通じて物語へ引き込む磁力がなんとも強力。読み進めるうちに読者自身にも“推しの子”ができていることに気付かされる二重構造も楽しい。思い切った設定にダイナミックな展開、葛藤を抱える強いキャラクターなど、ページをめくる楽しみが詰まっている。

(有) 馬場企画 編集者/ライター / 松浦達也

- 展開にスピード感が出てきて、どんどん読み進めました。SNS 中傷問題や 2.5 次元舞台の作品への取り込みも上手いなと思います。

公務員 / 東くるみ

- 芸能人の対談番組やラジオで繰り返し言われてきた、「芸能界は、結局いい人だけが生き残る」「性格悪いヤツは周りから嫌われて、だいたいいつの間にかいなくなってる」と言う言葉。この漫画を読むと、本当にそうだなと思います。局の社員であるプロデューサーやディレクターは、「いい人」でなくとも会社には守られているので犯罪でも犯さない限りいなくなることはない。みんな悪意を持っているわけではないが、結果として番組が悪い方向に進むことがある。関係者ではないので知りようもないけれど、最近の芸能界の事件の裏は、実はこうだったんだろうなあと納得してしまう程のリアリティを感じさせる描き方が素晴らしい。単純に芸能界でのし上がっていくという話ではなく、「自分の人生、どう生きるか」という人生論を感じさせる深みがある漫画です。

丸善ジュンク堂書店 営業本部 / 小磯洋

- 表情は可愛いアイドルのような絵で、とにかく読む前と読んだ後の違い、カバー絵からこんな話だろうという予想を良い意味で裏切ってくる作品。メインのミステリーの他に映画、TV、舞台など、ガラスの仮面の劇中劇のような面白さもある。主人公達に幸せになって欲しくて続きが気になる。

主婦 / 岸本しのぶ

- 物語りの核心に迫りつつある推しの子。舞台編の人間関係の濃さも凄かったですが、シリアスとコメディのバランスがよく、読みやすかったです。この先どうまとめるのが楽しみ…！

会社員 / 伊藤千恵

- 最初からおもしろかったですが、ここまでのザ・芸能ものになるとあっておらず嬉しい驚きで興奮しながら読んでいます。原作者のマンガ家と脚本家が共作に向かうくんだりには特に興奮を覚えました。毎回次の巻を即読みたくなって「まだなの!？」と思わずイラ…っとしてしまうくらい引きの強いエンタメ作品だと思います。

ライター / 門倉紫麻

- 芸能界マンガ。「ガラスの仮面」よりも昔からも存在する、定番の憧れ。名作も数多いけれど、いまでもリアルな芸能の仕事が存在するのは芸能界が提供するリアルより面白いフィクションがなかなか作れないからだと思う。フィクションだけで上回れるなら、もう、芸能の仕事はなくなっちゃっているだろうから。そしてその芸能のお仕事は、ほんの数年で変化する。数年前とは全く様相を変える世界。そんな中、アイドルや芸能の方々と一緒に働くことがある仕事の人間としても、こんなに 2020 年代の芸能の仕事に嘘がない、と思えるフィクションはない。アイドルとマネジメントとネットと 2.5 次元のライブエンターテインメントと原作とその作者たちのドラマまでを、ここまでリアルに描ける圧倒的な取材力と、その取材を元にした緻密な想像力のなせる技に驚くしかない。中でも 5 巻の舞台脚本家の巻き込まれてゆくストーリーの強さは、おそくリアルを超えたフィクション、になっている。芸能界ものの限界は、「実際の事件の後追いでない」と、読者がリアリティを感じてくれない」という点にあるけど、【推しの子】は、最新刊が常に一番面白く、ここまでの積み上げを踏み切り台に、現実の芸能界の未来の予言を見せてくれそうで、もう、期待しかない！

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

- いつも次は何が起こるのかワクワクして読んでいます。登場人物が皆可愛くかっこよく、いつまでも見ていたいです。早く続きが読みたいです。これからも頑張ってください。

自営業 / 川崎綾子

- 単にアイドルの話かなと思いきや、オタクコンテンツ界隈の話がリアルに描かれていてなるほどと思いました。私もエンタメ系の職に就いているので、あるある…の嵐でした笑ミステリー的な展開としても今後がどうなるか気になります。

会社員 / 畑中瀬路奈

- 人にオススメする際にストーリーの説明に一番苦労する作品ですが、ネタバレせずに説明する話法が身についた気がします(笑)。転生系→復讐系の展開になるのかと思いきやちゃんと青春系の話もあり、表現者達とそれに携わる人たちに関しての群像劇な描写もありで色んな感じ方ができると思いますし、かといってシリアスになりすぎない丁度良いバランスが読みやすいです。SNS世代に刺さる話もあるので普段漫画を読まない人におすすめだと思います。

会社員 / ターシ

- 展開のスピードの速さと、全てのキャラクターの魅力がピカイチです。飽きさせない緩急の付け方に、芸能に興味がない人でも、ハマってしまうこと間違いなし。

女優 / 齋藤明里

- ずっと面白い。実際に起こってそうな業界の話をネタに、永遠に続けてくれればいいなと思うくらい好き。

bar 図書室店主 / 岡部愛

- 何度でも繰り返すが1巻が天才の仕事。1兆点。物語のはじまりとしてこれ以上の形はない。今回、何度目かの一気読みしたけれどもやっぱり1巻読んで吠えたもん。その後のサスペンスも緊張感が続く。現在7巻まで。一气読みビリティも高い。

ソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

- 面白いかつ、何個もの人生が同時に進んでいて複雑なきもち。シーズンわけしてアニメ化してほしいです。

カメラマン / 平沼久奈

- ある意味ならうの無双系な感はあるけれど、メンゴ先生の女の子が可愛いからヨシ！

明文堂書店金沢野々市店・店長 商品部 / 木村俊介

- 久しぶりにイッキ読みしましたがやっぱり面白い！！だんだん役者の話に比重が重くなってきましたが、絵の迫力が生きてて見てて惹きつけられます。エンタメがほしい人に勧めたい。

株式会社来知 WEB デザイナー / 河本智芳

マンガ大賞2022 ノミネート作品

ミステリーポニータ / 秋田書店

「海が走るエンドロール」たらちねジョン

選考員コメント・1次選考

- このマンガに劇的なストーリー展開はなくて良いのです。ただ、ただストーリーの続きが読みたいです。

(株) エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部大介

- 海の描写が印象的な作品。未知（学生）との遭遇、やりたいことを自覚した高揚感、初めての挑戦…私自身も現在進行形で年齢に似合わないような挑戦をしていることもあり、本作の主人公の船出に背中を押された気がしました。オタク的な視点で言うと主人公と若い学生の婆孫ほど歳の離れた不思議な関係性の今後の展開が非常に気になるので、早く次巻が！読みたいです！

フリーランス / 金輪英恵

- 完璧な1話。何度も読み返したくなります。痺れます。学生時代、部活などでスポーツやったりダンスしたり楽器を演奏したりして、好きで楽しくて、このままプロとして生活できたらいいな、と少しでも思ったことのある人は多いと思います。でも実際は大会の予選や初戦で敗退するぐらいの成績で、本気でプロになれると考えていた訳ではないので、学生時代だけの遊びで終わる人がほとんどです。歳を取ると新しい事を始めるのも億劫になります。年齢を言い訳にするようになります。そんな自分に活を入れられました。前向きな主人公のうみ子さんを見ていると、羨ましくなり、自分も何か新しいことを始めてみようかという気になってきます。

丸善ジュンク堂書店 営業本部 / 小磯洋

- 新しいことにチャレンジする機会が少なくなっている自分に喝を入れられているような思いで読み進めていると、いつの間にか背中を押されているような気持ちに変わっていききました。新しいことを始めるワクワク感やゾクゾク感、忘れたくないものです。

会社員 / 小野塚博之

- 年を取ったから、ただの趣味だから等々、何かしら理由をつけて向き合いたいものに向き合わない。なぜなら今送っている日々が波立ってしまうことが恐ろしい。その感覚は非常によくわかる、と本作を読んで共感した。一方で取り返すことができない、それかもしくは取り返しをつかない後悔はきっと誰もが抱えているだろう。この後悔にも強く共感できた。だからこそ「誰でも船は出せる」という、うみ子の言葉が自分に強く強く響いた。タイトルにある「海が走るエンドロール」が描き切られるまで、この物語を走って追いかけてたい。

会社員 / 杉佳尚

- Twitter に掲載されているのを何気なく読んでみたらどんどん引き込まれました。自分も大学の映画制作に関わったことがあるので身近に感じて読みました。何歳になってもできることがあるんだと思います。若い感性では目新しいことが生まれる可能性がありますが、たとえ若くなくても経験によって生まれる感性があると思います。早く続きが読みたいです。

自営業 / 川崎綾子

- 何かはじめることに年齢なんてないんだとあらためて思えた作品です。カイくんとうみ子さんが映画を見る側ではなくて作りたい側なんじゃないの？と言われた時のコマに鳥肌が立って胸がきゅっとなりました。

ブックエース上荒川店・コミック担当 / 倉本かおり

- 表紙のイメージと中面の印象がまるで違って、驚いた一冊。「65歳を杉、夫と死別」という主人公のプロフィールと、ストーリー展開も、“きつこうなのではないか”という予想を次々とあざやかに裏切ってくれる。次巻が待ち遠しい。

ライター・老年学研究者 / 島影真奈美

- 言いたいことややりたいことを本気でできる人は一握りだと境界線を引いてしまっているということに気がつかされました。やれない理由を並べ立てることは簡単なことだけど、本当にやりたいことをやる勇気を出すことは難しい。だけど一度きりの人生でやらなかった後悔をするよりも、やって後悔することがずっと幸せであると感じた。こうありたい自分をうみ子さんや海くんを通して見つけることができる気がします。

会社員 / 八重田幸子

- まず絵が達者で、シンプルにキモチいい。人生 100 年時代と言われる現代において、こういうマンガに出会えて、とてもうれしい。うみ子と海の今後の今後が気になります！

菓子研究家 / 福田里香

- 何歳になっても新しいことを始めることは尊いということを教えてくれる

会社員 / 齋藤隼

選考員コメント・2次選考

- アラサーを過ぎ、アラフォーに近づいてくると「この先の人生」についてよく考えるのですが、それはあまり明るいものではないことが多いです。だから、海辺でうみ子さんが海くんに話した「船を出すか出さないか」という言葉があまりにもキラキラとしていて、胸を打たれました。実際に船を出さずとも、船を出そうかなと思えるくらい、前向きでいたいですね。コマの構成も凄く映像的で、読んでいて心地よかったです。

会社員 / 畑中瀬路奈

- 軽い気持ちで手に取ったものに、予想外にのめり込んでしまうことを「沼にはまる」といいますが、主人公が自分では気づいていなかった興味のあるもの、やってみたいことを「波」で表現しているところが非常にわかりやすく、説得力があります。年齢など関係なく、その波に乗ろうとする主人公のありのまま受け入れながら進む姿に応援したくなる一方で嫉妬すら覚えてしまう。自分も何か新しいこと始めたり、一歩踏み出す勇気が欲しいと思ってしまいました。

コミック担当 / 実松由夏

- 20代後半の私ですが、いつ夢を諦めるタイミングなのか、その時が来たらどうするのか、なんてことを考え出すというも止まらなくて、それは先のようにでもすぐ近くにあるようで、切なくなっていたのでした。でも、この作品に出会えて、そんなことを考えているだけ無駄なのだと、幾つになっても人は前に進める、1歩を踏み出せる、と優しく背中を押してもらえた気がします。人を想う強い感情と、ものを作るということ、きっと今、やりたいことがある全ての人に刺さる漫画なのでは無いでしょうか。

女優 / 齋藤明里

- ものすごく好きなものが見つけれられることは稀で、それをすぐに真っ直ぐに追いかけて打ち込むことができるのも稀で、さらに自分が思い描いたかたちの結果にできることも稀。けれど見つけたのなら、気付いたのなら、遅すぎるといことはないのかも。静かに、きらきら。わくわく。読んだたくさんの人にも新しい何かが始まりそうな物語。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

- 何かはじめることに年齢なんてないんだとあらためて思えた作品です。カイくんとうみ子さんが映画を見る側ではなくて作りたい側なんじゃないの？と言われた時のコマに鳥肌が立って胸がきゅっとなりました。

ブックエース上荒川店・コミック担当 / 倉本かおり

- 本作の主要人物である、うみ子と海(カイ)。海(カイ)が起こした波によって「映画を作りたい側」であることに気づいたうみ子。このシーンが頭から離れなかった。映画作りという海を目の前にして、そこから船を出して進むことを決めたうみ子の姿が眩しかった。きっと自分にも以前、目前に広がっていた海から目を背けた、という意識が心のどこかで眠っていたのだと思う。所詮は趣味だから、時間がないから、それどころじゃないから……様々な理由がそこにはあったはずだ。そこで立ち止まる正当な理由があった、はずだ。それらを想起させられ、少しだけ心がざわついた。しかし、うみこの姿が眩しくかつ羨ましく見えてしまうのだ。おそらくこういった想いを抱える方は少なくないのではないだろうか。劇中で海(カイ)の友人も、目の海から目を背けた一人として描かれている。この物語にはその後悔も、しっかりと描かれている。うみ子は「作る人と作らない人の境界線」は船を出すかどうかを決断することだけだと言う。そして「誰でも船は出せる」と言う。この言葉が自分にとっての海に浮かぶ灯台に、光を灯してくれた。憧れた大型船舶ではなく、とりあえずイカダを組んで。ゆっくりと波に揺られながら進むことに対して、背中を押してくれる一作となった。そんなひとつのチャプターを私の人生に追加してくれた本作。「エンドロール」が終わるまで、さらに劇場の明かりがつくまで。しっかりと作品を追いかけていきたい。

会社員 / 杉佳尚

- 65歳の女性と現役美大生の二人それぞれの関わり方を通して、映画を撮る＝表現することに関わる様々なことを、ミステリアス且つ熱く、しばしば生々しく描いた作品です。映画のように、表現することそのものにコストがかかることがどうしても持つってしまう問題（表現活動というのは、そもそも生活にゆとりのあるものに許された特権ではないのか？的な）を踏まえながらも、それでも表現することに引き寄せられていく海くんとうみ子さんのもつ熱に刺激を受けます。うみ子さんのように、歳を重ねた時にも表現への熱や行動力を持って生きていきたいと思わせる、表現活動に関わる人に必ずブツ刺さる傑作です。

株式会社アニメイト アニメイト秋葉原 / 岡部真矢

- ラジオにネタを投稿するのにも、ハガキ1枚ごとに切手代がかかりました。今は無料で何通でもメールを送れます。ビデオカメラは高価で、テープも1本で2時間程度しか撮れませんでした。またテープの編集にも高価な専用の機材が必要で、手間もかかりました。今はスマホがあれば高画質の映像が撮れ、編集も簡単にできます。小説や漫画は同人誌はありましたが、編集や印刷に手間も時間もお金もかかりましたし、新聞や雑誌などの広告枠でも買わなければ宣伝する媒体もないので、仲間内の閲覧やコミケ・コミティアや文学フリマへの出店するぐらいしか出来ませんでした。広く一般の人に見てもらうためには出版社の新人賞に応募して受賞してデビューする必要がありました。今は投稿サイトなどに無料で自由に投稿でき、またツイッターやInstagramなどにアップロードすれば全世界に閲覧してもらうことが可能です。「敷居」は限りなく低くなりました。やろうと思えば、スマホやPCさえあれば、1人で手軽にすぐに何でもできるようになりました。ですが歳を取ると新しい事を始めるのは億劫になります。年齢を言い訳にするようになります。前向きな主人公のうみ子さんを見てみると、羨ましくなり、自分も何か新しいことを始めてみようかという気になってきます。

丸善ジュンク堂書店 営業本部 / 小磯洋

- 何歳になっても、やりたいことをやる。今の時代に合ったコンセプトで、みる側も焚きつけられます。年齢を言い訳に挑戦から逃げてしまう。実際は、飛び込んでしまえば、どうにか頑張るのが人間なのかもしれません。その他、情景描写など素晴らしい点など、この作品に見入ってしまうところがいくつも存在します。

広告会社 プランナー / 平沼良章

- いつだって船はだせるんだ。幾つになろうが、目指すことはできるということに気付かされるすてきな作品です。

会社員 / 伊藤千恵

- 自分も映像の大学に在籍していたこともあってなのか、とても親近感があります。全体的にしっとりした雰囲気が進む物語に惹かれました。これからも応援してます。

自営業 / 川崎綾子

- まず主人公が65歳のおばあちゃんというところがとても味があって良い。若者に触発されて、自分がやりたかった事（映画を撮る）に気付き、やりたいことに年齢なんて関係ないと読み手に思わせてくれる。まだ1巻なのに引き込まれる表現力、画力、そしてセリフ回し。続きがとても気になる作品です。おばあちゃんを応援したい気持ちにさせられるし、奮闘するその姿に気付かされることもある。どんな“世界”を撮るのだろうかとても興味がある。タイトルになる“海”がキーワードでもあるし、その“海”の表現の仕方が絶妙で巧い。とても良作。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

- 映画を観るより、観てる人を見るのが好きとか、感性に訴えてくる描写が多く、改めて読んでみるととても心に響く。今後、どのような展開になるのかが楽しみな作品。

あゆみ BOOKS 杉並店店長 / 土屋修一

- 表現力が素晴らしく、圧倒されて読み進めなくなることもしばしば。読み応えありまくり、と言った感じ。

図書館員 / 金田健太郎

- やばいやばいやばい！このコメントを1巻の1話読んで途中で書き始めてるんだけど作中への引き込みかたが超すげえ卓越してんなやべえぞコレ！！「こっちがわ」セリフのシーンで心拍数えぐい上昇する。マンガのちからってすごい。語彙力すら失われて「作品という金型」で「作品の読者」へとインジェクション加工される新感覚…！私こそが成果物だった！！これが最近のマンガなのかよおお…知らない！こんなの知らないからああああ！！呟いだ海からの、瞳が波打っての、部屋ザアッ！！はちょっとすごすぎる。タイトルにもある「海」が作品の要所要所に出てくるんだけど、これはきっと憧れたり遊んだり眺めたり溺れたりする海を映画という概念に投影しているんだろうな。そんでもって満ちたり引いたりして意識させられてしまうと。よしよし理性が戻ってきた。でもそんなに悠長でもいられないんだな、海が、映画が！すぐそこに！廊下の！障子の！すぐ横にまで迫っていて！！ヒタヒタ！！もう止まらないんですね。oh また心拍数がすごい。みんな人生の中で諦観していくんだよなあ。そうか、主役の男の子も海なんだった。へいへいちょっと待てわたしにもその作品見せてくれませんかコラァ。「あなたで映画を撮るわ」はすげえ。どこから顕現すんのその表現？たぶん伏線は「普段考えないじゃん 親以上の世代が世界をどう観てるかとか」のセリフだわ。やっぱ主要人物って運命的に巡り合うんだよな？。人生の節目にエンドロールが流れる演出についてちょっと共感できる??? 自分に子供が出来た時に「自分の人生が終わったな」という感慨があった。それは思い返せば「両親の子供」だったそれまでの自分が、これからは自分の子供の人生に「親として生きる」んだなっていう実感で、きっと主人公にとって「映画作りたい側＝こっちがわ」へ船を出したってことなんだろうな。深い。あと裏表紙の「シルバーガール×ブルーボーイ」というワードが好きすぎて、ナウくてエモい。

会社員 / 布施直人

- 2021年私の胸に刺さったのはこの作品でした。何かを始めようと思った人、何かを始めようと思って諦めた人、何かを始めようと思って諦めたけどまた挑戦しようと思った全ての勇気ある人に読んで頂きたい作品です。頑張っている最中で「上手くいかなくて自分で自虐でもしないとやってられない瞬間」って誰しもあると思うんですけど、その波にも踏ん張れる強さをうみ子さんと一緒に育ててるようなそんな気になってしまい、読者の私も勇気を貰えました。そんな個人的な気持ちとはまた別のオタク的観点から見ても今後の海くんとうみ子さんの関係性の変化も非常に気になるので色んな意味で目が離せません。2巻も最高だったので続きが早く読みたいです……。

フリーランス / 金輪英恵

- やりたいことに「遅すぎる」はない。めちゃくちゃ背中押してくる、説得力しかない作品だから、なにかやりたい、夢がみたいなって人たちは年齢かわからず残らず全員読んでやりたいことやってほしいし夢かなうといいねって思います。たとえかなわなくても「やったぞ」という事実に残り、きっと糧になる。書きながら気づきましたが下手な自己啓発より全然強いなこの作品。うみ子さんの創る映画、楽しみにしております！

（株）プロプラス 商品部 / 池本美和

- 「いいマンガ」には、時に読者にとって救いになったり、気づきを与えてくれたり、日常のつらいことを忘れさせてくれたり、さまざまな役割がある。そういう意味で本作は、読者に一步を踏み出す行動力を与えてくれる作品かもしれない。主人公のうみ子は60代で夫と死別し、数十年ぶりに映画館を訪れる。「そこには、人生を変える衝撃的な出来事が待っていた」という紹介文は少々煽りすぎだが、その「衝撃」がごく個人的なものだとするならば、誰にでも衝撃的な出来事は起こりうる。ふとした出会いをやり過ごさず、分不相応という思い込みや「卑下するような謙遜」を捨て、自分の才能を見つめ、努力をもって、船を出す。勇気を振り絞って一步目を踏み出すときに、背中を押してくれるような作品。中高年の魂に火をつける着火装置として（かつ、若年層には中高年を許容する優しさを育てる装置として（笑））高齢化社会を迎える日本人必読のマンガ（になるかも）。

（有）馬場企画 編集者／ライター / 松浦達也

- 年を取ってから美大に通う、そんな新しい何かをはじめたいと思う作品でした！

公務員 / 東くるみ

マンガ大賞2022 ノミネート作品

ライド社 / トーチ web

「自転車屋さんの高橋くん」松虫あられ

選考員コメント・1次選考

- 高橋くんがとても優しい。いいこ。4巻清子ちゃんのくだり良かったです。私からも頼む清子ちゃんを大事にしてやってくれ。

金海堂イオン準人国分店コミック担当 / 園田美智子

- 両思いになれて、良かったねえ、楽しみだねえ、と思っていたら、また中々な壁にぶち当たりましたね…。良き方向に進んで行って欲しいわ…と、切に願っております。ドキドキします…。高橋くん、色っぽいですねー。

書店員 / 桶谷佳代

- webで無料で読めていましたが、まとめて読みたくて電子を買ったのに。結局、友人にも勧めたくて単行本も買ってしまいました。はじめは「自転車屋さんの高橋くんとのラブが始まるのね！」と単純な気持ちで読んでいたのですが、(間違っていない)2巻以降が特にすごく良くて。同僚のキミちゃんの優しさや主人公カップルの複雑な家庭事情が少しずつ垣間見えたことで、深みがぐっっ！と増して、心に染み込めます。主人公のともちゃんが「東京から岐阜へ就職した」という設定のため、地方特有の匂いが感じられるところも魅力です。4巻のあとがきを読んで、遼平くんには近所の人たちや友人がいて孤独にならなくて良かったなあと思いました。ともちゃんも遼平くんも幸せになってほしいな。

出版社営業 / 佐々木つむぎ

- トキメキがつまっていまして、ちょっと赤面がうつるくらい照れちゃうけど、良いのよね？ってなります笑

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- 人に流されやすい主人公が、ぶっきらぼうだけど正直な高橋くんと出会い、優しく心を溶かしてゆく恋物語。世の中にはたくさんの思い込みや偏見があって、時にそれを受けて押しつぶされてしまいそうな瞬間がある。でもこのお話を読んでいると、自分の心にある気持ちを大切にしたいんだと思える。不器用でうまくいなくても、素直に生きることによって幸せになれると気づかせてくれる素敵な作品。煮物フレンズ好き。

デザイナー／シンガーソングライター / 平松新

- なんだかんだで優しい人たちが出てくるほっこりした、恋のお話だと思う。恋の始まりや経過って結婚したわたしにはもうこの先ないのかと思うとなんだか懐かしいような愛おしいような感じでつつい読みでしまう。

カメラマン / 平沼久奈

- この漫画読んだらみんな高橋くんのこと大好きになっちゃう、そしてパン子の弱さと優しさに心がぎゅっとなってしまふこと間違いなし。そんな1冊です。ただの胸きゅんじゃないからこそ、優しく、切なくて、時には間違えちゃうけど、それでも寄り添い続ける2人のこれからをずっと見守っていたいと思えるのです。

女優 / 齋藤明里

選考員コメント・2次選考

- 1次で投票していました！祝ノミネート！とっても嬉しかったです！！やっぱり素敵な漫画だし、高橋君は格好良い！！「好きだけど好きだけじゃ上手くいかない恋愛」描写がリアルで、本当の恋愛ってどうしても仕事や生き方や住んでいた場所が影響するもの。最新刊では、パン子ちゃんのお父さんや山本くんのカミングアウトも描かれていましたね。たもつの話は切なかったです。。東京編は波乱が続きそうですね。育った環境は違うけど、淋しい思いを抱えていた2人がどうか幸せになれるように…！（お願いします、作者さま！）

出版社営業 / 佐々木つむぎ

- 大大大好きな「違う2人が仲良くなる」お話。どうかこの2人を傷つけないで、いや私が守るという親心が発生して胸が苦しいくらい2人が好き。不穏な空気がずっとあるけど、高橋くんがいれば、いやむしろパン子ちゃんなら、きっと自分で幸せになると信じています。高橋くんの、言葉より先に誰かのために体が動く（動ける体であること含め）ところも男性キャラとして最高。もちろんヤンキーなのも（なのが）最高。高橋くんとやさしいテルちゃん、パン子ちゃんとしっかり者のキミちゃん、2組の友情もずっと見てたいです。

ライター / 門倉紫麻

- 派手な事は起こらなくても、こんなにもキラキラしてる、読みたかった少女漫画はコレなのよ、としみじみ感じる良い塩梅。日常の何処にでも溶け込めるような気安さが、作品にもキャラクターにも装丁にもあって、暇してるならどうぞと気負い無くおススメ出来る感じが好きです。

元書店員 / 井出麻悠美

- 全人類高橋くんのこと好きでしょ。と思ってしまいます。少しずつくっついては少し離れ、またくっつく。そんなもだもだした高橋くんとパン子の関係性に、全読者が悶えながらときめいてるに違いありません。

女優 / 齋藤明里

- 一話目読んだ時点ではゆるっとふわとしたほのぼの恋愛物かな？と思いきや。ヤンキーと真面目天然女子っていう記号、キャラを超えてしっかり人間が描かれてる。主人公たちの周りの人間も同じくで、「この人はこういう人」という型以上に踏み込むと、人間で多面的だよな、ということに気づかされるしそこがとてもリアル。言語化されないできないこと、そういうものがリアルな人間だなと。

元書店員 / 内野智未

- 不器用な二人のハートフルなラブストーリー。なんだか、凸凹コンビみたいな二人がちょっとずつお互いに近づいていって心通い合うストーリーにキュンキュンします！キラキラしたラブストーリーではないのだけど、つい続きを読みたくなるお話です！！

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

- 高橋くんがとにかく、かっこよくて可愛くて、度肝を抜かれる。過去に夢中になって読んだヤンキーマンガの主人公たちをゴボウ抜きにして、抜群に味わい深い。なんちゅうチャーミングなキャラか。大好き。つるんでるのがヤンキー友達じゃなくて、人の好きそうなラーメン屋店主とオタク青年という組み合わせも好き。「自分が我慢すればいい」に囚われているヒロインは一步間違うと、よくある”生きづらさを抱えたいい子”像にはまっちゃいそうなんだけど、そうはならない。思いがけないタイミングでキレたり、デレたり、腹をくくったりするところが楽しい。

ライター・老年学研究者 / 島影真奈美

- ひとりから、ふたりになり、ふたりの世界がどんどん大きくなって、いろんな人の心を開いていく。風が立ち変化していくときに受け入れたり応援したり、すごく気持ちのいい大切に読み進めていきたい作品です。

アニメイト / 鈴木寛子

- トキメキがつまっていまして、ちょっと赤面がうつるくらい照れちゃうけど、良いのよね？ってなります笑

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- よくある疲れた女子が癒やされる系かな？と思ったら、思った以上に癒やされてしまいました。疲れてるのかな…。他人にも自分にもなるべくフェアでいたいなあと思うのですが、そうありたいともがいている人間にはとても共感できる、がんばろうと思える作品です。

株式会社来知 WEB デザイナー / 河本智芳

- 最初、自転車屋さんの日常話かと思って読み始めました…全くタイプの違う男と女、地方と東京、世代間のギャップなどいろんな差が、ギスギスはしてないんだけどはっきりとそこにある感じがします。それを二人がどう埋めていくのか、今後の展開が気になる作品です。

会社員 / 林礼春

- 癒し系カップルのマンガかなと思ってほのぼのの気分で読んでいたら、とんでもなかった。巻が進むにつれ、登場人物それぞれが抱えている問題の根深さに驚くほど心を抉られる。ほのぼのの感の向こう側に漂う不穏さが妙にクセになる不思議なマンガ。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

- 先が気になって仕方ないです。続きが読みたいです。これから、ハッピーを期待しますよ…。

書店員 / 桶谷佳代

- 自分を傷つけたあの人も誰かに傷つけられている。傷つけられている自分も誰かを傷つけている。そんなことを考えたりしました。高橋くんというキャラクターがとても魅力的です。生み出してくれてありがとうございますの気持ちです。

金海堂イオン準人国分店コミック担当 / 園田美智子

- なんとなく昭和レトロか平成ノスタルジックな雰囲気をまといつつも、しっかり令和の恋愛マンガでした。高橋くんが見た目的にぐいぐい行く俺様タイプかと思いきや、なんて繊細で思いやりのある男子なんでしょう。このマンガを読んで、高橋くんを好きにならない人なんているのでしょうか。パン子と高橋くんの、大人同士なのになかなか進展しないゆっくりした恋に、とても癒されます。二人を見守る友人たちも、すごくいいです。

主婦 / 堀江千秋

- キュンする可愛さ止まらない作品。不器用な二人はとてもかわいい。そして高橋君！がモテてきたところがいい。それなりに彼女がいたのもいい。恋愛漫画で過去の恋愛が肯定的に描かれているものは少なく、なんなら存在しない場合もある。だけど高橋君は普通に恋愛をしてきた男である。だから情があついのだし、今の包容力だって説得力がある。本当の恋をたくさん経験してきた人にとっても、キュンできるという稀有な恋愛漫画だと思う。二人はそれでもいつか別れるだろうか。ハッピーエンドのみしか想像できない作品ではないのがよりいい。ファンタジーのリアルの融合が素晴らしい。

会社員 / 西尾美里

- もうっキュン活に。これは読んでみて！

フリーアナウンサー・本屋 SENSE OF WONDER / 松尾翠

- しれっと我慢してしまうことあるよなあ。我慢するのが癖になってしまっている、そんなパン子や周りの人たちに、ズンズン入って来てくれる高橋くんに救われます。そしてそんなパン子だからこそ高橋くんも救われるのかな。安心できる、自分の居場所だと思える場所は大切。

声優 / 富岡美沙子

- 高橋くんのルックスが怖い。彼は作中モテモテなので今やそういう時代ではないのかもしれないと思うのだが、でもどうしても金髪メッシュにピアスの自転車屋さんに妙なリアリティを感じてしまい、なかなかそれが払しょくされない。が、読み進めていくうちに、彼の友人、生い立ち、彼のやさしさに読者である我々も触れていく。そして彼の素朴な良さに気が付く。凄いな高橋くん。

ブランド October Beast 代表 / 北山友之

- 全女性が読むべき漫画！女性ホルモンがでます！合法的に！高橋くんを追い求めて自転車屋さんがあったら毎回のぞいてしまうことになりますので要注意です。肌が綺麗になりたい方は読むべき漫画です。

ヘアメイク / 北原由梨

マンガ大賞 1次選考作品

全作品名・選考員コメント掲載

「青野くんに触りたいから死にたい」椎名うみ

- 2019年にも投票しましたが、今年が8巻ということで再投票！春にはWOWOWでドラマ化とのことで楽しみです。新刊がでる度に、黒青野くんがハチャメチャに怖くなっていき、内容も心臓が抉られ胸が痛くなりますが、それでもますます面白さの威力は増していきます。セルフネグレクト、虐待、家庭の歪み、思いやりの反転による心の暴力など人間の気持ち悪さを描写する解像度の高さと土着信仰や仏教要素をロジカルに組み立てていくホラーとしての完成度の高さ。この2点が、彼岸と此岸の間で苦しみながらも互いを思いやる青野くんと優里ちゃんの切ない恋愛を、極上のエンターテインメント作品にしていると思います。そして8巻！パラダイスシフトの考察もビックリしました！よくそんなこと考えつくなど。（7巻エピローグの蒼太…辛い…涙）新章の「受肉編」も胸アツです！！今後の展開である学園文化祭・劇・降霊術なんてものが描かれるのは『六番目の小夜子』（大好きな恩田陸先生の小説）以来では！！？？次巻とても楽しみにしています。

出版社営業 / 佐々木つむぎ

「あおのたつき」安達智

- 吉原を舞台とした和風ファンタジーです。作者の画力の高さと、よくある吉原の話ではなく人の心の内面をえぐる様な話が魅力です。鎮守様の可愛さにも和みます。

図案家 / 橋本寛子

- 和物が好きな人って一定数いると思うのですが、是非手に取って欲しい。江戸っ子！スッキリ！もののけの巧みさ！和の世界をスッキリさっぱり爽快に落とし込んだ作品。

鳥取県高校教師 / 佐川由加理

「悪役令嬢転生おじさん」上山道郎

- 数多ある悪役令嬢転生ものの中で異彩を放つ一作！悪役令嬢の役割を全うしようとする中の人（元おじさんサラリーマン）が、行動すればするほどヒロイン含む周囲の人々から愛されていく、超天然真性ヒロインおじさんの物語。転生ものの中で断トツに好きです。

元書店員 / 内野智未

「あしあと ちばてつや追想短編集」ちばてつや

- 追想とあるように、作者の思い出話ではあるけれど、大上段に構えることなく描いているせいか、田舎のおじさんが話してくれる昔話のような気がします。おじさんがニコニコしながら話すから、こっちもニコニコ聞いていたけれど、そうじゃないと後になって気づく。そんな漫画です。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店コミック担当 / 山本さとみ

「あたしゃ川尻こだまだよ」川尻こだま

- グルメマンガのリアクション芸は何かとマンネリ化しがちですが、本作は毎回工夫が伺えて楽しいです。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

「あなたはブンちゃんの恋」宮崎夏次系

- ラブとホラーとコメディがまざった、なのにしっかりきゅんな恋愛物語。前回エントリーしたときはまだまだ先が読めないタイミングだったけど、巻数が進んでも面白くなるばかり。増える奇人キャラクター！そして切なすぎる恋暴走！片思いついて狂気じみてる、そうでしょ？といわんばかりの圧倒的謎展開。なのにエネルギーに満ち満ちている。会社の同僚3人に勧めて3人が買い、愛した作品。おすすめ！

会社員 / 西尾美里

「アフターゴッド」江野朱美

- 異常なまでの描き込みの美しさ。まだ序盤のため、何度か読み返しても？なところはあるが、なんだか圧倒される世界観。ただし、読者は選びそう。

コミック担当 / 実松由夏

「雨夜の月」くずしろ

- 主人公と同様の自分の無知を自覚させられて思わず赤面。そこから頑張る主人公が素敵すぎて応援したくなる。すごく考え抜かれた作品と言う感じがします。

図書館員 / 金田健太郎

「Artiste」さもえど太郎

- パリのレストランやアパートマンを舞台に綴られてきた Artiste も、もう 7 巻。すごくいい顔で描かれるたくさんの笑い顔に、何度だって楽しい気持ちで読み返してしまうお話だけど、これは一貫して、人の中で過ごすことに生きにくさを感じてる人たちが、人の中で居場所を見つけていく物語で、きっと生きにくくない人なんていない現代において、いろいろな気付きを与えてくれる大好きなマンガです。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- 優しくて幸せな話が読みたい時、つい手にとる作品です。ままならない自分を抱えながら人との距離を探ることに少し疲れた時にそばにあってほしい本です。何度か推しててしつこいですが、読み直すとやっぱり好きだなあという気持ちが湧いてくるので、今年も推します！！

株式会社来知 WEB デザイナー / 河本智芳

- 才能はあるが気弱で心優しい青年が、リーダーとしてレストランの厨房をまとめあげるために奮闘する物語。リーダーとして、なかなか認めてもらえない彼ですが、不器用ながらもメンバーを信じ、地道にコミュニケーションをとりつづけることで、くせ者揃いのメンバーをまとめあげてゆきます。チームがすこしづつ機能してゆく過程は痛快というよりは、どこか穏やかな気持ちにさせてくれます。レストランの場面以外にも、主人公の暮らすアパートに集う面々との交流もコミカルでとても暖かい。読むと穏やかな気持ちになれます。人と交わることの大切さを教えてくれるマンガです。人付き合いに疲れてしまった人におすすめのマンガです。

システムエンジニア / 廣瀬公将

「アンナ・コムネナ」佐藤二葉

- これはもう推すしかない。いったいどうなってるんだこの国は！ 21 世紀の日本で、ビザンツ帝国の皇女アンナ・コムネナの物語が読めるなんて！ アンナ・コムネナはビザンツ帝国＝東ローマ帝国皇帝アレクシオス 1 世コムネノスの娘。高い知性と教養、そして皇位への野心をもった恐るべき女性。崇敬する父の治世を後世に残すために表した『歴史』をもって、世界史上最初の女性歴史家ともなったと言われる人物。ということしか、わたしなんか知らなかった（！）わけですが、この極東の島国には、アンナ・コムネニ『アレクシアス』の翻訳も存在し、その評伝まで出版されているという。それが漫画になるという！ このきっと一筋縄でいかなかったら女性の生涯を、とてもかわいらしい少女時代から描こうという野心作。作者がちがえば陰惨な宮廷劇にしかならないだろう物語が、これからどのように展開していくのかとても楽しみです。

教員 / 戸田穠

「いえめぐり」ネルノダイスキ

- シュールなのにポップ。サイケな世界に浸るとき、これは必携です。トバされます。

小説家 / 海猫沢めろん

■登場人物と一緒に不可思議な世界に沈み込んで読むの心地よい作品。読むというより体験するという感覚。

医師 / 岸本倫太郎

「生き残った6人によると」山本和音

■ゾンビとショッピングセンターという定型を活かし、日常感を伴うドラマとサバイバルを融合させたセンスが秀逸。著者の初短篇集『夏を知らない子供たち』も今年度の収穫だった。

書評家 / 福井健太

「違国日記」ヤマシタトモコ

■叔母（高代槿生）と姪（田汲朝）の不思議な共同生活もなんとなく軌道に乗ってきて、ここ最近では周辺の人たちのエピソードが多め。7巻は、槿生の元カレ・笠町信吾が男社会から逃げた結果、やっと「人間」になれて余裕が出てきたという話。8巻は、榎えみりは同性と付き合っているんだけど、そのことを親友である朝に言えていなくて悩んでいる話。微妙な感情をうまくすくい取っており読後の充実感がハンパない。

鳥取県立図書館司書 / 野間勤

■最初、女子高生の「朝」は実に普通な子で、叔母の「槿生」が大変偏屈な人に見えていたのですが、だんだんと「朝」に色がついてきました。実はこの「朝」の成長物語でもあったのだと気づいて続きがより楽しみになってきました。

会社員 / 林礼春

「異種族レビューーズ」天原、masha

■めちゃくちゃ人に勧めたいのにそのハードルがめちゃくちゃ高い作品。飲みの席ですら躊躇躊躇もとい躊躇しちゃうレベル。でも聞いてくれ本当に面白い作品なんだって！！さらっと言えば異世界でエロ好きな主人公たちが異種族たちのエロいお店に行くって作品なんだけど、それだけじゃない。それだけならアニメ化なんかできないって古事記にも書いてある。読んでてすげえと思うのは設定の作り込みとワードセンス。そもそも設定が異世界の時点で何でもありなんだけど、多くの異世界モノにありがちな人間（主人公）にとって異種族＝ご都合主義のオンパレードなところこの作品はかなりフラットになってる。確かにエルフが長命で何百歳でも見た目若いってだけなら、エルフ同士にとって年齢の差って何なんだろうなとか考えたこともなかった。作中では魔力の鮮度が歳取れば取るほど乾涸びて不快に感じる、みたいな説明になってて、魔力なんて関係ない主人公（人間）が何百歳のエルフに興奮してるのを仲間のエルフが「ありえねえ」って言ってるのがもうなんかすげえ目から鱗。落ちたところで何も啓かねえんだけどな…。ワードセンスについてはレビューのタイトルがとにかく品が下で最高の高。キビヤックを下ネタに使うとか天才かよ。それにしてもサザエさんの寝室からティッシュが消える今日にこの作品がアニメ化する圧倒的なコントラディクションッッ…最高にクールだ。世界よ、これがCOOL Japanだ！！

会社員 / 布施直人

「遺書、公開。」陽東太郎

■読み進めるほど謎が深まる…ちょっと先が見えた気がした所からまた謎の闇に落とされる感じがたまりません。毎回、うわぁ！次はまだかー！！と必ず感じます。読後も人が人をどう思うか、何を感じるか、自分への問いかけをしてしまいます。まだ、爽快感はないけど最後まで見つめていたい作品です。

図案家 / 橋本寛子

「急がなくてもよいことを」ひうち棚

■著者の日々の暮らしを切り取ったマンガ。しかし絵に非常にくふうが凝らされていて、エッセイというよりは小津映画の一部を観ているような感覚。

角川文庫編集部部长 / 関口靖彦

■ 単行本タイトルにして表題作に心を掴まれました。日常にある幸せ。

往来堂書店 / 三木雄太

「いびってこない義母と義姉」おつじ

■ 電車の中で読んじゃダメな、圧倒的な絵力で突き進むコメディ、いやギャグマンガです！ 庶子で母の死をきっかけに名家に引き取られたヒロインは、義母、義姉にいびられるかと思いきや…！！ホントにツンツンデレな義母と義姉たちの顔面の圧が凄すぎるし、何より色々振り切り過ぎてて大好きです！！家政婦は見た的に、メイドの一人として最後まで見届けたいくらいです。

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

「ウィッチウォッチ」篠原健太

■ ちょっと抜けてて惚れっぽいキュートな魔女と、それを守る使い魔の鬼がやってきた！ …いや昭和のマンガのことを言っているみたいですが、洗練されてどこまでも丁寧な絵柄は、古くさいどころかこれを週間で描いていることに驚きしか感じない、超・王道！のコメディ。（そう、ギャグマンガと言うよりコメディ。）この底抜けに明るいコメディが、ほぼ毎話完結でオリジナルで作られているのに、磨き抜かれた古典落語のように、一つたりとも無駄な台詞もコマもない！ 読んでる自分の顔が自然にニヤニヤしているのがわかる。それだけ緻密なら、息苦しくなりそうなところ、そこがまったく逆。コメディらしく登場する魔女・鬼・天狗・猫少女・オタク先生その他もろもろを全員肯定するやさしくておおらかな雰囲気ベースをつらぬいていて、絶妙に空気がやわらかい。多様性のある社会、ってのを本当に実現するなら、こういうことなんじゃないでしょうかねえ。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

「WIND BREAKER」にいさとる

■ また不良漫画か…と思ってたら主人公を始め、キャラクターが魅力的です。そして不良なのにちょっとかわいい…

コミック担当 / 実松由夏

「うきわ、と風鈴。－友達以上、不倫未満－」野村宗弘

■ 副題に「友達以上、不倫未満」。夫の転職に付いて上京したものの、すっかり仕事人間に変わってしまった夫にさみしい思いをしている人妻・美以子。雇われ店長をしていた店が新型コロナ禍で閉店に追い込まれ、妻との仲も冷めつつある元シェフ・牛久。緊急避難用の仕切り（「隔て板」というらしい）を挟んで団地の隣戸に暮らす30代前半の2人が、いろいろあって次第に心を通わせていく。`よろめき団地妻、とか昭和風に形容されてしまいそうな設定だが、ずっと品良く、ずっと（今のところは）プラトニックで、ずっと切ない。胸が詰まるような美以子の孤独と、人の良さゆえに人生がうまくいかない牛久の（無意識の）焦り。そんな心情が交錯する過程で生まれる、親愛の情とも不倫のあざとさとも言い切れない切実な感情がじっくり描かれ、ざわざわとした気持ちにさせられる。同じ作者でドラマ化もされた「うきわ」（2012～14年連載）の令和版、という触れ込みなのだけれど、違うのは新型コロナ禍が背景になっている点だ。コロナにここまで真正面から向き合ったマンガはさすがにあまりないのでは。『出会いの頃』という章題が付いた2019年（コロナ前）の時間の流れと、『現状』という章題が付いた2020年夏（コロナ1年目）の時間の流れ。2つの時間の流れが行きつ戻りつするように登場し、それぞれ進展していく。つまりはコロナ禍が現在進行形のいまから、コロナがなかった過去が回想されるということになり、寄る辺のない不安さからつながりにすぎりたくなる不安定なころもちが現実味を帯びる。やばい。第2巻では今春刊行予定の最終第3巻に向けて『現状』編のエピソードがぐいぐい進行しているだけに、どんな結末を迎えるのかが気になる（読んでいないけれど掲載誌ではまさに佳境？）。なお第1巻の後半になるともうひとつ、『馴れ初め』という章題が付いた2020年2月（コロナ寸前）の時間の流れも出てくるため、ぼんやり読んでると戸惑うかもしれないが、その戸惑わせの手腕も本作の魅力。絵柄はぱっと見、素朴な印象なんだけれど、潤んだ瞳の描き方などたいへん艶っぽく、マンガを読む醍醐味が味わえると思います。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

「うちのちいさな女中さん」長田佳奈

- 昭和初期を舞台に翻訳家の女性の一人暮らしのお屋敷で働くことになった、14歳のちいさな女中さん、ハナちゃんのお話。着物や調度品、ゆっくりとした時間が流れる丁寧な暮らしの描写に引き込まれる。長く、繰り返し読みたい作品。絵が美しい！

元書店員 / 内野智未

「ウマ娘 シンデレラグレイ」久住太陽、杉浦理史、伊藤隼之介

- 人気ゲーム「ウマ娘」のコミカライズといえばそうですが、それだけでは推し量れない熱量。読みだすと、ページが止まらなくなるので。オグリキャップの快進撃を知る人も、知らない人もどちらも楽しめるでしょう。

サブカル専門ライター / 河村鳴紘

- コンテンツ（ゲームやオグリキャップ）自体の力もありますが、そこに負けない迫力、キャラの表情、引き立てる演出が凄まじく、何処までも引き込まれていきます。芦毛の馬は走らないという有名な話もありますが、そのレッテルを覆すように、地方のウマ娘が中央で活躍する、灰被りのシンデレラストoryを是非読んでいただきたいです。

会社員 / 三浦佑樹

「うめともものふつうの暮らし」藤沢カミヤ

- 天然ボケとやさしいツッコミ。ただただかわいい。癒されます。大人にも子供にも読んでもらいたい。

COMIC ZIN 商業誌担当 / 塚本浩司

「陋巷酒家」丸岡九蔵

- 転生はしてないものの、この異世界ブームに何故これが流行らないのか！読んで！読んで！某アンリミテッドで読めますから！たしかに絵柄は決して今の流行とは違うでしょう。でも特筆すべきはこの世界観の完成度の高さなのです！矛盾なく壮大なバックグラウンドを感じる。のにやっていることは人情酒場。ということ？でよ面白くて何度も読み直しちゃう。ぜひ手に取って欲しい作品

鳥取県高校教師 / 佐川由加理

「うるわしの宵の月」やまもり三香

- 女の子なのに王子と言われる主人公・宵から溢れ出てくる初々しい女の子感。恋を知らなかったからなのか、そのうぶさが可愛らしすぎてこの子のどこが王子なの？と考えてしまう。それを引き出してくれる市村先輩はヒーローですね！幾つになってもときめきを忘れたくない人に読んで欲しい。

会社員 / 八重田幸子

「映画大好きポンポさん」杉谷庄吾【人間プラモ】

- 2021年に話題を呼んだアニメーション映画『映画大好きポンポさん』は杉谷 庄吾【人間プラモ】の原作漫画に描かれていた、映画にかけるクリエイターの情熱と、そしてのめり込みすぎるあまりに見せる常識を飛びこえる言動をより色濃く見せてくれて、観ている人に映画であり作品と向き合う居住まいを正させた。 そんな『映画大好きポンポさん』が幾つかのスピンオフ作品と、そして正統な続編『映画大好きポンポさん2』と経て『映画大好きポンポさん3』で完結した。第1巻から主役を務めるニャカデミー賞監督、ジーン・フィニの監督業にかけるとてもない熱量を、倍増して浴びせられるストーリーだ。 ジーンやポンポさんたちの活躍に刺激されたか、ポンポさんの祖父で名プロデューサーとして知られたペーターゼンが現場に復帰し、ジーン監督で1本新しい映画を撮り始める。その一方で、ポンポが通う学校（学生だったのだ！）の同級生にカメラマンの才能を持った少女がいて、ポンポは彼女のために1本映画を撮ろうとする。 そこで起こったのは、『映画大好きポンポさん2』で繰り広げ

られたジーンとポンポさんとの映画監督対決よりも凄いこと。あり得ないくらいの働き方をするジーンの姿に唖然とさせられ、アカデミー賞俳優を含む超ベテラン俳優たちが相手でも譲らず映画のために脚本を書き直すジーンの思いに陶然とさせられること確実だ。結果、ひとりの才能に溢れたカメラマンが誕生し、ポンポさんの近くで燦っていた俳優が日の目を浴び、大舞台へと駆け上がっていく。そして思う。映画は本当に良いものだ。そしてとてつもなく怖いものだ。『映画大好きポンポさん』の好評だった映画を、平尾孝之監督がこの作品で作ったらどれだけの狂気と熱情が迸る作品になるだろう。観てみたい。

書評家／ライター／タニグチリウイチ

- 子どもながらに天才映画プロデューサーであるポンポさんと「自分には映画しかない」というジーン・フィニが映画を作る漫画。全3巻。かわいい絵柄とポップな表現に彩られてテンポよく描かれるのはその実、作ることにとりつかれた不器用な男のもがきと餓え。2巻と3巻のラストはそれぞれどちらも別のベクトルでぐっと胸を掴まれました。

会社員／津田圭

「永世乙女の戦い方」くずしろ

- 設定からすると「女流将棋マンガ」である……が、もしかすると最近では、こういうカテゴライズをすることさえもジェンダー論としては問題視されるのだろうか。というのは脇道のようにもあるが、この作品は「女流」をマクラにつけず本質を語ることができない。棋界という男性上位の社会において、女性がどう生き抜いていくか。本作は書きこむ背景ほかただの男性のなかで、「女流」が重要な作品の要素となっている。そもそも将棋界において「女流」として区別されること、男性の棋士と比しての格下扱い、社会のなかでの不確実な立ち位置……。主要キャラクターそれぞれに「女性」という枷があり、その枷がエンジンとなって、それぞれの女流棋士を際立たせ、グイグイとドライブ感に昇華させていく。熱い！

(有)馬場企画 編集者／ライター／松浦達也

「江戸前エルフ」樋口彰彦

- 異世界モノが一般的になると、今度は逆に地球に呼び出されたり迷い込んできたりするファンタジー世界の住人というジャンルが出来上がっていますが、そんな諸作品の中で、江戸開府の頃に徳川家康に呼び出され長寿から「神社の御祭神」にされたエルフが現代まで生き続けており…という設定と、それを生かした「江戸の頃は～」と新人巫女に江戸蘊蓄を聞かせるギミックの利かせ方に「上手い！」となった作品

住職・ライター／蟬丸P

「縁の手紙」チョ・ヒョナ

- 児童文学にはたくさんの庭が登場します。海外の名作なら『秘密の花園』『トムは真夜中の庭で』。日本だったら『夏の庭』『西の魔女が死んだ』など。この作品を数年前に電子で見つけたとき、大好きな児童文学を読み始めるワクワク感を思い出して興奮しました。フルカラーで書籍化されて嬉しかったです！馴染めない転校先で見つけた謎の手紙。そこから少しずつ暖かく不思議な世界が広がっていきます。庭を見つける場面はとっても魅力的。絵や構図も丁寧で美しく、素敵なお話を観ているかのようです。元々は韓国の漫画とのことですが、登場人物はすべて日本の名前に翻訳してくれているため、違和感なく読めます。

出版社営業／佐々木つむぎ

- たった10話の物語。いじめが原因で転校したものの新しい学校に馴染めない主人公が1通の手紙に導かれ巻き起こる魔法のような日々。謎解きのような手紙に読者も一緒に導かれているようでドキドキします。連載は2年前にLINEマンガで。私が知ったのは2021年の1月でした。大泣きしながら読んで、単行本がほしいと検索してみたら日本で書籍化はされてなく、作者様は韓国の方でSNSなども見つけられず諦めていました。しかし、7月に本屋さんに立ち寄ったら、新刊コーナーに書籍化された縁の手紙が…！思わず「えっ」と声が出てしまいました。嬉しくて嬉しくてその場で泣きそうになった。フルカラー縦読み漫画で、縦読みでの構成や絵が素晴らしいのでまずはLINEマンガで読むことをおすすめしますが、読んだら絶対単行本がほしくなります！宝物のような物語を本

として持っておきたくになります。単行本には書き下ろしもありますし、ぜひ両方で読んでほしい！

声優 / 富岡美沙子

「扇島歳時記」高浜寛

■ ニュクスの角灯に、たまをさん出てくるのですが、そうなのか……! と、思いました。読み続けていくと、ソワソワソワソワしてしまいます。続きがどうなるのか、ソワソワしています…。続き、早く読みたいですが…、ソワソワ…。

書店員 / 桶谷佳代

「往生際の意味を知れ！」米代恭

■ 元カレ、元カノのラブコメ漫画かと思ったら物語はどんどんラブコメとはかけ離れていき予想を裏切られていくストーリー展開。無茶苦茶な話の進み方にも関わらずどんどんストーリーの中に入り込んでしまう謎の気味の悪さもたまらない隠し味となっています。今年進めるならこの漫画、まだ先は見えませんが次の展開が予想できない分、毎巻発売を楽しみにしています。

ヘアメイク / 北原由梨

「おさんぽマスタース」須藤真澄

■ おさんぽ大王を読んで、お出かけの楽しさを教えていただいて、お出かけに目覚めたきっかけでした。私は、まだまだまだひよっ子ですが、もう、続きは読めないのかな……と思っていたら、まさかの新刊です。飛びつきました。O村さん、ありがとうございます！アルパカ牧場、行ったことあったのですが、流石で、須藤さんの見るアルパカ牧場の魅力的なこと。気づかないことだらけでした。次回に行くときの参考にします。そして、ずっと行ってみたいと思っていた川越に行かれてるのですが、面白すぎます。凄く参考になりました。そのことを踏まえて、おさんぽに行きたいと思います。須藤さんも、O村さんも、おさんぽ、大分しんどそうでしたが、すみません、まだ続きが読みたいです。おかわり希望します。

書店員 / 桶谷佳代

「お嬢と番犬くん」はつはる

■ とにかく可愛くてイケメン笑！とんでもない設定だけど、宇藤くんのかっこよさといさくちゃんの可愛さ(私服と髪型も可愛い?)だけでも読む価値ありな作品。これぞ漫画！なキメキ要素もかなり？

フリーアナウンサー・本屋 SENSE OF WONDER / 松尾翠

「夫は成長教に入信している」紀野しずく、北見雨氷

■ 年齢を重ねても仕事における向上心は常に持っているつもりです。主人公の旦那さんほどでないですが、成長意欲は持ってます。ただ、自分がいなくても仕事は回るとってないといけないと痛感させられました。

Books アイ蒲生エキナカ店 / 野口忠義

「おとなりに銀河」雨隠ギド

■ キュンが止まらない…！登場人物全てが可愛らしくふわふわぽかぽかな気持ちにさせてくれます。

会社員 / 竹本慧

「鬼ゴロシ」河部真道

■ 過剰なバイオレンス描写と何層にも絡まりながら進む物語。読んでいるときの疾走感が良い。

医師 / 岸本倫太郎

「思えば遠くにオブスクラ」靴下ぬぎ子

- まずタイトルがすてき。Amazon で書影を見かけるようになった頃、「声に出して読みたい日本語」のようにこのタイトルが棘のように刺さってしまい、それを回収するように読み始めたマンガ。紹介文には日本人がドイツに移住して感じる文化の違いを描いているお話です、的な記述があるのですが、もちろんそういう側面も十分に楽しめつつも、このお話で描かれているのはそんな紀行エッセイのような内容ではなく、諸事情あってドイツに移り住んだカメラマン（28 歳女性／コミュ障）が、海外生活の中で長年抱えていた言いようのないモヤモヤに向き合っていくお話で、作品づくりをするクリエイターの人なら、きっと感じるものがあるはずです。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- ふとしたきっかけでドイツに移住したフリーカメラマンの主人公。どこに向かうか本人にも分からない漂流感が何ともリアルだ。それでも異国の地で様々な出会いと縁があり、踏み出す足は少しずつ力強くなってゆく…。ドイツ在住の作者の心情が映り込むような描写が、読む者をひと時だけ彼の地に誘う

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

「檻ノ中のソリスト」森屋シロ

- 幼い姉弟が暮らすのは、罪人が集約される監獄街。姉クロエは弟のために戦う。逃げられない地獄のような場所で、クロエが希望の光を見せてくれる。だから、どんな結末が待っているかわからなくても、クロエを信じて読み進めることができました。森屋先生の漫画は、読切と檻ノ中のソリストを読んだのですが、小さな光を見せてくれるところが好きです。全 20 話で全 3 巻です。ぜひ読んでみてください。

声優 / 富岡美沙子

「オレが私になるまで」佐藤はつき

- 「これは『オレ』が『女子高生』になるまでの話」（第 1 話）——。トランスセクシャル的な設定のマンガは多いが、マニア向けだったり、子供っぽいイメージもあったりで広くは勧めにくい。でも、2021 年 12 月に第 4 巻が出たばかりの本作は、それらとは一線を画す「思い」の強さがある。未読ならこの際 4 冊まとめて一気に読んでみて！！と強くお勧めします。タイトル通り、小学生の「オレ」が女子高生の「私」になるまでのストーリー（第 4 巻時点では中学 2 年生）。架空の病気「突発性性転換症候群」によってある朝突然、身体の性別が女子になってしまった少年・藤宮明（アキラ）が、女子として生きていく姿を描く。読者はまずこの設定を乗り越える必要があるが、荒唐無稽と思わず、ぜひ乗り越えてほしいです！身体の変化によるエロティックな要素やコメディ的な描写はなく、男子（＝オレ）のココロを残したまま、いきなり女子（＝私）の世界に投げ込まれたアキラが、日々感じ、考え、試行錯誤しながら、社会性、居場所を獲得していく成長譚だ（実際、第 3 巻までのカバーには「ジュブナイル・ストーリー」と銘打たれている）。男子がふだん自認する「男」とは違うところもある女子の考え方や感じ方、表現の仕方、つながりのつくり方を知るよしもなかったアキラだが、クラスメートや周囲の大人とのあつれきを、いきなり女子として体験させられる（発病後の転校により、現在の周囲はアキラの病気を知らない）。そして、意図しない形で親友を傷つけてしまったり、仲直りをしたり、自分も傷つきながら、少しずつ、ほんとうに少しずつ成長していく。この「成長」をひとコマひとコマ、とても丁寧に描いているところが読んでいて何より魅力。性転換前のアキラはいわゆるガキ大将タイプ。男児には「やんちゃ」とかかって許されきた乱暴な振る舞いや言葉遣いが、いかに女子を（ときには男子も）傷つけてきたのか。女子になったアキラは、そのことをつくづく思い知らされ、折りにつけて思い返し、静かに、でも痛切に「誰かを傷つけると一生忘れてもらえないんだ」とさとする。そんな後悔の念を自覚しながら、どうするのがいいのか、と目の前の出来事について真剣に自問自答する。このマンガのなんともやさしい雰囲気は、男子だった頃の無自覚で傍若無人な行状をいま自覚し、悔いている、というアキラの心情を、正面からしっかりとらえた描写によるのだと思う。自分に関わる人たちに「やさしくありたい」と願うアキラの気持ちを余さずすくい上げ、描き切ろうとする意志が物語の推進力になっている。そして、そんな思いは、紆余曲折はあっても、アキラ自身へのやさしさとなって返ってこくる。そんなふうにして周りの人たちと互いに信頼関係を築いていくのはよきこと、という作者の確信がにじむところが、読んでいて自然に前向きになれる理由だと感じる。

親友の瑠海とアキラ、そのほかのクラスメートの女子たちが互いをさりげなく気遣うようす（視線を交わす、腕をとる、紙を触る、指を絡める・・・）の細かい描写も見どころ。再読するたび、ひとコマごとに新しい発見がある。第3巻では、周囲にとって自分は見まごうことない女子であることにアキラが少し慣れ、文化祭などのイベントを通じてクラスの中で自分の役割を見つけていく。第4巻では、男子生徒を含めて周囲が大人に近づくにつれ、恋愛の要素が入り込んでくるのにとまどう。未熟で、いろいろ間違えたり、自分のことでいっぱいだったたりする中でも、友だちやクラスメイトや周りの大人たちも含めた自分以外の人たちの幸せを大事に考え、摩擦に悩み、「いっしょにいられてよかった」と喜ぶ。そんなふうにみんなと心を通わせながら「成長」していく主人公。とつとつとしたところもあるけれどかわいい絵柄もあって、読後はとてもあたたかい気持ちになる。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

「怪獣8号」松本直也

■ 主人公の愛すべき馬鹿さ加減が愛おしくなる。

PENICILLIN / HAKUEI

■ 凄く少年漫画してる少年漫画。主人公も隊のみんなも良い奴で、ワクワクとハラハラを味わえる。これから漫画を読みたい子供達にもオススメできる、ジャンプらしい作品です。

主婦 / 岸本しのぶ

■ 既に爆発的に売れている漫画ですが、オススメ。爽快感、痛快感、躍動感、など読み手に心踊らせる展開に惚れます。また、主人公が遅咲きのヒーローというところも、ロマンを感じつつワクワク感が止まりません。(自分の力にじゃないけどね) 少年漫画！と感じつつも、その枠を超えて読んでもらいたい作品。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

■ 才能のない中年男性が、世の中には秘めなければならない圧倒的なパワーを手に入れときおりギャグもありまぜつつ奮闘するところが、非常にジャンプ漫画らしい王道なストーリー。アクションシーンのカッコよさや、見せ方のレイアウトなどが卓越している。

デザイナー / 高永貞光

■ 「怪獣大国 日本」から始まる物語。現代日本に次々と怪獣が現れ、それを討伐する防衛隊の戦いと活躍を描く、いわば王道物語、、が中心のはずですが、主人公日比野カフカ 32 歳は、ある日「怪獣8号」になり、なったまま防衛隊に入隊し、押し寄せる怪獣たちと戦い続けます。ヒーローと、そのヒーローを持って余す人類側とのせめぎ合いは、我々社会の縮図のようで、辛いです。さて、どんどん強くなる怪獣にどう立ち向かってくれるのか、目が離せません。

第75期司法修習生 / 三葛敦志

■ 物語が進むごとに面白さが増して、続きが待ち遠しくて仕方がない！今後の展開が、まったく想像できないからその目で確かめるため、読み続けたい。

会社員 / 八重田幸子

「片喰と黄金」北野詠一

■ ゴールドラッシュで一攫千金を狙う人々の話。袖振り合うも多生の縁といいますが、この作品はまさに旅の出会いと別れを描きながら、色んな人々の思いを背負い強くなる主人公アメリカが描かれていて、読んでいるこちらまで勇気づけられます。ウルジャンからコミック DAYS への移籍でなかなか大変だとは思いますが、アメリカ達のように北野先生にはこの作品で一攫千金目指して頑張ってくださいです……！今1番応援している漫画です！

女優 / 齋藤明里

「ガチ恋粘着獣 ～ネット配信者の彼女になりたいくて～」星来

■ 今連載で一番目が離せない作品かも。とにかく思い込んだ女子の怖さが際立ちます。

ブックファースト新宿店 / 渋谷孝

「カペラの眩光」相澤いくえ

- 才能は呼応する。幸か不幸か、天才同士でなくても。それは時に喜びでもあり苦しさでもあるんじゃないかと思えます。また絶対的評価のないものに、人はどこまですがれるのか。そして SNS 隆盛のこの時代に、誰しもが誰かに評価されうるということは、時に残酷なものだなと感じます。この作品では二人の主人公のそれぞれの「才能」を巡る物語を描き、誰をとっても痛々しく、でもそこには負ったばかりの火傷のような瑞々しい生きざまがあって、本人の苦しみをよそにそこに美しさを見いだしてしまっている自分に気づきます。どうか苦しまないで、と声をかけたいけど、無理なんだよねきっと。それならまるとと堪能させてもらいますね。一巻のラストに主人公の背景が深掘りされそうな動きがあり、今後の展開が気になる作品です。

公務員 / 宇田川結衣子

- 27歳売れないバンドマンが友人である天才画家のゴーストペインターになることで運命が動き始める、という物語。話がどう進むかと気になるころですが、主人公2人が望む景色がみれるといいなと願います。前作の『モディリアーニにお願い』もそうでしたが、相澤先生の作品の根底のテーマは“才能”かなと思っています。自分はただの読者で「何者になりたい」という欲はないけれど、キラキラした相澤先生の作品を応援できる自分でありたいといつも思っています。独特の暖かさのあるタッチと、足掻きもがく眩しさにヒリヒリする感情。心の深いところに刺さって、いつも考えさせられます。卒業したモーニング娘。佐藤優樹ちゃんをモデルにした一コマがあることが嬉しかったです。

出版社営業 / 佐々木つむぎ

「神食の料理人」鈴木小波

- 可愛い。絵が可愛いし幼馴染の主人公とヒロインの恋愛模様がとても可愛い。平和だ！平和な両思いは実はかなり幸せを感じさせてくれる。なぜならなかなか現実にはないからかもしれない。それささておき空を泳ぐ魚を釣って獲得し、さらに調理するという大胆な絵や世界観がワクワクする。空も海のように大きく広い世界。これからの展開が楽しみ。そして神食の料理がとてもおいしそう。おなががなります。

会社員 / 西尾美里

「髪を切りに来ました。」高橋しん

- 島移住スローライフ漫画の中でも1番やさしい物語。父と息子の二人がお互いの気持ちを理解しながら成長していく様子がとても温かく優しい気持ちになれます。チラチラ出てくる母の存在がまだ明らかになってなく、そこにもこれからの注目度が増していきます。

ヘアメイク / 北原由梨

「可愛そうにね、元気くん」古宮海

- 2021年完結！！人には絶対言えない性癖を抱えた少年元気くんが、こっそりある女子を対象としてマンガにしていたところ、ある裏表のある女性によってその対象の女性にバレるが、そのバレがまた新たな歯車を回してしまう…！！という、ゆがんだ登場人物しか現れず、その全員のゆがみ方によって先がまったく読めない、というドキドキ展開の作品だったのですが、破綻で終わっても夢がないし、美しくまとまってこれだけ傷つけた周囲はどうなるのよ、という予測を覆し、なんと説得力のある展開で着地。最終話に元気くんが一連の騒動に決着をつけた台詞が、読み終わってからずいぶん経つのに忘れられない。性癖、というものを戯画化も無罪化もせずに描ききった作品。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

「君のことが大大大大大好きな100人の彼女」中村力斗、野澤ゆき子

- ハーレムものはここまで進化してしまった……。インフレしすぎだろう！出オチだろう！と思っていたのに、圧倒的なアイデア力でもう8巻まできた！すごい……。

小説家 / 海猫沢めろん

「君は放課後インソムニア」オジロマコト

- 昨年「オジロマコトさんのマンガにはこのお話で初めて触れたのですが」と書かせていただいたのですが、あまりにも好きすぎて 2021 年は他の作品もいろいろ読ませていただき、もちろんこの「君は放課後インソムニア」も何度も読み返し、何度も高校時代に巻き戻され、何度も何度も悶えた一年でした。背景や景色のすばらしさについてはやはりすっごいなあとアホみたいに口をあけて楽しんでるんですが、主人公たち、その友人たちの表情やポーズのすばらしさについても、ほんとキショクワルイ感じで熱弁したいので、どなたか飲みに行きましょう。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- 誰かに勧めたい作品と聞いて、一番初めに思い浮かぶのはこの作品だった。もし理想の青春があるとしたら、それはきっとこの物語だと思う。ぴかぴかきらきらしていて、自分が好きなものに全力で。各々事情を抱えてこの先がどうなるかわからないとしても、今に全力で。大好きな作品。イサキが可愛いのはもちろんのこと、ガンタが少しずつカッコ良くなっているのも目が離せない。眩しいこの物語を、読者側はもちろん登場人物のみんなも楽しんで欲しい。

会社員 / 杉佳尚

- これほど瑞々しいという言葉が似合う漫画はほかにないと思います。睡眠障害を持つ男女が天文部の部室で出会い始まる物語。天体観測、高校生活、恋。ロマンチックで限りなくまぶしい高校生活。近くにあるようでどこにもない理想的な高校生活なのですが、作者のオジロマコトさんが描く絵は、温度や湿度を感じさせるので、少し実感を持って感じられるのです。そこが、理想で手が届かない別世界の物語と認識しつつも、自分の過去とも地続きであるような少しもどかしい感覚もつれてきてくれます。日々の生活に潤いが欲しい人におすすめのマンガです。

システムエンジニア / 廣瀬公将

「教室の片隅で青春がはじまる」谷口菜津子

- 生まれた星も、家柄も、外見も、性格も。それぞれが違い、悩み、光を探していく中で、人目も気にせず我が道を突き進む 1 人の女の子の存在きっかけに少しずつ周りの世界が変わっていく。その様が、もどかしくも温かくて心地よい。一冊の構成が美しく、迎える最終話への流れが見事。どこか不思議な世界の教室に集う不器用な女の子たちが、きっと心に温かさを与えてくれるはず。2021 年の個人的単巻作品のベスト。

会社員 / 伊東敬祐

「今日のさんぽんた」田岡りき

- ゆるゆる？のダルダル？とした気持ちで読めるけど、意外とグッと心にせまる場面も。延々とボケ続ける飼い主りえ子とツッコミが冴え渡る飼い犬ぼんたのお散歩日記。ぼんたにつっこまれない！！

元書店員 / 内野智未

「金曜日はアトリエで」浜田咲良

- 環さん、麗し可愛いです。石原先生、クールイケメンで、ずるい可愛さを見せて、読む度に、ずるいわ…と思ひながら読み続けています。他の方たちも、魅力的で、これからどうなるのかな…と、楽しみにしています。

書店員 / 桶谷佳代

「九龍ジェネリックロマンス」眉月じゅん

- 繊細なタッチから描かれる各キャラクターの心理描写や間の取り方などが独特で卓越している。前作にあたる「恋は雨上がりのように」から引き続き恋愛ものではあるが大人の恋愛感や、恋愛漫画でミステリーなところに惹かれるものがある。

デザイナー / 高永貞光

- この土地に、この世界に、私もずっと恋してる。もっともっと九龍が見たくなる。

フリーアナウンサー・本屋 SENSE OF WONDER / 松尾翠

- まだまだ物語の全容が見えてこない中で、それでも九龍の街並みや登場人物たちの表情、各々の想いに惹きつけられてこの物語から目を離すことができない。きっと自分も本作の九龍の街並みに恋をしているのだろう。行き先がわからない九龍での暮らしを、是非手にとって味わって欲しい。

会社員 / 杉佳尚

- 九龍城あるいはあらかじめ失われたものたちをめぐるラブロマンス。眉月じゅん描くところの登場人物たちの魅力に加えて、舞台となるところかノスタルジックな風景の描写が良い。この世のどこにもありはしないはずの、一瞬の風景をコマで切り取るのがうますぎる。このマンガの魅力を端的にあらわしているので何度でも繰り返すが、ヒロインがちょっと一筋縄でいかない人物だぞと知らしめるために、タバコを吸いながらスイカを喰う女だと描写するのは本当に卑怯。

ソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

- 主人公・鯨井令子を中心にだんだん謎が広がっていく展開に SF 的な面白さを感じます。令子がクローンかどうかというところから、舞台である九龍自体が創り物なのではないかというところまでいつの間にか視点が広がっており、結末が読めない楽しさがあります。

会社員 / 林礼春

「九条の大罪」真鍋昌平

- 枠から外れた弁護士の行動、考え方が気になって読み進めてしまいます。「闇金ウシジマくん」と同じような世界を描いているわけですが、世間とは何か？を、じっくり考えさせてくれる気がします。

サブカル専門ライター / 河村鳴紘

- 「闇金ウシジマくんの作者」といえば伝わると思いますが、弁護士側の目線で社会の闇を見せてくれます。内容もかなりヘビーなので、自分や家族の身に起こったと思うとゾッとしますが、自分の知らない世界のことは勉強になります。毎回毎回決られては次が楽しみで、この漫画の抜けられない闇世界にハマっています。これからも楽しみにしております。

自営業 / 川崎綾子

- 善悪とは何なのか、倫理って何なのか。読むたびに底なし沼にはまっていくようで、でも何度も読み返してしまいます。無知は恥であり罪であり、誰もが知らぬ間に社会の落とし穴で底辺まで落とされることだって、ないとは言いきれません。九条のような弁護士に出会えることが幸か不幸かわかりませんが、知っておいたほうがいい社会のリアルを読ませてくれます。

Books アイ蒲生エキナカ店 / 野口忠義

- 犯罪や加害者側の弁護士に焦点があたる作品で、テーマとしても内容も大変面白いです。何せ法律とモラルの対立が一番尖った状態でぶつかる部分ですから、共感を求める人向けではないかも知れないですが、人の醜さに何故か目が離せなくなる作品だと思います。

会社員 / 林礼春

「グッバイ・ハロー・ワールド」北村みなみ

- AR 自葬パーティー、自らの足で全く動けなくなった人類、環境汚染で生まれた新人類など、私は考えたこともなかった発想だけど、なんだかその未来はリアルでドキドキしました。現代社会の問題も組み込まれており、いつか地球は本当にこうなってしまうんじゃないかというディストピアが広がりますが、嫌な感じや不安はなく、そのディストピアのさらに先に想いを馳せることのできるような、不思議で、心地よくて、今まで味わったことのない読後感でした。可愛い絵と素晴らしい SF。短編集なのですが、読み進めるごとにいい。特に最後の話が好きでした。本のサイズが大きく、左閉じで、蛍光色のページなのですが、とても読みやすかったので臆せず読んでほしい！手元に置いておきたくなる漫画です。

声優 / 富岡美沙子

「グリーンフィンガーズの箱庭」穂坂きなみ

- 不思議な雰囲気切ない現実、そしてちょっと優しい結末。このバランスがたまらなく好み。伝奇風の種明かしがあるのも燃える。

図書館員 / 金田健太郎

「クレイジーフードトラック」大柿ロクロウ

- 破天荒でカッコ良くて痛快。おっさんはカッコよく女の子は可愛い。映画の様な娯楽作。落ち込んだ時には読み返します。

図書館員 / 金田健太郎

「グレイト トレイラーズ」宮川輝

- まず、表紙買いしたくなる。またもや荒廃して世界の話だが、こちらはメカが素晴らしい。ザクザクした感じの描き込みが、大友克洋先生を彷彿とさせてるので、好きな人には刺さりまくると思います。

コミック担当 / 実松由夏

「ケーキの切れない非行少年たち」宮口幸治、鈴木マサカズ

- 話題となった同名の新書を原作とする作品であり、児童精神科医である主人公が、少年院で出会った少年達を紹介していく。非行少年が抱える問題というシリアスなテーマを取り扱っているにもかかわらず、丁寧な描写でサクサク読み進められる。日本では少年事件の再犯率が高いことが問題となっているが、本作は、この問題の本質に触れ、考えさせられる作品である。

弁護士・三村小松山縣法律事務所 / 三村量一

「Get truth 太陽の牙ダグラム」太田垣康男、高橋良輔

- 年末に大本命がやってきました。『太陽の牙ダグラム』といえばSFとしても戦記物としても大傑作の呼び声高い伝説のロボットアニメですが、それがいま、アニメ放送開始から40年以上を経てマンガになるという衝撃。とはいえ、アニメを観ていることありきの構成では断じてなく、巨大な人型ロボットが荒野をガッシャンガッシャン走り回って殴り合う、オイルや土埃のにおいまで感じられそうな太田垣先生ならではの重厚な描写や、その足元で生身の人間がゲリラ戦を繰り広げるスリリングさ、もちろん物語の楽しさなどが満載で、「新しく始まったマンガ」として100%楽しめる作品です。

株式会社アニメイト アニメイト秋葉原 / 岡部真矢

「煙と蜜」長蔵ヒロコ

- 小説として発表され漫画にもなって大人気の『わたしの幸せな結婚』が、大正の日本がモデルになった世界観で、虐げられて育った女性が冷徹な青年に嫁いで悲惨な暮らしをおくことになるかと思いきや、純粋な心を見初められて愛され幸せな日々へとたどり着くストーリーで、心をキュンキュンさせている。長蔵ヒロコの『煙と蜜』も同じように大正時代を舞台に男女の恋愛を描いた作品だが、舞台が名古屋の郊外という点も異色なら、女性が女性というより12歳の小学生であることと、男性が青年であるどころか30歳の軍人であることも異色。そんなギャップがなおのこと、2人の関係へと目を向けさせて行く末がどうなるのかと気にさせる。ヒロインは尋常小学校に通っている12歳の花塚姫子で、病気の療養のために名古屋に移った母親に着いてきて、母方の祖父や女中たちと暮らしている。そんな姫子の相手が祖父の決めた土屋文治という30歳の軍人。背が高いくつい顔していつも目の下にクマを浮かべている。夜道で出会ったら男でも腰を抜かしそうな強面だが、姫子は怖がらずむしろ家に来てくれる日を心待ちにしている。顔に似合わず文治は優しくして礼儀正しく、少佐という階級にありながら偉ぶらないで姫子や女中たちと接する。そんな文治に姫子は惹かれていて、だからこそ子供に過ぎない自分で良いのかといった悩みをかかえている。名古屋の街にデートに行こうと誘われた時、何を着ても大人っぽくならないと涙ぐむ。文治にふさわしい自分でありたいと必死に努力している姫子ととにかく愛らしい。大正という、恋愛について今ほ

ど自由ではなかった時代だからこそ浮かぶ周囲の障害を乗り越え、本人同士が抱えているわだかまりを打ち破って近づいていく展開が、『煙と蜜』にはある。実は名古屋帝国陸軍第三師団歩兵第六連隊大隊の700人を率いる指揮官でもある文治の職務での切れ者ぶりと、姫子を相手に見せる優しさのギャップに男子たるものこうあらねばと思いたくなる。 幸せになって欲しいが、世はまだ戦争が存在している大正年間。第六連隊にはシベリア出兵が控えている。『はいからさんが通る』で花村紅緒と伊集院忍少尉を引き裂いた戦争は姫子と文治の関係にも影をもたらすのか。キュンキュンしつつドキドキしながら追っていきたい。

書評家／ライター／タニグチリウイチ

- 大正時代、十八歳差の許嫁・姫子と文治。日々の暮らしや出来事が丁寧に描かれるなかで少しずつ想いを育んでいくのにキュンとします。姫子ちゃんが健気でかわいくてホントに癒されるんです。

主婦／紺野泉

「ケンシロウによろしく」ジャスミン・ギユ

- 笑いの秘孔を突かれました、マッサージ師漫画だけにツボです

Hair Make Lounge tetote 代表／力丸真

「子犬のこいぬ」うかうか

- 貼りまわれ！こいぬ！と同じ作者さんなのですが、こっいも推したい。よりシュールで独特の世界観。でも何故かほっこりして癒されるのは何故だろう。きっと子犬の人柄。ピュアで一生懸命。こんな人柄今時漫画の中にしかないぞ。

鳥取県高校教師／佐川由加理

「こころのナース夜野さん」水谷緑

- 圧倒的な取材力を誇り、医療モノを中心としたコミックエッセイを作り続けた水谷緑さんが、精神科ナースを主人公につくったゆるストーリーマンガ。精神医療をテーマにしたその丹念な取材は、この興味深い、そして我々と本当は地続きな対象を徹底的にフラットに見つめて、「こうあるべき」という浅い理想に囚われることがない。「社会復帰した人が嬉しいのがwindowsのようこそ画面」「なぜ人は混乱するとう○こで何かをするのでしょうか」などという、想像力で作れないエピソードを拾い上げる。 もちろんそのエピソードは作品にリアルに描かれているのだが、それだけだと今までの質の高いコミックエッセイと同じ。そこが、今回はストーリーマンガ。作者としての解釈が付け加えられて展開されるのだが、その展開が、他にはない真実を描き出している。せめて、2巻の第9話を呼んで欲しい。この単話のラストは、ジャーナリズムの到達点だと思う。

ニッポン放送アナウンサー／吉田尚記

- 人の心ってどうしてこんなにもままならないんだろうなと思う。主人公のナース・夜野さんの焦りやいらだち、苦しさや戸惑いが胸に迫る。「プロなのに」「プロだから」の間を行き来する葛藤はリアルだし、自分だったらどうするんだろうと考えさせられる。でも、ただただ悩むだけではなく、ちいさな救いもある。悩みつつも一歩を踏み出したい人におすすめ。

ライター・老年学研究者／島影真奈美

「古代戦士ハニワット」武富健治

- 「鈴木先生」的な濃度感を保ったまま古代神話スーパーヒーローものをやるというチャレンジ。何度も読み返すのに足る密度があっていい。

漫画読み／サイトウマサトク

- 昨年の漫画界での大きなニュースのひとつに、本作の打ち切り撤回連載継続は必ず入るだろう。今だからこそであり、時代の変化を強く感じる出来事だった。名作の続きをこれからも読むことが出来ることは素直に嬉しい。

医師／岸本倫太郎

- 一度は打ち切りの危機！？からの奇跡の復活劇は漫画好きなら聞いたことはあるでしょう！この機会にぜひ手に取っててください！！理由がわかるから！テンポは遅めだけど、だから描かれている災害時のドラマがそこにあります。武富先生の描くモブは最高です

鳥取県高校教師 / 佐川由加理

- 「作品」の力で自らの運命を切り拓いた、人間ドラマ味溢れる「古代伝記ヒーロー」漫画。巻を追うごとに切れ味の冴えわたるドグーンたちとのバトル。今後も続きが読めるのを大変うれしく思います。

株式会社プロプラス 商品部 / 池本美和

「児玉まりあ文学集成」三島芳治

- 3巻を数えて、史上最強の「文学少女」マンガという真価がいよいよ際だってきたと思います。ここで言う「文学少女」とは、それっぽい表層的イメージではありません。「世界を作っているのは言葉」であること、それゆえ「言葉を疑うことから文学は始まる」ことを、非常にわかりやすく説明してくれます。レゴブロックを文字に見立てて、まりあと笛田がレゴの組み合わせで「会話」する回など最たるもの。オチもすばらしい。文学少女まりあは長く長い髪の少女として描かれていますが、それは笛田の目にだけ映る彼女であって、現実のまりあの外見は違うらしい。妄想の中に生きているのは、まりあでなく笛田の方。まりあは、そんな彼の中に「文学」を見ているというセカイ逆転の妙。歪んだ純愛ラブコメとしても絶品です。「マンガは文学じゃないの？」という問いに、笛田が「諸説ある」と答えるところもニヤニヤしてしまいます。

読売新聞文化部編集委員 / 石田汗太

「寿エンパイア」せきやてつじ

- トーナメント制の大江戸寿司番付にあらわれるライバルがすべからく魅力的でまったく読み飽きない。そして主人公の前に立ち塞がる寿司シンギュラリティ。最先端技術を駆使した寿司のデジタル化を丁寧に取り入れたうえで白熱のバトルにしたてる手法はさすがの一言。帯電する寿司を是非一度食してみたい。

弁護士・三村小松山縣法律事務所 / 三村量一

- 寿司に対する情熱がほとばしっている。そしてその情熱が人間に対する情熱と同じくらいの温度感なので寿司対決のシーンもそれ以外の日常や仕事、修行などのシーンも同じ熱量で読めます。とっても楽しい。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

「この世界は不完全すぎる」左藤真通

- まず興味を引くのは、この作品の舞台となるゲームが「開発中」であり、主人公はそのゲームにバグ（不具合）が無いかをチェックしていく「デバッガー（QA）」であること。物語の冒頭で主人公が置かれた過酷な状況が語られるものの、どこへ向かい、何がゴールなのかがまだはっきりと定まりきらない。が、そんな環境の中で、愚直に己の仕事を全うするクソ真面目な主人公が、ゲームのシステムやバグを活用して道を拓いていく様は新鮮で痛快だ。次にどんな展開が待っていて、それをどのように進んでいくのか、そして物語はどこへ向かうのか。わからない、おもしろい、見逃せない、新感覚のファンタジー作品。ゲーム好きは必見。

会社員 / 伊東敬祐

「転がる姉弟」森つぶみ

- 両親の再婚で弟が出来た姉。姉が出来た弟の物語。お互いに期待していなかった姉弟が新しい家族としての時間を刻んでいくのがとても良い話です。基本ギャグなのも良いです。

ブックファースト新宿店 / 渋谷孝

- ステップファミリーを描いたマンガは多いですが、「家族」だけでなく、子どもたちの青春そのものが描かれています。学園ものを描き続けてきた森先生ならではの、キラキラしたスクールライフに癒されます。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- 生活の深刻な側面を描いたマンガも大好きだけれど、この作品のように楽しい面にスポットを当てたマンガも大好きです。深刻なことなどない、とは言っていないのもいい（殊更に描いていないだけだというのがわかる）。一見傍若無人な小2の光志郎が、自分にできるやりかたで悲しい気持ちでいる友達に寄り添おうとする、そのやさしさに救われる思いになる。

ライター / 門倉紫麻

「今夜すきやきだよ」谷口菜津子

- これを読んでわかる？ってなる働く大人女子は多いと思う…！家帰ったら美味しいご飯とお風呂があるってすばらしいよねえ！譲れないもの、みんなが譲っていて平気なもの、悩めます。

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- 世間のきめた型にはまらない新しい生き方を描いたマンガが昨今たくさんありますが、なかでもこの作品はわたしの理想に一番近く、共感するところが多くありました。できれば20代の時に出会いたかった作品です。自分の「怒り」や「疑問」に敏感であることの大切さを描いてくれた作品です。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

「最後にひとつだけお願いしてもよろしいでしょうか」ほおのきソラ、鳳ナナ

- 令嬢スカーレットが悪い輩を華麗に鉄拳制裁でぶっ飛ばす！ドレスで拳を振るう姿は舞うように美しく、その強さにスカッとします。読んだらスッキリすること間違いなしです！

主婦 / 紺野泉

「サイコの世界」井龍一、大羽隆廣

- 改めて1巻1話を読み返すと、初めはそこまで気にならなかった言葉や違和感を感じてたシーンの意味に理解が追いつき、謎解きの答え合わせのような気持ちになるのが、味わい深いです。

教師 / 持丸宏司

- 個人的には1巻しか出ていない状態で連続作品の内容を判断するのは好きじゃないんですが、なんというかこういったジャンルの作品を普段あまり楽しめない自分が最初のページから最後のページまで楽しんでいたということはそういうことなのかな？と感じています。クスッとしちゃう感あり。

イロイロ屋 / 杉本善徳

- え？死んだ？え？すごい？え？笑う。えっえっ？何このマンガ？？？殺された幼馴染の仇を取るために、無能の主人公が超能力者の女の子を利用して顔芸をしながら復讐をする話い〜〜〜！！！！何が起きるか本当にわからないので、怖いもの見たさな気持ちでページをめくりますが、毎回裏切られます。面白い！！

デザイナー／シンガーソングライター / 平松新

「坂月さかな作品集 プラネタリウム・ゴースト・トラベル」坂月さかな

- 昔、自分だけの秘密基地や、理想の家を想像して遊んだことはありませんか？そのような想像が美しい形でマンガになったのがこの作品だと思います。屋根裏部屋や、星空が見える天窓、空を渡る渡り廊下。そんなワクワクする構造物と、美しくも少し寂しい物語は青い透明な世界につくった自分だけのための箱庭で空想に浸るような心地よい静謐を味わわせてくれます。私はこの漫画を読むと穏やかで優しい気持ちになれます。まるで瞑想しているかのう。一人静かな夜を過ごしたい時におすすめのマンガです。

システムエンジニア / 廣瀬公将

「魚社会」panpanya

- 読むと別世界につれていかれる。異次元にある田舎のおばあちゃんちに遊びに来た孫みたいなチルアウト＆トリップ感が最高で毎回買ってます。

小説家 / 海猫沢めろん

- 毎年1作リリースしてくれることに手を合わせて感謝したくなる漫画家 panpanya。僕が思う panpanya さんの魅力とは、「そんな視点があったのか」と思わせてくれること。どの作品にもそれは通底しているのですが、それは本当に驚嘆すべきことです。「panpanya は、見えている世界が違う」そう思ってしまうほどに、独自のユニークな視点で森羅万象を見て、感じて、考えて、表現に落とし込んでいることが伝わってきます。そんな視点を分けてもらえるということに、ただただ感謝してしまう僕です。いつも読み終わった後にはため息交じりに「おもしろえなあ？」とひとりごちてしまう。これまでに僕が最も友人に勧めてきた漫画家 panpanya の新作「魚社会」は、いつものようにいつもとは違って、そのワールドにのめり込ませてくれる最高の作品でした。

音楽家・閃き堂店主 / 谷澤智文

「笹錦さんと30歳の悩める仲間たち～恋愛カタログ番外編～」永田正美

- 恋愛カタログの番外編。恋カタで凄く良い味を出していた笹錦さんがメインの一冊です。懐かしくて嬉しくて購入しましたが、やはり笹錦さんは笹錦さんだった（笑）本当に良いキャラです！！大人になった笹錦さん達のストーリーに面白くてホロリとする。恋愛カタログ読者だった方に是非オススメです。

主婦 / 岸本しのぶ

「サターンリターン」鳥飼茜

- 虚実ないまぜの私小説が売れた後、書けないスランプに陥った30歳の女性小説家が、挽回をかけて因縁の元カレの自死の謎の究明に乗り出す。しかしこの主人公・加治理津子がそもそもとんでもなくぶっ壊れた人物で……、などとあらすじを書いても何が何だか、本作の凄さを知るためには既刊6冊を一気読みするしかない。1年前も推したのですが、2021年に5巻、6巻とさらに2冊を重ね、マンガとしての面白さにドライブがかかりまくった状況。犯罪すれすれ、人格崩壊寸前の理津子の行動は読んでいて爽快感を覚えるほど。まじめな人は嫌悪感を覚えるかもしれないですが……。ストーリーがどこに着地するのかは現時点で想像も付かないものの、筋立てが分かりやすいかどうかより、理津子をはじめたくさん登場する女性たちの圧倒的な存在感に飲み込まれる。ここで多くは語らないけれど、いまの日本社会のまったくしょうもない状況を、登場人物を通じて怒りをもって断罪しつつ、ページをめくらずにはおれないエンタメにも昇華させる作風は、世の中をリアルに映して発展してきたマンガという表現の到達点のひとつのように思えます。げに恐ろしや。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

「さよならごはん」岡井ハルコ

- 実際のお店が出てくるわけではなく、「食」にまつわるオムニバス。出てくる人、みんないい人ばかりで応援したくなってしまう。1つ1つの物語がとっても丁寧に読んで五臓六腑に染みわたる感じ。そして『江の島ワイキキ食堂』ファンには、たまらない部分も！連載が2か月に1回とのことなので、2巻が待ち遠し過ぎる！作品です。

アニメイト / 鈴木寛子

「三拍子の娘」町田メロメ

- 愛のど真ん中は夕食！働いてない奴にはわかるまい…退勤後はじけ飛びそなこの気持ち…名言や好きなシーンがたくさんしずかに軽く、さりげなく、なんてことない世界。それでいてどんっと心に残る。大好きだ、素晴らしい作品だ！映画化に一票！

フリーアナウンサー・本屋 SENSE OF WONDER / 松尾翠

- 三姉妹が繰り広げる日常漫画くだらないことが日々の中で重要な役割を果たしているのだと気づかせてくれる作品

あゆみ BOOKS 杉並店店主 / 土屋修一

- こんなマンガをハルチン以来ずっと待ってました。

オフィスオーガスタマネージャー / 樋口健

「しあわせは食べて寝て待て」水風トリ

- 働き盛りの中で病気となった主人公が薬膳と出会って丁寧な暮らしを…と、この説明では「(笑)」となりそうなものだが、「そこにいたる道のり」がそれこそ絶品の「丁寧さ」。読んでいて「漫画うめ〜!!」と声が出る。主人公の「がんばれぬ」となるまでの流れにしみじみしつつ、1巻でグッと来たのは回想に出る後輩吉澤。主人公のメールをスパム登録、トイレで陰口などかましつつ、主人公退職時にはおそらく本気の涙を流す。こういう人間は実在する……!! 基本ほっこりしながらも「感情の流れのリアルさ」は徹底しているからこそ出せる業。

コメディアン / インコさん

- ひょんなことでちょっとずつ動いていく主人公によしよしと気持ちがいります。薬膳の話もすっとはいってきて無理がなく受け入れられるやさしいお話。

ブックエース上荒川店・コミック担当 / 倉本かおり

- 主人公の麦巻さんが抱える孤独と不安、アラフォー以上の女性には刺さるものがあるのではないのでしょうか。そんな孤独とゆっくり向き合う彼女の姿に、「辛いのは私だけじゃないんだ」と勇気づけられました。薬膳もテーマの一つになっていますが、ガチガチというよりはゆる〜い薬膳なのも良いですね。

会社員 / 畑中瀬路奈

- 40歳を超えた自分としては気をつけなくては行けないことなど、食に対してとても勉強になります。

オフィスオーガスタマネージャー / 樋口健

- アラフォー、持病あり、正社員をやめて週四勤務のバイトに転職という設定が、なんだかとても他人事ではない感じがして読み始めました。ものすごく不幸で大変、ではないけれど、これからどう生きていこう……というぼんやりした不安みたいなものに、とても共感します。行きつくところは、無理せず普通に暮らしていくことで、その「普通の暮らし」はちょっとした工夫で楽しくできるのだな、と気づかせてくれるマンガです。

主婦 / 堀江千秋

「JKさんちのサルトルさん」さのさくら、大間九郎

- 哲学者、小説家、劇作家であったサルトルが犬に? という展開で、偶然出会ったJK主人公やその家族・友人達にコトバによって諭して前に進む力を与えていくという話なのですが。。その台詞がめっちゃ良い。。正直自分の頭では一回では理解できない台詞もあるのできっとこれから何度も何度も読み返してその都度生き直していくんだらうなと思います。

会社員 / ターシ

「JKハルは異世界で娼婦になった」平鳥コウ、山田J太

- 原作小説を単に面白いと勤める事に抵抗があったのですが、面白くて残酷で、ファンタジーだからこそリアルに描けた醜悪さの向こうに僅かながらの希望もあって、漫画だと想像力の無い人でも目で見て判るように出来ている。未読の人には、この機会に是非最新刊まで読んで、次の巻で打ちのめされて欲しい。

元書店員 / 井出麻悠美

「ジェリコー」中原たか穂

- いったいどうなってるんだこの国は! 21世紀の日本で、19世紀フランスの天才画家ジェリコーの物語が読めるなんて! と同じようなセリフを去年も、今年も、ここでも、よそでも書きつけているような気がします、しかしこれも推すしかない。今年、推さずに、いつ推すのか。だって一巻完結だから。ドラクロワの《民衆を率いる自由の女神》は日本でも中学校とかの教科書に載ったりして有名ですが、そのドラクロワの偉大なる先輩。テオドール・ジェリコー。フランス革命、そしてナポレオン帝政からは決定的に遅れてやってきてしまった、絵画の革命児。32歳でその命をあだに散らした早逝の天才、未完の利器。今際の際の悲痛な最期の言葉まで、この偉大なる才能の生涯を一巻に描き切った傑作です。巻頭のカラーページがすばらしくて、中原たか穂先生の次なる作品を心待ちにしています。

教員 / 戸田穂

「塩田先生と雨井ちゃん」なかとかくみこ

- かわいくておもしろい…キュンとギャグの緩急…レトロな絵柄でほっこり。

金海堂イオン準人国分店コミック担当 / 園田美智子

「島さん」川野ようぶんどう

- コンビニを舞台としたほのぼのとした作品ながら、「あること」でピリリとした緊張感が走る。人生いろいろ……。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

- とても共感し、ほんとにこんなおじいさん店員がいたらなあ、と羨んでしまう物語です。接客する身としては、自分が島さんのようになりたいと思うのですが、悔しいかな、島さんのような人を求めてしまうでしょう。そのくらい魅力的なおじいさん店員です。

Books アイ蒲生エキナカ店 / 野口忠義

「シャングリラ・フロンティア ～クソゲーハンター、神ゲーに挑まんとす～」硬梨菜、不二涼介

- ゲーム好きの方にとって、VRのMMOゲームはとても憧れるのではないのでしょうか。このマンガの特徴として、自分がゲームをしているような気分になり、読むことがそのままゲームを進めてみたい感覚に陥る点が挙げられます。攻略の仕方やスキル、武器のレベルアップのシステムや…ゆえにゲーム用語が散見していて、意味を知らないやや読みづらいかもしれませんが冒険のワクワク感を生き死にではなくゲーム感覚で描かれている点で、ストイックになり過ぎない旅の面白さを味わえるマンガです。

会社員 / 佐藤優

- クソゲーハンターならではの視点や、鍛え抜かれたプレイングスキルを武器に、オンラインを通じて知り合った仲間と共に難攻不落の敵を、一筋縄ではいかないゲームを、攻略していく展開が神がかったいます。

教師 / 持丸宏司

- 細かい設定や展開が非常に面白い。先がなかなか読めないのも、この漫画のいいところ。

広告会社 プランナー / 平沼良章

「JUMBO MAX ～ハイパー ED 薬密造人～」高橋ツトム

- 一切悪意がなく人助けをしたいだけの主人公がズブズブ泥沼にハマっていく様子と、それに相反するように主人公のテンションが活性化していく危なさがスリリングで面白い。

PENICILLIN / HAKUEI

- 驚くことに全て手書きで書かれている先生の絵のタッチはこの物語の面白さの深みを出しています。ED 薬とはこれほどまでに男を狂わせるのか。たてぽんと周りの人間がたった一つのジャンボマックスに狂わされていくスリリングな展開に息を呑みながら読んでいます。全ての男性の永遠のテーマに寄り添った、まさしく先生が言う大人のドラえもん。のような漫画です。

ヘアメイク / 北原由梨

- ED 薬をめぐるサスペンスが面白い！性欲が絡んでいるからか、人間模様がリアルに感じます

Hair Make Lounge tetote 代表 / カ丸真

「十億のアレ。～吉原いちの花魁～」宇月あい

- 美人の少女が騙されて売られて……から成り上がれるかのストーリー。よくある設定かと思いきやヒロインが破天荒(?)っぷりに読者も振り回されます。絵柄も美しく読みやすいです。

図案家 / 橋本寛子

「終末ツーリング」さいと一栄

- シェルター育ちで外の世界を知らないヨーコと人に近い姿のメカ、アイリの2名が終末世界を巡る異色のツーリング旅。神奈川、東京の名所やランドマークが廃墟と化している様子は不思議な感覚になります。寂しいながらもどこか美しい風景を走る様子は読んでいてワクワクしました。今後、他の地域へ進む期待も込めて楽しみがある作品です。

会社員 / 伊藤千恵

「16bit センセーション」若木民喜、みつみ美里、甘露樹

- エロゲー老人会が歴史を語り始めるとだいたい辛気臭いですが、これは美少女いっぱい楽しいです。エロゲー最高！

小説家 / 海猫沢めろん

「殉国のアルファ〜オメガ・ベルサイユ〜」嶋木あこ

- オメガバースという特殊な設定による全く新しいフランス革命の物語です。今までにないルイ16世やマリーアントワネットに出会えます！これからベルサイユ宮殿で何が起こるのかワクワクしかない？！

主婦 / 紺野泉

「少年のアビス」峰浪りょう

- 心の鬱屈を押し殺しながら日々を送る地方都市の少年の前に、非現実的存在のような女性が現れて事態が動き出す…のだが、その変化は同じように懊悩を抱える周囲の人々を巻き込み、心の箍を玉突き衝突のように外していく。物語が一気に加速を始め、主要登場人物の内心の執着が次々と明かされていくところが連載の現在のため、今後の展開がとても興味深い。

会社員 / やのこうじ

「ショートショートショートさん」タカノンノ

- 最新3巻はコミケにサークル出展なショートさんのお話。ご経験なくても普通に楽しめますが、ご経験ありだと余計に楽しめるかもしれません。帯にもありましたが、承認欲求肯定されたい人にもおすすめ。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

「新九郎、奔る！」ゆうきまさみ

- そうとう複雑で込み入った時代物なんだけど、軽妙に、世の中を知らない青年と、その周りのわるいおとなたち、という、いつのもゆうきまさみマンガの要領で楽しめるのがよい。

ソフトウェアエンジニア / 第貳齋藤

「スイカ」森とんかつ

- 独特のゆるい空気と線が持ち味のマンガ。最初は絵や文字での説明がちょっと不足してるマンガなのかな？と思いつつ読んでたら全然説明不足してない！むしろ十分。魅せ方がうまいからでしょうか。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

「スインギンドラゴンタイガース」灰田高鴻

- 特別なテーマでも、新鮮なストーリーでもなく、しかし時代風景がとても色濃くて印象的な漫画でした。この漫画の凄さは、第二次世界大戦後の混乱と、社会復興に向けた日本の姿をいとも簡単に想像させるところです。音楽ものの漫画ではありつつ、というよりかは、音楽によって人が集まり、時代があり、それらが絡み合うことで展開されていく人間ドラマが描かれたマンガです。

会社員 / 佐藤優

- ジャズものだけに、どうしても石塚真一の大傑作「BLUE GIANT」シリーズと比較してしましますが、驚くべきは、この作品が決して負けていないこと。「BLUE GIANT」にないモノが本作にはあります。それは、とらちゃんの歌い踊る色っぽさ、問答無用のスウィングの楽しさ。ダイ、君のサクソに欠けているのはコレかもしれない。いや、君には君の良さがあるんだけどね……。などと、キモく、ブツブツつぶやきながら読みました。全6巻で終わったのも潔い。キャラクターはアニメ風（細田守風？）なのに、バックや楽器は黒々と「つげ忠男風」というのも新しい。令和で、本来の意味の「劇画」の逆襲が始まっているのかもしれないと、ちょっと思いました。

読売新聞文化部編集委員 / 石田汗太

- 敗戦後の混乱がまだ残る世相を背景に、ジャズにとりつかれたミュージシャンたちの喜怒哀楽むき出しの眩しい若さと、音楽の楽しさを描く。貧しくても前向きな感性とプライドがある。江利チエミに雪村いづみと美空ひばりを混ぜて割らず（キャラクター的には笠置シズ子もか）、さらにいろいろ足したような、おきやんでかわいい天才少女歌手・諏訪於菟（すわ・おと、愛称トラ）がなんともいえず魅力的で、この時代の日本を舞台にしてしか描けないヒロイン像かと思われます。昭和のある時期までたいへんやばかった「芸能界」の虚々実々も楽しく読ませる。読めば「あの時代」の明るい雰囲気にとっぷり浸れるのに、単行本に重版がかからないらしいのはとても残念。いろいろすっかり元気をなくしてしょぼくってしまった日本にも、数十年前にはこんな「元気」が横溢していたんだ、となんだか背中を押される気にもさせられた全6巻です。

日本経済新聞記者 / 天野賢一

「数学ゴールデン」藏丸竜彦

- 将棋が頭脳のスポーツなら数学も同じように頭脳のスポーツだ。それが証拠にオリンピックがあって大勢の若者たちが金メダルの獲得を目指して“競技”に励んでいる。中学生の小小野田春一もその一人で、エリート校に進学しようと頑張っていたものの数学以外で引っかかったのか受験に失敗。公立校でひとり数学を頑張ろうとしていた彼に、数学好きらしい七瀬マミという同級生が声をかけてくる。ボーイ・ミーツ・ガール。かというとは最初は興味がないと袖にしていた春一。けれども春一が与えたヒントを膨らませ、どんどんと数学的なセンスを伸ばしていく七瀬と春一は親しくなって、同じ数学オリンピックを目指すようになる。そこから始まる恋がある。かというとは数学オリンピック対策講座でマミはトップの成績を叩き出すようになり、追い抜かれた春一を絶望させる。ガリ勉と天才によくある構図から、春一は立ち直ってマミに追いつき追い越そうとして頑張る、共に高みへと至れるのがかか蔵丸竜彦『数学ゴールデン』という漫画の読みどころだ。第3巻まで刊行中のシリーズで次々に繰り出される数学の問題は、数学嫌いには読んでも意味が分からない難問ばかり。それなのに面白いのは、突きつけられた壁に対して七瀬がどう攻略するかを考える姿、春一が諦めないで挑み続ける姿に、スポ根漫画を読んでいるような楽しさを感じてしまうからだろう。読めば自分も数学に挑戦してみたいくなる。あるいは何かに熱中してみたいくなる。それがスポーツだったら一種の逆転現象。スポーツが苦手で勉強に打ち込むことも、勉強が苦手でスポーツで大成功することも、どちらも素晴らしいことだと証明してくれている訳だから。

書評家／ライター／タニグチリウイチ

- 数学に興味がない人こそ「読んで」と言いたいほど。数学の持つ魅力的な世界、イメージをマンガで伝えるってとても難しいと思うのです。作中のワードについて、調べずとも読めますし、調べるとなお一層楽しめます。一粒で二度おいしい。

サブカル専門ライター / 河村鳴紘

「スーサイドガール」中山敦支

- 人間を自殺させてしまう怪物「フォビア」と戦い人を救う魔法少女「スーサイドガール」たちの物語。禁忌的なテーマをド正面から真摯に向き合って、楽しいマンガに昇華させている作品です。ケレン味たっぷりのアクションや血みどろの限界バトルの中に、ポジティブで優しいメッセージを感じます。何かと暗いニュースが多くて、暗い方向に心が行ってしまいそうな時にオススメしたいマンガです。

株式会社アニメイト アニメイト秋葉原 / 岡部真矢

- こんなにも自殺をポップ & キュートに描いて、読者に明日も生きようと思わせる漫画があったのでしょうか？いや、ない！中山先生の漫画力の凄さがぎゅぎゅっと詰まりつつ、この作品には今の疲れた現代人へのエールが注ぎ込まれているような気がするんです。仕事家事学業、色んなことに疲れてしまった人々みんなこれを読むべき。きっと明日へ、前へ、向けます。

女優 / 齋藤明里

「数字であそぼ。」 絹田村子

- 出てくるキャラクターたちが、とにかく変わり者ばかり。暗記が得意でその能力で京大がモデルの吉田大学に入学してしまった主人公の横辺建己も結構な変わり者だが、入学早々に数学の講義で訳が分からず引きこもりになって、2年間を無駄に過ごした横辺とは違ってパチスロにハマって留年を続けた北方も十分ヘン。そしてさらにヘンなのが夏目まふゆで、横辺の引きこもりを決定づけたくらい天才的な数学センスの持ち主ながら、住んでいる部屋はゴミで埋まり、合コンではイケメン男子に微積分の議論をふっかける。その友人の平坂世見子も見かば美少女ながら、与えられた難問を解こうと巫女姿で御朱印帳に数式を書いてしまうくらい、数学に入れ込んでいる。そんな学生たちを束ねる早乙女先生に至っては、風呂上がりでアイデアが閃くとパンツ 1 枚のまま家を飛び出し考え続けるというから凄まじい。漫画に出てくる大学教授では、佐々木倫子の『動物のお医者さん』に登場する漆原教授と双璧を成す変人かもしれない。そうなのだ、絹田村子の『数字であそぼ。』は獣医学部を理学部の数学専攻に置き換えた現代版『動物のお医者さん』なのだ。読めば抱腹絶倒の学生生活を楽しめる。同時に数学の奥深い世界にも触れられる。金が尽きて食べるものにも困り、福引きで商品券を当てようとするエピソードでは、確率的にはいつ引いても同じだが、タイミングによっては条件がついて確率が変わることを教えられる。おやつに出されたホールケーキを 7 人で分けることになるエピソードでは、コンパスを使うことで面積だけは同じ 7 つのピースに分けられることを学ぶことができる。いやいや普通はコンパスなんて持ち歩かないだろうと突っ込みたくなるけれど、そこは数学好きの学生たち。笑って許しつつ自分もコンパスをふところにケーキを 7 分割する時を待とう。危険物だと思われ職務質問されるかもしれないけれど。

書評家／ライター／タニグチリウイチ

「スキップとローファー」 高松美咲

- 思春期の少年少女の心理を丁寧に描いていて、それがそれぞれに、たとえば美人とは言い難い少女はそのままでチャーミングなのがとても良い。

漫画読み / サイトウマサトク

- 祝アニメ化決定！ということもありますが、アニメ化を通してでも、読者がさらに増えるといいなと思いつつもオススメ。右も左も分からない主人公が、友達を作り、まっすぐに青春していてとても微笑ましい。周りの友達もとてもいい子。リアル感もあって高校生活が懐かしくなる。物語は 2 年生編に。主人公がどう周りに影響を与え、そして主人公もどう影響を受けて成長していくのか、じっくり読みたい作品です。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

- 登場人物たちのほんのりした優しい気持ちが心地いい作品です。

自営業 / 小野裕子

- 周囲の思惑なんてなんのその、マイペースで天然のびのびさんだった主人公・みつみちゃんと、全方位的に人気の好青年・志摩くんは恋仲になるやならざるや。ほの甘い空気漂いつつも、単なる友達で終わってしまうのかそれとも……。二人の仲も気になるけど、周囲の男子女子の動向もあったりなかったり、恋愛より同性の友達と遊んでるほうが楽しい瞬間、でも、気になる異性が現れてしまう瞬間もあって……と、青春！ 一冊。

ライター・老年学研究者 / 鳥影真奈美

- 登場人物たちがゆっくり成長していくのを愛でていたけれど、急にみんなが大人びてきたような。悩んで立ち止まったり、周りの人々から影響を受けて一歩進んだり、小さな出来事が誰かの心を大きく動かすことってあるなと思う。優しくて懐かしいあの頃を思い出せる作品。刊行ペースからいくと今年がラスト投票！推します！

元書店員 / 内野智未

- 思春期の暗い部分も明るい部分も丁寧に描かれ、今やクラスメイトの一員になったような気持ち。個人的に毎回ぐっとくるのは、お婆のナオちゃんのエピソード。思春期の辛さを知っている大人の目線があることで、幅広い読者が楽しめる作品になっていると思います。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

「刷ったもんだ！」 染谷みのる

- 印刷業界の蘊蓄が詰まったお仕事コメディ。ユニークな題材、魅力的なキャラクター、訴求力のあるエピソードを揃えた良作と評したい。

書評家 / 福井健太

「スノウボールアース」 辻次夕日郎

- 1巻から、いや、第1話から怒涛のように繰り出される熱い展開に、燃え燃えキュン。どうしたって絶望的な事態に立ち向かうがんばる人々の明るいノリ、でもやっぱり状況は不穏。銀河怪獣から世界を救う、なんてヒロイックなテーマもあるけれど、777のハードルを超えて、ともだちいっぱい作るところを、見たいんだ。

Tokyo Otaku Mode / モリサワタケシ

- 連載当初から衝撃を受けていた作品。地球滅亡を救うべく、救世主となり遥か彼方の宇宙で戦い、多くの犠牲とともに打ち勝って地球に帰ってきたら…地球は滅亡していた！という最初のくだりで、引き込まれました。その後も、飽きさせない、意外な展開、個性あるキャラクターなど、面白さ抜群。まだ2巻ですが、今オススメしたい漫画です。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

- 凍りついた地球が舞台の近未来SF。人見知りだけど友達作りたいてストレートな主人公やかわいいロボット、そして怪獣！私の好きなものがたくさんでてるわくわくする漫画。

ブックエース上荒川店・コミック担当 / 倉本かおり

「SPY × FAMILY」 遠藤達哉

- もう有名だけど、ずっと新刊を楽しみにしている作品。子供と犬に弱いのもあるけど、可愛いし面白いし読んでいて健康に良い笑

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- 絵柄に勢いが出てきて、ますます面白い。

公務員 / 東くるみ

- ドキドキハラハラそしてほっこりする作品です。ヨルさんもロイドも足を洗えてただただ普通に暮らせる日が来るのかな。続きといつかくる最終話が楽しみです。

カメラマン / 平沼久奈

「青年少女よ、春を食れ。」 山田シロ彦

- 入口が青春モノのミステリー。ミステリー部分に重点を置きすぎず人間ドラマメインで進むので話が入ってきやすいです。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

「世界の夜は僕のもの」 渋谷直角

- 個人的にど真ん中世代でしたので上げさせていただきました。かっこのいい時代だったなあと。

オフィスオーガスタマネージャー / 樋口健

「世田谷イチ古い洋館の家主になる」山下和美

- タイトルを見て驚きました。「山下先生、数寄屋を建てていたはずなのに何故～～！？？」。以前、数寄屋造りの自宅兼仕事場を建てた山下先生。実は世田谷区にある水色の洋館に一目惚れしたことが数寄屋造りの土地の決め手だった、とのこと。かつての東京市長・尾崎行雄邸であったこの洋館の取り壊しを阻止しようと保存活動に立ち上がるドキュメンタリー実録漫画。1巻だけでも億単位のお金が絡み合う激しい闘いでリスクと覚悟を想像するだけでも胃がキリキリしました。1巻では不動産屋との闘いの真っ最中ですが家主となった今も補修資金など現在進行形で活動は続いているそうです。この国で歴史的建造物の保存がいかに難しいかという問題も考えさせられました。でも漫画やSNS、クラウドファンディングなど最善を尽くす方法を今後も信じていきたい。微力ですがクラウドファンディングにも参加しました。

出版社営業 / 佐々木つむぎ

「先生、今月どうですか」高江洲弥

- 1月に2巻が発売とまだ新しい作品。アパートの大家さんたる主人公の女子高校生。毎月家賃請求に行く相手が売れない小説家。実はその相手に恋を抱いており、主人公のちょっとした能力で運命の相手で…。というラブロマ漫画。月1回の恋を可愛く描かれていて、にやにやしちやいます。年の差ラブ好きにオススメな作品です！

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

「先輩がうざい後輩の話」しろまんた

- おい～～～尊いよおおお！！早く付き合ってくれ～～～！と白目をむいて読むラブコメ。こんなにも登場人物みんなの人となりが良いことってありますか？やさしいせかいに癒やされてまた白目をむきます！付き合って欲しいけど、一生終わってほしくないマンガ世界第1位。

デザイナー／シンガーソングライター / 平松新

「双生遊戯」岡田淳司

- 池上遼一先生のような端正な絵で、とんでもない変態キャラが続々登場して目が離せません。こういうヤクザマンガが読みたかった??！と叫びたいほど楽しい。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

「その淑女は偶像となる」松本陽介

- かつて伝説のアイドルからドロップアウトした女の子が、いろいろと規格外なポジティブアイドルと二人で、再度トップアイドルを目指すお話。夢に向かってキラキラと頑張る作品かと思いきやその実、アイドル界に君臨する「四天王」的アイドルを倒すべく血反吐を吐きながら特訓、必殺技を身に着け、ライバルと絆を育み、大逆転の勝利をつかむという超絶ド直球の泥臭い熱血スポ根マンガです。「アイドルもの」とカテゴライズされるマンガやアニメが群雄割拠する昨今、一際ガラガラと熱く燃える、王道にして異色の作品です。

株式会社アニメイト アニメイト秋葉原 / 岡部真矢

「そのモガリは熱を知らない」NICOMICHIHIRO

- 久々に読んだ法医学もの！死体から読み取る「本当の死因」シリーズ。テーマ自体がすでに面白くて法医学ものは好きなのだが、本作の魅力はやはり一風変わった主人公の「狩結ラン」だろう。彼女の壮絶すぎる過去が、日々彼らが見つける死体とのエピソードにうまくからんで、話に引き込まれていく。死体はとてもリアルな描写なのだが綺麗な線なのでグロすぎてつらい、ということもなく作品に集中できるのもよい。

会社員 / 西尾美里

「その着せ替え人形は恋をする」福田晋一

- 表紙だけ見ると、ちょいエロドキドキハーレムものかな？と思ってしまいますが、本当にそんな勘違いしちゃうの勿体ない程の素敵な作品。「好き」という気持ちにどこまでも素直な人の想いに、きっと誰しも心を掴まれてしまうこと間違いなしです。また、セクシーなコスプレに対してドキドキすらないレベルの純朴青年に、女子的にはめっちゃくちゃときめいてます。早く色々気づいて欲しい……！

女優 / 齋藤明里

「対ありでした。～お嬢さまは格闘ゲームなんてしない～」江島絵理

- 2020 年は尖った対戦ゲームマンガがたくさん生まれたと記憶していて、その中でも意表を突く展開とエンタメの王道を爆走するテンションを保ち続けているのが本作。お嬢様マンガなのになぜそのパロディを？？（A: バトルマンガだから）というのはっちゃんけぶりも最高で、毎月続きが楽しみです。

会社員 / 末永龍介

「大ダーク」林田球

- メインキャラの一人の名前が「死ま田＝デス」。これがギャグとしてではなく、ふつうのこととしてサラッと出てくる時点でどうかしているし、最高です。

角川文庫編集部部長 / 関口靖彦

「太陽と月の鋼」松浦だるま

- 時代設定と登場人物の異能感がとても好きです。主人公の異能が自分の大切な人を守るために開花していくその姿が遅しく、そして優しい。最後、どうなってしまうか楽しみです。

デザイナー / 平沼寛史

「高丘親王航海記」近藤ようこ、澁澤龍彦

- なんとふわりとした話にふわりとした絵が見事にマッチ。ちゃぶん、ちゃぶん、おだやかな海に身をまかせ、ただのような心地よさ。幻想味を帯びた文学をマンガ化してきた作者の集大成と言えるのでは。

朝日新聞記者 / 小原篤

「ダブル」野田彩子

- まだ4巻だったか！と思ってしまうほど、ぜいたくで濃厚な物語が続いていて、どんどんどんどんおもしろくなっている。絶対にもっと多くの人に読んでほしい。新刊が出る！と思った時のときめきが毎度すごいです。

ライター / 門倉紫麻

「男爵にふさわしい銀河旅行」速水螺旋人

- 作者の脳内の想像や妄想やアイデアやフェチズムが、1コマの中の隅々まで高密度にミチミチに凝縮描写されているマンガを摂取しないと死ぬっぽい病のかたがたむけに、今年もそのようなマンガを推します。俺だけじゃねえだろそういうの。ファンタジーとSFがゆるく雑多に混交する宇宙で、ミハルコ男爵とその御一行との嫁探し珍道中を描く。基本1話ワンアイデアの読み切り形式で、コマいっぱいミチミチと描き込まれた、見知らぬ惑星の見知らぬ路地の見知らぬ風景を楽しみながら、ミハルコ男爵たちの軽妙などんちゃか騒ぎを楽しむ感じ。作者氏の経歴とこれまでお仕事もあいまって、実在しないTRPGリプレイ漫画を読んでいるような感覚。「あーわちゃわちゃしてんなー」って言いながらニヤニヤ読む感じ。残念ながら3巻でゆるく終わってしまったが、永遠に続いてほしい。

ソフトウェアエンジニア / 第弐齋藤

「ダンピアのおいしい冒険」トマトスープ

- 17世紀のイギリス公認の海賊船に乗り込んだ、博物学者ダンピアの実話が、カワイイキャラクターのマンガで読める！ 地球の半球を股にかけ、野生動物や原生植物を背景に、スペインを初めとした他国との戦いを続ける、なんてこんな胸躍る冒険物語がつまらないわけではないのですが、ほとんどは荒くれ者どもで構成される登場人物の中に加わるダンピアほか数人の知を探索する者たち。彼らは栄達のためではなく海図のために冒険し、美食のためではなく博物学のために食事をする。17世紀の学問の最前線は、こんなにも野性味あふれるものだったかと、知のたくましさをありありと受け取れる作品。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

「ちいかわ なんか小さくてかわいいやつ」ナガノ

- もはや小さくてかわいいだけでない、おそろしい何か。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- 『ちいかわ』は不思議な漫画である。ちいさなかわいい生物が3匹で仲良く暮らす様子を楽しむ漫画、と思いきや、明らかに大人ではないのに自ら労働をして稼ぎを得なくては生きていけず、下手すると死んでしまうような危険な目に逢うことも度々。そこには死が隣り合わせの世界が描かれており、さらに大人や親の庇護が希薄（というかほぼ皆無）で子供だけで生きている。このような漫画は珍しいがたまにあり、どれも読者を強く惹きつける作品なのである。

医師 / 岸本倫太郎

「宙に参る」肋骨四介

- 日常系のような緩やかな始まりから、どんどん不穏な影が見えて来る、それで居て常にローテンションの、じっくり読ませる上質なSF。説明を省く事で不思議と不可解を多く散りばめたまま進むストーリーは、時間を取ってゆっくり読みたいと思わせる静かな魅力に溢れています。未亡人とメカ息子というキャラクター設定も、変な浮つきがなくて凄く良いです。

元書店員 / 井出麻悠美

- SF好きに絶対おすすめ！絵のタッチやセリフの軽さとは裏腹に、設定の緻密さや行間を読まされつつ頭に入ってくる情報の多さのバランスがとても良くて読後の満足感がすごい！こんな未来も見てみたいと思わせてくれる作品です。

会社員 / 小野塚博之

- 人類が宇宙進出を果たし、宇宙旅行が飛行機に乗るぐらい身近になると宇宙ステーションで亡くなった故人の遺骨を地球に納めに行くという話が成り立つワケで、練り込まれたSF設定と納骨という身近な問題の対比が鮮やかで、静かな絵柄とストーリー展開ながら個々のトラブルは壮大という絶妙な塩梅の作品

住職・ライター / 蟬丸P

「超人X」石田スイ

- 普通の一般人がある日突然超人になって・・・それからどうするか？狼狽える？葛藤する？受け入れる？これからどうなっていくのか楽しみです！

教師 / 持丸宏司

- 超人の能力をもってしまった主人公が戦いに巻き込まれていく。日常からの変化が面白いです。戦う理由にも葛藤があったりと、超人になるまでの各々のストーリーもあって面白い。敵側のストーリーが面白さを際立てています。

デザイナー / 平沼寛史

「ツイステッド・シスターズ」山下和美

- もお好き。つらい恋愛、友達との行き違い、仕事の疲れ、勉強からの逃避。あらゆるところから私を守ってってくれてきたマンガって「こういう作品」かわいくて面白くて愛すべき家族たちのマンガ。LINE が来ない？ 待ってる間にこれを読むべし。仕事がつらい？ 眠る前に読んで寝落ちすべし。私たちを癒してくれるこの世界をご覧ください。ドレスを来た4姉妹、おもしろゆかいで可愛いです。亀石雷蔵くんかっこよすぎないですか？

会社員 / 西尾美里

- 山下さんのファミリーコメディが大好きです。性格に一癖も二癖もあり、「うわー、やな奴！」と思うようなキャラクターでも、なぜか嫌いにならないのが山下さんの漫画のすごいところだと思います。年齢も性格もバラバラの四姉妹が、これからどうなっていくのか。突然現れた赤ちゃんは、無事に仲間入りできるのか。まだ明らかになっていないことも多く、いろんな秘密が隠されている気がするので、続きが楽しみです。

主婦 / 堀江千秋

「束の間の一花」タダノなつ

- 宣告された余命を超えて生き、不安定な日々を生きる主人公の恋愛を描く。人生の意味や幸せというシリアスな問題を主たるテーマにしつつも、のんびりとした主人公の性格と明るいタッチの描写により、前向きな気持ちで読み進めることができる。目前に迫る死を意識する中で、“束の間”に凝縮された2人の恋模様が胸を打つ。

弁護士・三村小松山縣法律事務所 / 三村量一

「月の番人」トム・ゴールド、古屋美登里

- 月のコロニーの警察官である主人公の日常が描かれたSF漫画絵から伝わる月の静寂さがとても印象的絵本のような素敵な漫画です。

あゆみ BOOKS 杉並店店長 / 土屋修一

「作りたい女と食べたい女」ゆざきさかおみ

- 料理が大好きな野本さん。食べっぷりが気持ちいい春日さん。作って、食べて、お腹が満たされるのと同じように気持ちが満たされていくようなそんな2人の関係も◎私自身ももやとした気持ちを料理にぶつけてしまうことが多々あるので野本さんのあの気持ちわかります…！

会社員 / 伊藤千恵

- 女性版「きのう何食べた？」とも言えるが、食について、ジェンダーについて、そして恋について、非常に丁寧に描かれていると感じる。なんといっても、読んでいるうちに2人を好きになっている。

角川文庫編集部部長 / 関口靖彦

- ほっこりしながら読んでます。好きな誰かのために何かをするって良いですね。

ブックファースト新宿店 / 渋谷孝

- ふたりの距離感が心地いい。あと食べている姿はいいですね！

COMIC ZIN 商業誌担当 / 塚本浩司

- これは男女じゃ描けない、女性と女性だからこそ意味がある作品。美味しいご飯で繋がった2人の女性。単なるお隣さんから徐々に心の距離が近づいていく描写も愛おしい。同性同士の、恋愛感情抜きだからこそその心地よい距離感がよい！！この先少しずつ明かされていきそうな、春日さんの生きてきた背景に注目！

元書店員 / 内野智未

「つまねこ〜妻とねこの話〜」田中光

- 噛み癖のある猫・正太郎にふりまわされる妻と、その夫の日常を描くエッセイマンガ。噛まれても、おちょくられても、めげない夫婦。何を考えているかわからないから猫はかわいい。そんな理不尽さがおもしろおかしく描かれている。とくにウンチの回は必見。

鳥取県立図書館司書 / 野間勤

「ツンデレ悪役令嬢リーゼロッテと実況の遠藤くんと解説の小林さん」逆木ルミヲ、恵ノ島すず、えいひ

- 悪役ヒロインの物語は多くある中で、群を抜いてヒロインが可愛いです。見た目（絵柄）もとても可愛いですが、やはりタイトルにある通りのツンデレっぷりの可愛さ……！ツンデレと言えど暴力的や、暴言的なツンではなく、お淑やかで上品なツンっぷり！作中でもキャラクターでニヤニヤしていますが、読者も必ずニヤニヤします。新たなタイプのツンデレ、最高です。

図案家 / 橋本寛子

「This コミュニケーション」六内円栄

- 毎巻、面白いんだけど何だか上手く表現できない感じでオススメの音葉がつかえて喉から出ない？みたいな状態だったんだけど、5巻で一気に弾けた感というか点と点が線になったような感じがしており、戦略性やマネジメント性のある作品が好きな人に是非オススメしたくなっています。

イロイロ屋 / 杉本善徳

- いままでこんなダークな主人公は見たことがありませんでした。人類の敵から自分達を守るために人類を進化させることは悪なのか、主人公が良い方向に進むために行うことが次々と裏目に出てどんどん詰んでいく…そんな結末が見えない面白すぎるストーリー。なぜまだ話題になっていないのか本当に不思議です。

ヘアメイク / 北原由梨

「ディノサン」木下いたる、藤原慎一

- 絶滅した恐竜が遺伝子操作で復活した世界で、動物園ならぬ「恐竜園」の飼育係を主人公としたストーリー。恐竜の病気、出産、飼育員とのコミュニケーションなど徹底して身近な「動物」として恐竜を描く、という切り口が新しい。恐竜が復活したといっても、もてはやされているわけではなく、とある事故で恐竜から人々の心が離れてしまっている中、経営難の恐竜園を描くという仕事マンガとしての一面もあり、ストーリーにも魅力がある。最新の科学的知見に基づく、ビジュアル面・内容面での緻密な恐竜描写がたまらない。

弁護士・三村小松山縣法律事務所 / 三村量一

「出禁のモグラ」江口夏実

- 読み手を選ぶ漫画だと思うので、正直、手放しで人に薦めにくい。コメディ要素はあるけど、不気味さが先に立つし。でも絶対何かある。何かが起こる。そんな気がして妙に惹かれます。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店コミック担当 / 山本さとみ

「Deadmeat Paradox」金田サト

- ゾンビと言えば、猫だのサメだのビーバーだの人間以外を暴走させたり、津波に乗って大量に出現させたり、日々新しいアイデアで捻り散らかされている王道ジャンル。真面目に人間を主人公に据えろと、どうしてもドンパチアクションか、親しい誰かとの悲しい別れの話になってしまうところ、今作のゾンビの権利を巡る裁判モノという着眼点は目から鱗でした。映画にしても上質な法廷サスペンスになりそう。

元書店員 / 井出麻悠美

■ 年初に出た一巻完結の作品で、前回の投票直後におすすめされて読んでこれ票入れたかったー！！と叫びましたが、今回投票にあたり改めて読んで、これが埋もれてしまうのはもったいない！との思いで挙げさせていただきます。死語 30 日以内に復活する謎の病により生前とあまり変わらない姿で「生き返る」者をゾンビと呼び、生きているのか死んでいるのかの定義さえつけられないでいる世界。そこで起こるあるゾンビの莫大な遺産相続を巡る弁護士の物語なのですが、まずはストーリー運びがお見事。物足りなさも感じず、かといって詰め込みすぎてるわけでもなく、こんなにきれいに一冊でまとまる？？作品世界の作り込みもアラが無くて、ファンタジーな設定に頼りすぎず、法律制度などリアルな部分はしっかり整えているので物語がブレません。作者の他の作品は調べても出てこないの少なくとも初商業作品かと思いますが、ほんと？ぐいぐい引き込まれ一気に読んでシンプルにおもしろい！と思わず言ってしまう。これまで読んだ一冊完結のマンガでは、個人的に 1・2 を争う名作です。マンガライト層にも、重度のマンガ読みにも自信を持っておすすめできます。読んで損はさせません！！

公務員 / 宇田川結衣子

■ 1 冊で綺麗に完結する本に出会うと感動するのですが、この作品もそのひとつ。人間と " ゾンビ " の差別、定義、それに絡んだ思惑などが重なり合い絡み合い、解かれていくまでをうまくまとめ、いいラストを見せてくれます。1 冊完結だけに今年しか推せないの、読み逃した人に届くといいな。

株式会社来知 WEB デザイナー / 河本智芳

「天国大魔境」石黒正数

■ 巻数が進んできて、パズルのピースが徐々に埋まってきた感じがします。最後まで絶対読みたいと思わせる作品だと思います。

会社員 / 林礼春

「東京トイボクシーズ」うめ（小沢高広・妹尾朝子）

■ e スポーツをモチーフに、切った張ったはありつつも、スポ根的高校青春ストーリーが描かれるのかと思いきや、思いのほか、重めの障壁や人間模様が次々と現れて驚愕。良い意味での裏切りを随所に忍ばせながら、読み手をグリップして離さない。何度も何度も読み返したくなるし、読み返すたびに違うセリフに撃ち抜かれる。ゲームにも、e スポーツにまったく興味がない（なかった）人にこそ、おすすめしたい作品。

ライター・老年学研究者 / 島影真奈美

「東京ヒゴロ」松本大洋

■ 自分と向き合うということ。自分を知らうとすること。自分のほんとうの声に耳を澄ませること。全てに苦しみは伴うものだと思います。でもそうしなければ、何かを産み出すということはできないものだと思います。松本大洋さんの、ずっとずっと深いところまで覗き込んでいくようなエネルギーに、心を驚掴みにされながら読みました。主人公塩澤の不器用、実直、そして朴訥な人となり、読者にとってのレンズとなって、それを通して見えてくる他者の瑞々しい感情の波。とても静かで、それでいて情熱的な、漫画です。

音楽家・閃き堂店主 / 谷澤智文

■ 松本大洋さんのマンガを前にして今更いうことではありませんが、とにかく絵が、画面が、かっこよすぎる…！感情の渦巻き、日常の空気、温度、すべてが脳みそにダイレクトに届くような圧倒的な絵力。マンガに携わる人間たちの物語というだけでマンガ読みにはたまらないのに、この絵の力にはあらためて衝撃を受けます。必読。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

■ 自分自身、年齢を重ねるごとに漫画との距離を測る機会が出てきました。この作品の主人公は「元漫画編集者」。ドアップりと漫画の世界にいたこともあって、よりディープに漫画と人生の「オトシマエ」を模索している姿に親近感を感じずにいられません。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

- 題材は漫画だけど、キャリアを重ね続けるプロなら必ず味わう葛藤がテーマ。主人公は早期退職した編集者。そして数々の漫画家たちが登場し、色々な漫画とのかかわりがドラマを生み出す。前時代の漫画だって構わない、セールスなんて関係ない、本物はそこにあるのかどうか？ある意味究極の趣味に走った主人公の行きつく先はどのようなか？「漫画が斜陽産業だ」と言い切って描く世界だけに染みる。

ブランド October Beast 代表 / 北山友之

「透明男と人間女～そのうち夫婦になるふたり～」岩飛猫

- 透明人間と目の見えない女性のラブコメディ。普通の人には見えない透乃眼さんのことを、元から見えない夜香さんは気配と匂いで見つけてしまう……今までいろんなタイプの「萌え」や「ときめき」のお話を見たり読んだりしてきましたが、こうきたか！と、着眼点の新しさに感服しました。夜香さんの「見えないこと」を、欠点ではなく長所として描かれているのも素敵です。普通にきゅんとする場面もあり、にこにこしながら読んでしまいます。

主婦 / 堀江千秋

「ドキュンサーガ」いとまん

- ギャグ要素強めのアクションファンタジーだと思っていたら衝撃的な展開。。過去から現在に至る経緯について語るストーリーが現在進行しているのですが、差別が生まれる過程、統制の困難さ、それぞれのキャラクターの心理描写が加わって丁寧に描かれており世界観に埋没する快感があります。現在漫画単行本化されているのはネットで公開されているバージョンより加筆・修正されていますが、かなり濃い内容になっており大満足です。

会社員 / ターシ

「闇の大魔術師」泉光

- 表紙でなんとなく敬遠してたのですが、読んでみたらものすごい密度と計算されたストーリー、そして魅力的なキャラクター達がたくさんで虜になりました！巻ごとの引き際が素晴らしく、その期待に5巻まで応え続けてくれます。6巻が待ち遠しい！意外と周りで読んでも人が少なかったのも、もっと知られてほしいです。

株式会社来知 WEB デザイナー / 河本智芳

- 王道ファンタジーですが、設定と画力が物すごい！必見です！

Hair Make Lounge tetote 代表 / カ丸真

「DOG SIGNAL」みやうち沙矢

- 10代の頃から先生のファンです。昔から動物と人との関わりを描いた漫画が多く、動物好きだった私は夢中になって読みました。この作品は犬を飼っている人に一度は読んでほしいくらい犬との接し方がわかる漫画です。言葉を話せない犬に対して起こる様々な問題にどうしたらいいかをわかりやすく教えてくれます。犬に対して真剣に向き合っていて、それを読者にわかりやすく伝えたい作者の熱量が漫画から伝わってきます。絵も可愛くて犬愛にあふれています。

自営業 / 川崎綾子

「となりの信國さんは俺のことが好きな気がする」安田剛助

- 広島弁が可愛い女子高生が転校してきた好きな男子高校生に、ティーンズファッション誌に掲載されているモテテクニクをひたすら行使していく、という単純なラブコメなのですが、ヒロインの純粹さ無邪気さで良く料理されていると思います。ヒロインの突飛なアクションを魅力的なサブキャラがフォローしていく展開も面白く、ひたすらストレスフリーで読める作品です。大変癒されました。

会社員 / 三浦佑樹

「ドピュッてみよう」キクタ

- すごい才能だと思う。面白いのにエロい！ エロいのに面白い！！ 掲載されている短編、すべてにスキなし、大傑作！！※成年コミックスですが、成年だからって読んでいないのはもったいないです。エロがダメじゃなければぜひ読んでもらいたい！

COMIC ZIN 商業誌担当 / 塚本浩司

「虎鷄 とらつぐみ - TSUGUMI PROJECT -」ippatu

- 2021 年最大の衝撃でした。SF、アクション、ホラー、人外少女など、そのスジの方々が大好きな要素が特盛になった最強のマンガです。はるか未来、自分の見知った土地が朽ち果て、異形の跋扈する場所になり果ててしまった終末の先を、暴力的なまでの画力で見せられる感性による蹂躪。絶望的な状況を、経験と工夫で切り抜けていくハイパーディテールな SF サバイバルでありながら、ころころ変わる「つぐみ」の表情や、レオーネたちとの掛け合いに、しっかりとマンガならではの楽しさ・おかしさも搭載されていて、グイグイと読み進めてしまう魅力に満ちています。フランスのレーベルから生み出され大ヒット、それから日本に逆輸入されて話題になっているという異色の経歴の作品ですが、フランス、日本に留まらず、天下を獲れるマンガであると思っています。必読です。人類は滅亡する。

株式会社アニメイト アニメイト秋葉原 / 岡部真矢

- 核戦争後の廃墟と化した未来の日本を舞台にサバイバルと書いてしまうと、ありきたりに聴こえてしまうが、とにかく画力の圧倒的うまさに引き込まれてしまう。個人的にはつぐみがかわいい！表情がとても良い。

コミック担当 / 実松由夏

- 圧倒的な画力と斬新な設定。さらに評価されるべき作品だと思っています。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

「ナースのチカラ ～私たちにできること 訪問看護物語～」広田奈都美

- 訪問看護ステーションを舞台にした作品。自宅で暮らしながらの闘病、介護に至る事情やシチュエーションは想像以上に多岐に渡る。家で暮らし、亡くなっていくとはどういうことなのか。訪問看護師たちの目を通して語られる利用者さんたちの姿は、明日の自分でもある。作中で描かれる在宅医療、在宅介護の場面は静かな闘いの連続。親の老いが気になり始めたり、自分自身の老後について考えてみようと思ったときに手にとりたい一冊。

ライター・老年学研究者 / 島影真奈美

「夏目アラタの結婚」乃木坂太郎

- 獄中のシリアルキラーをだますつもりが、いつの間にか惹かれてその愛情が偽物なのか本物になってしまっているのか…駆け引きが楽しい。 圧倒的な画力によりヒロインの不気味で可愛いく愛くるしい感じがとてもよく表現されている。

デザイナー / 高永貞光

- 心理戦がハイレベルでドキドキが止まりません！結局真珠は殺人鬼なの？！アラタは利用されているだけのなの？！と新刊が出る度にバタバタしています。

会社員 / 竹本慧

「夏を知らない子供たち 山本和音作品集」山本和音

- はるかな未来、学習が悪とみなされている世界、地球ではなさそうな場所、いろんな世界を舞台に描かれるオムニバス形式のマンガです。すべての話に共通しているのは未来への瑞々しい希望がちりばめられていること。世界も結末も様々ですが、物語のそこかしこに散りばめられた良い未来への予感と可能性に強く惹かれます。未来への希望を持ちたい方にお勧めのマンガです。

システムエンジニア / 廣瀬公将

「奈良へ」 大山海

■ 土地と歴史が重なり合っているように、現実と虚構は重なり合っている。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

「何度、時をくりかえしても本能寺が燃えるんじゃが!？」 藤本ケンシ、井出圭亮

■ 絵もかっこよく、ギャグのノリも話の流れも良いです。同じようなところを繰り返すのではなく、飛ばすところは飛ばせる設定によってテンポが良いと思います。当初の信長のクズキャラがだんだんイケオジになっていく様がかっこいいです。

自営業 / 川崎綾子

「逃げ上手の若君」 松井優征

■ 少年マンガでは、読者受けが厳しいであろう歴史もののうえ、しかもマニアック？な南北朝が舞台。さらに一般で知られてない人物を主人公に据えて、エンタメへと落とし込む技量に驚かされました。「逃げる」に特化してどこまで見せてくれるのか楽しみです。

サブカル専門ライター / 河村鳴紘

■ 松井優征が史実に基づいた歴史漫画を描く？ 嘘でしょ？ バケモン出でしょバケモン、と疑いの目で読んだら、本当に歴史漫画で驚いた。化け物じみた武将が多すぎて、どこまで史実だと信じていいものか悩みますが、面白いからどちらでもいいや。主人公、タイトル通り逃げてばかりですが、戦略的撤退だから！

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店コミック担当 / 山本さとみ

■ まさかの歴史もの!？ がいつものケレン味あふれる演出で最高の少年マンガに！ 軟弱そうな少年が実は一番まともじゃなかった、という『暗殺教室』来のモチーフが綺麗にはまった感があり、瘡痍との対決シーンは読んでいて恍惚状態でした。

会社員 / 末永龍介

■ 鎌倉幕府滅亡で家族も故郷も失った北条時行。彼は逃げつつも、仲間を集め、復活への道を少しずつ歩み始める…。足利尊氏はラスボス感満載だし、少年ジャンプらしい展開の速さとキャラの立ち方で、北条時行とか、中先代の乱とかがわからなくても楽しめるようになっている。むしろ下手に知っているとか知識がじゃまをしているかもしれない。

鳥取県立図書館司書 / 野間勤

■ 実際にいた人物をもとに程よい脚色、あまり脚光を浴びない北条時行にスポットライトをあてているのがすごい面白いです。最後がどうなるのか、今後の展開がとても気になります。

MIGIMIMI SLEEP TIGHT / 涼平

「ニャイト・オブ・ザ・リビングキャット」 ホークマン、メカルーツ

■ 聞いたことのあるタイトル通り、ゾンビ化ではなく、人が猫化してしまうホラー漫画…ではない！猫好きがために至福と恐怖の間で苦悩する人々の見た目はホラーな本格コメディ。

コミック担当 / 実松由夏

「ニューノーマル」 相原瑛人

■ "「パンデミック」後の近未来の世界では、常時マスクで口元を覆っていて、くちを見られるのがとても恥ずかしいことになっています。「お嫁さんになる前にくちを見られたなんて…」なんて、ばかげていると思いつつも、コロナ禍後に知り合った方の素顔をきちんと見たことがないことを思うと、ふとゾッとします。ましてや、子どもたちにとっては、素顔を見せあうことのないことがもはや本当に「ニューノーマル」なのかも知れません。そして、これは私たちの明日かも知れません。。"

第 75 期司法修習生 / 三葛敦志

「の、ような。」麻生海

- 人生何が起るかわからない。突然両親を失った兄弟と、その兄弟たちを引き取るようになったカップル。法律的に繋がっているわけではない奇妙な 4 人の同居生活は波瀾万丈が予想されるのに…。とにかく作中に出てくる、兄弟がめちゃくちゃいい子すぎる！とつつきにくそうなキナちゃんも、人間として懐の広く深い人、愁人も最初ただの善人のダメなやつ？と思ったら子供と一緒に（笑）成長してていいやつじゃん。このまま本当の家族になって欲しいな。作品中に出てくる人に悪人がいない（事故の原因の人はダメですけど）。一生懸命歩み寄って生きて行く感じが読んでてほっこりするんです。もう、子供たちが可愛くて可愛くて、一生懸命だから抱きしめてあげたくありませんよ！

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

「ハイパーインフレーション」住吉九

- シリアス、ギャグ、ヒューマニティを力強く行き来していてたくましさを感じる。ずっとのびのびと作品を発表しただけだと嬉しい。

往来堂書店 / 三木雄太

- カネや経済といった少しお堅いテーマをよくここまで…！ってくらいぶっ飛んだ展開で描いていてその熱量がすごい！没入してくると強烈すぎるキャラ達のヤバめの行動もむしろ清々しくて「いいぞもっとやれ」という感覚になってきて楽しいです（笑）

会社員 / 小野塚博之

「バクちゃん」増村十七

- 表紙や絵柄からしてほんわかした感じなのかなあと思いきや、読み終わったあとかなり真剣に、本当は誰もが何者でもないはずなのに、どこに生まれてどこで育ったかでいろんなことが決めつけられてしまうんだな、と考えさせられるお話しでした。ただ、どこで生まれた何者であっても、幸せに暮らす権利があり、それを個人の力ではどうにもできない、大きな力に阻まれるようなことがあってはならない、誰でも。と、祈るような気持ちにさせてくれます。

主婦 / 堀江千秋

「ぱちん娘。」若林稔弥

- パチンコ好きもそうでない人も読めるパチンコ漫画。この作品が一般誌に載っていれば完璧だったのですが（連載はパチンコ系 WEB サイト）、それでも紙の単行本が出た事に感謝。ホントダメ人間ばかり出てきますが全てが愛おしくなる作品。

ブックファースト新宿店 / 渋谷孝

「初恋、ざらり」ざくざくろ

- ここ最近、軽度知的障害をテーマに扱う漫画が増えたと感じる。こちらのもその一つ。かなりテーマとお話がナチュラルに融合していて、面白いし勉強になる。主人公と優しい彼の気持ちがどちらも分かりやすい。読むと人に優しくなれる気がする。

bar 図書室店主 / 岡部愛

「初恋ディストピア」シギサワカヤ

- シギサワ流ジェットコースター恋愛漫画全開！中高生でこういう初恋体験しておきたかったようなそうでもないような… と思ってしまうあたり私も M 気質でしょうか。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

「果ての星通信」メノタ

- これぞ正統派の少女マンガSFの系譜に連なる作品だと思う。遥かなる宇宙への憧れと、独自の環境に合わせて進化した異星人達とのコミュニケーション。それは夢物語かもしれないけれど、それこそが物語の力ではないか。けして逃げなかった主人公に相応しいラストに泣けた。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

「バトルグラウンドワーカーズ」竹良実

- 始まりは、徹頭徹尾地味。主人公たちは、わかりやすい正義感のためではなく、我々の身のまわりにある介護やいじめや毒親やドロップアウトというありふれた絶望をやり過ごすために、人類を救うための遠隔ロボット・ライズに乗って人類の敵・亞害体と戦いはじめる。その戦いも、遠隔であるが故に、死にはしないだが、その代わりに「星が減る」という、かなりイヤなペナルティが科される。この地味な不快感のなかに折れずにいる主人公仁一郎がいることだけが救いで、3巻までは読み進める事になる。 が！！ この地味さは、すべて「仕込み」なのだ！！ 4巻からの怒濤の展開は、ネタバレでしかないので詳細は書かないが、マンガでなければいけない理由に満ち満ちている。想像も付かない設定の裏、考えられない目標の設定と乗り越え方、キャラクターの多面的な反射、伏線の鮮やかな回収……！ それぞれの驚きを超えて得たカタルシスに、次々と新たな衝撃が加わってゆく。この驚きのすべては、スーパー能力の持ち主によってもたらされるのではなく、すべて普通の人間の「意志の力」で実現されるわけだが……！ そして2021年、8巻で完結。そのラストの理想と重み、これこそ、「作品」。

ニッポン放送アナウンサー / 吉田尚記

- 思いがけない展開で読者を惹きつけ、物語を強く着地させた力量に感服。全八巻で完結した今こそ改めて推したい。

書評家 / 福井健太

「BADON」オノ・ナツメ

- 男臭い男たちが営む高級煙草店と犯罪の匂い。彼らと共に暮らす幼いけれど賢い少女。まさにオノ・ナツメの真骨頂とも言える設定と展開だ。何より彼女ならではの容赦ない描写に息をのむ。おそらく作家としての集大成となる作品ではないか。

コミティア実行委員会代表 / 中村公彦

「貼りまわれ！こいぬ」うかうか

- シールを貼るという謎の職業のいぬのお話。ゆるい。ゆるい世界。でも何かフォレスト・ガンプに似た感動を覚える。人と人は知らず知らずに影響しあって生きているんだなあ。ってなんか元気でちゃう作品。

鳥取県高校教師 / 佐川由加理

「ひとりでしにたい」カレー沢薫、ドネリー美咲

- 独身・一人暮らしに刺さりまくる漫画。ですがグサリグサリと刺さりまくるのに痛さよりも面白さが勝つ漫画なんです。お墓問題・介護問題・お金・保険の見直しなどタメになる話が多いのに説教臭くはなく、一緒に見直していこうぜ的な表現で読みやすいです。主人公自身やその周りで起きる事は誰にも起きている事なので自分の事のように感じる人は多いはずです。

会社員 / ターシ

- 35歳からの終活という重いテーマで、よくぞここまで踏み込んだことをこのポップさで表現できるものだと感心しきりです。生と死は地続きのもので、「よく生きる」ことを無視して「よく死ぬ」ことは出来ないんだなと気づかされる名著です。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

「日に流れて橋に行く」日高ショーコ

- 明治末期の呉服店。日本橋で若者たちが新しい時代を切り開いていく物語。たくさんの人がぶつかりあいながらも自分の仕事をする姿が読み応えあります。描かれる時代の空気感、着物、洋装などの装いも素敵で物語の先が楽しみです！

主婦 / 紺野泉

- 明治の終わり、呉服店を中心とした男たちの熱い物語。今の日本橋に立ち並ぶあの百貨店が…、なんて思いに馳せながら読み進めると実に面白いです。絶対 NHK とかでドラマ化して欲しいな？。なんなら朝ドラでもいい！！（笑）ヒロインの方向性は違うけど。

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

「卑弥呼 - 真説・邪馬台国伝 -」リチャード・ウー、中村真理子

- 3 世紀に倭国に君臨したとされる女王、卑弥呼をカリスマとして描くのではなく、野望と思考と論理と行動によって女王へと上り詰める過程を描く。当初、我欲のために行動していたダークヒロインが、戦いの中で協調性や人間性を高め、人望を集めていくある種の成長譚。物語のスケールは順調に大きくなり、舞台が「邪馬台国」であることの意味もより明確になってきた。心の機微が愛憎につながり、欲望に根ざした権謀術数が積み重なる。

(有) 馬場企画 編集者／ライター / 松浦達也

「ヒロイン？聖女？いいえ、オールワークスメイドです（誇）！」螢子、あてきち、雪子

- タイトルの、「オールワークスメイド」の単語に引かれて読んでみたら、メイド愛溢れる面白ファンタジー！

COMIC ZIN 商業誌担当 / 塚本浩司

「ファッション!!」はるな檸檬

- 読んでいてずっと怖い怖い怖い！と思うし、本当につらくて、読むのをやめたくなるけれど、最後に「いろいろあったけど、大丈夫でしたよ」と言ってもらわないと怖いままなので、読み続けることしかできない。でもそんなぬるい結末が用意されているとも思えず、次の巻に進むのが本当に怖い……でも大好きです。絵も本当に大好き！登場人物の表情の微妙な変化のつけ方に圧倒されます。

ライター / 門倉紫麻

「VR おじさんの初恋」暴力とも子

- 美少女アバターでバーチャル世界に没入する「おじさん」同士のラブストーリー。と書くとイロモノっぽいですが、泣きたくなるほどピュア。バーチャルアイデンティティがすでに身近なものになっているなか、人と人の新しい関係性が生まれる希望を感じさせてくれる作品でした。

ブログ「マンガ食堂」管理人 / 梅本ゆうこ

- おじさんがサービス終了間際の VR 空間で恋する話。おじさんは女の子の姿で女の子のアバターに恋をします。価値観や恋愛や結婚、オタク、仕事、学校、さまざまな事柄や人に肯定も否定もしないところが好きです。何かが綺麗に解決したりするわけではなく、おじさんはおじさんのままだけど、年齢とか性別とか環境とか関係なく、2 人だけの恋というものを見ました。今でも、漫画の中で見たあの景色を何度も何度も思い出して涙ぐんでしまう。私は VR について詳しくないのですが、友達から、お喋りしたりするだけの VR の世界があることを聞きました。ただ、そこに行くには自分で 0 からアバターを作らなければならなくて、そういう知識と技術を持った人だからおじさんが多いと。そして女の子のアバター（中身はおじさん）が多いと。この漫画に出てくるアバターも女の子が多いけど、おじさんたちなのかなあ。

声優 / 富岡美沙子

「フルナイト」安田佳澄

- 独特すぎるダークな世界観が秀逸。死者の声を聞くことが出来る主人公が故人と現世の人の心を繋ぐ良い話系なやつかな？と思ってたら途中から思わぬ方向に話が転がって行ってビックリ。まだ2巻なのでとにかく続きが楽しみです。

会社員 / 小野塚博之

- 陽がとどかなくなった世界。酸素を供給するために人を植物にして維持する世界。植物になるまでどう生きるのか、絶望感のなかでなにかが動いていくような。植物や背景の描き込みもすごくて圧倒されます。

ブックエース上荒川店・コミック担当 / 倉本かおり

- 「格差」がこれでもかと煮詰まってて、それをちゃんとサスペンシ的なエンタメに昇華してるの本当にすごい。「絶望」の先に見出すものに期待して1票。

株式会社プロプラス 商品部 / 池本美和

「ふたりはだいたいこんなかんじ」いけだたかし

- 年上シナリオライター佐久間と年下駆け出し声優わこちゃんの百合カップルほのぼのまんが。わんこも段々仕事が増えてきて目が離せなくなってまいりました。二人の話はどちらかなー

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

「ブナの森のアリア」秋鹿ユギリ

- アリアがかわいい。作品全体に流れる優しい空気感が読んでいて心地いいです。

COMIC ZIN 商業誌担当 / 塚本浩司

「踏切時間」里好

- 踏切をモチーフに多彩なシリーズを作り、全八巻のオムニバスに育てた技ありの一作。独創性と実力に裏打ちされた世界観には得難いものがある。

書評家 / 福井健太

「ブラックガールズトーク」マキノマキ

- 現代の水戸黄門

公務員 / 東くるみ

「ブランクスペース」熊倉猷

- 絵柄と空気感がほのぼの系で、普通的女子高生と特殊能力のある女子高生のゆるふわストーリーが展開されていく印象を最初は受けるのですが、徐々に話が不穏な展開になっていきます。良い意味で裏切られたような気持ちで、絶妙な日常と異常のバランスを楽しめる作品だなと思います。

会社員 / 三浦佑樹

- 独特な間やテンポ感につい笑っちゃうようなセリフの数々も最高で、とにかく作者さんのセンスが光りまくっているなど感じる作品。絵柄はとても可愛くて読みやすいけど、内容はよくよく考えると結構怖いかも…だけどそのギャップがまた良い！

会社員 / 小野塚博之

- すごく新しい…。ほのぼのした絵柄、ほのぼのとした主人公、不思議な力を手に入れても、それが向かう先は不穏…。すでにざわついた作品なので知っている人も多いと思うが、これは「あ、こんなマンガ読みたかった」ってなりたいたい新しいものを求めているマンガ読みにお勧め。まだざわつく心、残っていたんだよ…

会社員 / 西尾美里

- あると思えばある、いると思えばいる。現実だと思っていたものの境界がどんどん曖昧になっていく。「脳」の持つ力を感じる、現在進行系のリアルな SF マンガ。めちゃくちゃ好きです。

株式会社リブロプラス 商品部 / 池本美和

- 妄想？それとも現実？得体の知れない何かがそこにある（居る）話を進めるごとに押し寄せてくる不安ライト SF なのかと思いきや、かなりハードな展開に成りつつある。今後の展開に期待！

あゆみ BOOKS 杉並店店長 / 土屋修一

- ある雨の日、同級生が目に見えない傘をさしていた。私は少し不思議な話が好きで、1 話を読んで、日常に SF が溶け込んで好きな感じの漫画だ！と思い購入し読み進めると、いい意味で裏切られました。序盤は少し不思議な日常と空白が心地いい。しかし、だんだんと、あれ、おや？と思っているうちに物語が加速いき 1 巻が終わりしました。なに、これ、すごい。とドキドキし、待ちに待った 2 巻はまた予想できない展開！こんなにも先がわからない漫画始めてです。なにこれ。

声優 / 富岡美沙子

「ブランチャイン」池辺葵

- 池辺先生の描かれるちょっと不器用な仕事人間が好きで、今作においては家族と仕事そのどちらも愛して大切にす

る人たちの姿を読むことができます。淡々としたリズムで大切なことを教えてくれる優しい作品です。

フリーランス / 金輪英恵

「プリンタニア・ニッポン」迷子

- 生体プリンターから事故で出力されたプリンタニア・ニッポンという SF (すこしふしぎな) 生き物と暮らす日常譚。背景になかなかハードなディストピア世界を垣間見せつつももちもちとかわいい日常が綴られてゆきます。このプリンタニアの「すあま」がかわいい。とにかくかわいい。そのもちもちが見たいがために繰り返し繰り返し読みました。

会社員 / 津田圭

「BLUE GIANT EXPLORER」石塚真一

- 主人公の成長とともにタイトル変更してくれるので、毎年投票できています（笑）。音楽と旅、そして描かれる人間模様、すべてが素晴らしい。読み飽きない作品です。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

「紛争でしたら八田まで」田素弘

- とにかく勉強になります！！昨今のコロナ禍で様々な国の対策をメディアで知るにつれ、なんとなく簡単に世界情勢についてもっと知りたいななんてことをぼんやり思ってそのままやり過ごしていたのですが、このマンガを読めばその知識欲が満たされ（るような気がし）ます。余談ですがこんなに行儀の悪いスラングが飛び交うマンガを読んだのが物凄く久しぶりでなんだかそこに妙にテンションが上がってしまいました。八田のチセイは世界を救う！

フリーランス / 金輪英恵

- 昨年、一次選考を軽々と通過するだろうと思ったら、なんらかの偏りがそうさせたかはわからないけど、実世界を下敷きとして国際政治や紛争をマンガというエンターテインメントに昇華する。主人公は地政学リスクコンサルタントであり「世界を回る解決屋さん」の八田百合。世界中の小さな町や村で起きる、小さくとも深刻な民族対立や格差による断絶を、八田が知性と地政学とプロレス技とローカルフードで解決していく。われわれ日本人が感覚として捉えるのが難しいミクロな民族紛争について、ディテールの説得力も盛り込みながら、トルク高く読ませていく。

(有) 馬場企画 編集者／ライター / 松浦達也

「ヘテロゲニア リングスティコ ～異種族言語学入門～」瀬野反人

- 異世界ものかな？と手にとった本書。手探りのコミュニケーションで異文化交流。巻を追うごとに理解する喜びを感じます。人同士ですら他人を自分の尺度で捉えて、理解したと錯覚してしまうのだから異種族間だとさらに困難だよな…！と考えさせられます。

会社員 / 伊藤千恵

「望郷太郎」山田芳裕

- 人間の欲望と社会の仕組みを改めて考えさせられる。

PENICILLIN / HAKUEI

- 山田芳裕ファンの皆様安心してください 望郷太郎でもこの作品でも山田節炸裂してます。未来の話ですが、文明の進化を超越した姿にショック …

(株) エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部大介

- 人類とはどのようにして発展したきたんだろう・・・そんな疑問に一つの答えを投げかけてくれる作品。

本と文具ツモリ / 津守晋祐

「ボールパークでつかまえて！」須賀達郎

- 野球漫画ではなく、野球場漫画。メインはビールの売り子さんだけど、野球場にいる人々（選手も観客も）の物語。ポンコツ風味のギャル、ルリコさんが超かわいい！野球に興味はなくても、球場でビールを飲みたくなります。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店コミック担当 / 山本さとみ

「僕×スター」肥谷圭介

- 弱い主人公が強い相手に立ち向かう、王道の少年漫画が好きならば、四の五の言わずに読んでみてほしい。徐々に覚醒していく底辺高校生と、彼に対して献身的になる引きこもりの兄。相手になるヤンキーがボクシングに目覚めて更生しようとする姿。完結がとても惜しいのですが、胸アツです。

Books アイ蒲生エキナカ店 / 野口忠義

「僕とロボコ」宮崎周平

- 「誰も傷つけない、優しい笑い」と口で言うのは簡単ですが、それで角を丸めることなく、過激なまでに面白いギャグマンガにした手腕に感嘆します。ロボットが子どもの日常生活に参入する作品は「丸出だめ夫」に始まり、「ドラえもん」で完成したと思いますが、久々に「ドラえもん」を超える作品を見ました。絵は決して巧みとは言えないのに（失礼）、作者がギリギリまでネームを磨き上げていることがわかる。毎回、最終回かと思うようなテンションと熱量に圧倒されます。何より、現代のリアル子ども世界で、親友やら友情やらが半ば「幻想」と化していることを、しっかり踏まえているのがすばらしい。ロボコやボンド、ガチゴリラやモツオは、そんなニヒリズムと果敢に戦っているのだと思う。これを「友情幻想の総本山」、「少年ジャンプ」のど真ん中で連載していることに、また感動を覚えます。 ……などと、ちょっと理屈っぽく褒めてしまいましたが、ただ言いたいのは、2021年に一番楽しめたマンガだということです。

読売新聞文化部編集委員 / 石田汗太

- ひとくせふたくせしかないキャラクターしか出てこない「半分は優しさ、もう半分はセンスの塊」なギャグマンガ。凡人よ、ずっとそのままの君でいてくれ。

(株)リブロプラス 商品部 / 池本美和

「北斗の拳 世紀末ドラマ撮影伝」武論尊、原哲夫、倉尾宏

- 「北斗の拳」が漫画ではなく、特撮ドラマとして制作されていたとしたら？という設定の物語ですが、時代がマンガ連載時と同じ1983年となっていますので、CGなどない体を張ったアクションを実際にしていた当時の熱い制作現場の血と汗と涙のドラマになっており、「北斗の拳」を知らなくても楽しめます。ですが、漫画「北斗の拳」での辻褃の合わなかったり変な展開の箇所などを、撮影中のアクシデントや思い付きで元の脚本を変更したのでこうなったという事になっているので、原作を知っていると「そう来たか！」とメタ的にも楽しめて二倍お得です。

丸善ジュンク堂書店 営業本部 / 小磯洋

「ぼくのお父さん」矢部太郎

- 話題先行で、今さら感はありますが、やはり落とすわけにいかない。「大家さんと僕」よりも傑作だと思います。温かい絵柄のために、ほのぼの親子ものに見えますが、幼い息子が父を見つめる目は、実は相当にシニカルで辛辣。矢部さん自身が認めています、つげ義春の「無能の人」を、息子の目から裏返したような作品です。変わり者の夫を支えるために、いろいろなものを諦めねばならなかった「お母さん」の心情も、さりげなく、きっちり描いているのはすごいと思う。芸人マンガ家・矢部太郎の才能がホンモノであることを証明した一冊です。

読売新聞文化部編集委員 / 石田汗太

「僕の心のヤバイやつ」桜井のりお

- 恋愛偏差値という言葉がある。この作品、恋愛偏差値低めの市川と山田の恋愛模様が目が行きがちだが、市川姉の視点がかかなり秀逸。やはり恋愛偏差値が低そうで、家でダラダラして、弟の恋愛模様を覗き見して一喜一憂する市川姉。それって読者としての自分の視点ではないか！と愕然とする…。これはもう読み続けるしかない。

医師 / 岸本倫太郎

- 中二病真っ盛り（笑）で陰キャの市川京太郎が、美人でスタイルよくてクラスの人気者でモデルやってて、、という山田杏奈と、図書室でふと一緒になったことから徐々に距離が近くなるというお話。ありきたり、ありきたりだよ。でも、このもどかしくも懐かしい距離感は、心が温かくなります。ちょっと抜けてるけどリアクションがとにかくかわいい山田さんに、市川はどんどん惹かれて行って、、続きはぜひ読んでみて下さい！

第75期司法修習生 / 三葛敦志

- ヒロインが主人公をこれだけ好いてくれるというのは、このタイプの物語を推進するのに必要な「大きなウソ」だとしても、誰かを好きになる／誰かに好かれることで成長していく少年の内面は実に真面目に描かれていて、そこには「大事な真実」がある。いやーそれにしてもこの甘酸っぱさには身もだえさせられる！ 6巻ラストであんなことになって普通なら話が終わりそうなとこだけど、このあとといったいどんな展開が？

朝日新聞記者 / 小原篤

- すっかりハマって新刊を楽しみにしている一つ。のりおくん、スピノフで2人の20年後などで描かれたら、絶対絶対素敵な男になっていそうだー不器用とピュアが止まらなくて、愛おしい2人が好きだ！

フリーアナウンサー・本屋 SENSE OF WONDER / 松尾翠

「北北西に曇と往け」入江亜季

- 主人公が特殊な技能もちであるが、その辺がふわっとしつつもストーリー的には気にならずそういうものだと入ってくる。本筋の話のミステリー感がほどよく次巻が常に気になる作品。個性ある美麗な絵柄も非常に好みます。

デザイナー / 高永貞光

- 現在5巻まで刊行。この時点で、主人公はある連続殺人事件に巻き込まれています。漠とした悪意と対を成すように描かれるのはアイスランドの雄大な自然。作者の卓越した描写力で描かれた風景は、言葉を無くすほど美しい。謎を追いつつ風景を堪能しながら読み進めるのもまた別の一興です。

菓子研究家 / 福田里香

「ボクらはみんな生きてゆく！」アキヤマヒデキ

- 狩猟マンガと言えば、「山賊ダイアリー」を想起するマンガ好きが多いように思う。しかし同じ狩猟実体験マンガでも本作は、イノシシのような個体の大きい獣について描かれている（「山賊ダイアリー」は線もシンプルでテイストもよりマイルドだった）。先達が切り開いた道を、後進がより先鋭化させるのは、いつの次代も同じ。本作は解体や血抜きなども含めたより本格的な狩猟の世界が描かれている。こまさの狩猟の王道を見ているよう。野生鳥獣と人間の付き合い方や害獣駆除の実情など、狩猟業界を覗き見できる気分になるのも楽しい。

(有) 馬場企画 編集者／ライター / 松浦達也

「ほしとんで」本田

- 俳句をテーマにした作品ですが、ものづくりの難しさやもどかしさ、それを発表する時の恥ずかしさ…などがリアルに描かれているので、何かしらのものでづくりをした人はより刺さるんじゃないかなと思います。もちろん俳句についてもしっかり・分かりやすく触れられているので、俳句に興味があるかた以外でも楽しめるんじゃないでしょうか！

会社員 / 畑中瀬路奈

「本阿弥名刀秘録」小田桐道明、大越弘道

- ちょっとお値段の張る単行本ではあるんですが、画面から伝わる入魂の筆致にはその価値がありますよ。刀剣に魅入られてきた人の気持ちが分かる。小憎らしい秀吉像も楽しかった。

往来堂書店 / 三木雄太

「まじめな会社員」冬野梅子

- 文学フリマで出す ZINE に書く予定がコロナでポシャるとか、ピンポイントで狙撃されてました。健康で文化的な最低限度の生活のハードルの高さよ。

マンガ研究 / ライター / 会田洋

- 10 年後に「コロナ禍のマンガ」として思い出す作品はきっとこれだと思う。

往来堂書店 / 三木雄太

「マロニエ王国の七人の騎士」岩本ナオ

- とにかく絵が細かくて綺麗なので、ファンタジーがより素敵に入ってくるその中にキュンとさせてくれるところが多々あり、ニマニマせざるを得ない。

ヴァイオリニスト / 佐藤帆乃佳

- 『町でうわさの天狗の子』が一見奇妙だが骨太のファンタジー、つまりこの世界の秘密をめぐる物語であったように『マロニエ王国の七人の騎士』もまたやはり、一見奇妙だが骨太なファンタジー、この世界の秘密をめぐる物語だ。八つの国からなる大陸の中心にある国、マロニエ王国。その女将軍であるバリバラには七人の息子がいる。OK. OK. ここまではいいでしょう。ファンタジーの始まりとしては上等だ。だが、その7人の息子の名前が『眠くない』『博愛』『暑がりや』『寒がりや』『獣使い』『剣自慢』『ハラベコ』となってくるとだいぶ話は変わってくる。ふたつ名とかじゃなく、本当にこういう名前なんだぜ？ この子たち。で、この基本まぬけに聞こえるんだけど、でも描かれるキャラクターとしては愛すべき好青年であるところの変な名前の青年たちが、世界の7つの国へと使命をおびて赴かされる。この世界がこの世界である秘密をめぐる旅。魔法の探索物語。魔法。根源の、おおもとの、ふるいふるい言葉と行いとをたどる旅。おお、ファンタジーであることよ。岩本ナオが描く実直で線で描かれるまぬけで愛すべき好青年たちによる、だが、神話的なイメージを背負った、その世界の根源にせまる筆致。このギャップがこのマンガの魅力であると思う。

ソフトウェアエンジニア / 第貳齋藤

- マロニエ王国の7人の個性的な騎士がいろんな問題や困難を乗り越えていく様がとても美しく、まるで絵画を見ているような綺麗な絵と優しい物語で進んでいきます。読んだ後にいつも裏表紙の金額を見て、この値段でこの満足度は高いと思うそんな漫画です。

ヘアメイク / 北原由梨

「満州アヘンスクウッド」門馬司、鹿子

- 思っていたよりフィクション性が強く、満州全土を股にかけた活劇として展開もダイナミックでおもしろいです。満州が舞台の作品は割と暗さや辛さが全面に出てくる物が多いように思いますが、この作品は香港のクライムムービーを見ているようなドキドキ感があるように感じます。

会社員 / 林礼春

「ミワさんなりすます」青木U平

- 読み進めてタイトルの意味が分かりました。この設定ありそうでなさそうで、心の声が面白過ぎです。ボトルシッブってヤバすぎです 笑

(株) エフ・ジェイエンターテインメントワークス / 阿部大介

- 私個人にも少なからず推しという存在がいて、推しがいる世界に生まれてよかった～などと考えて幸せを噛み締めるタイプのオタクという自負はありますが、最重度のオタクは最早生きづらいところまでいってしまうんですね。笑生活の、いや、人生の全てといっても過言ではない憧れの映画スターの家政婦になりすます物語。マンガだからこそ生まれるであろうこの空気感が絶妙です！端正な美しい絵面にトンチキな(誉めてる)展開と、オタクのジェットコースターのような心の乱高下の静と動のコントラストが素晴らしく、素直にクスッと笑っちゃいます。どう着地するのか！？楽しみです。

公務員 / 宇田川結衣子

- ミワさん、かなり共感しました。家政婦募集見つけたときのトキメキと、ファンNGと書かれていたのを見つけたときの絶望感、「だよね??！」の気持ちでした。ミワさんの悟るときのポーズが笑いました。「面白いけど何故!？」でした。毎回、凄く気になるところで終わっているの、次の巻が出るのがとても楽しみです。

書店員 / 桶谷佳代

「向井くんはすごい！」ももせしゅうへい

- カーストや差別がテーマかと思ったら、ものすごい個に掘り下げてきて、思春期の痛さと素直さに溢れてる作品。イマドキなような、懐かしいような不思議な気持ちになりました。上下巻で話の構成もうまく純粋に面白いと思います。

株式会社来知 WEB デザイナー / 河本智芳

「無能の鷹」はんざき朝未

- アホなことでは社内でも一目置かれる、社内ニートの鷹野さん。不思議な主人公です。何が不思議かっていうと、天然キャラっていうのもなくて、ぼーっとしているわけでもなくて、いやぼーっとしてるんだけど、それなりにちゃんとしゃべって、たくさん動いて、作品のテンポがすごくよくて、鷹野さんもできるように見えてしかたがなく、やっぱりできないんだけど、でもなんか小気味いいっていう。天然不思議ちゃん、ではないんだな、この人。鷹野さんが顎に手をやる、その佇まいが好きです。

教員 / 戸田穠

「メタモルフォーゼの縁側」鶴谷香央理

- 年の離れた2人の互いを思いやる温かさが伝わってくる作品。

自営業 / 小野裕子

「メダリスト」つるまいかだ

- 育つ者と育てる者、それぞれを高め合っていく想いと言葉の数々にはページを超えて読み手も奮わせる力があり、互いの成長に惹きつけられる。周りで切磋琢磨するライバルや、支えてくれる人物もみな表情豊かで魅力的。ストーリーのテンポもよく、フィギュアスケートの知識も充実。凸凹コンビが目指す頂点への道のりを、たくさんの人に見届けてほしい。

会社員 / 伊東敬祐

- 冬のオリンピック開催間近というタイミングで、この漫画をオススメしたい。フィギュアスケート漫画であるこの作品は、世界を目指す目標はあれど、大人ではなく子供たちが成長し、一人一人の課題を克服していく姿は、読み手に熱い思いを抱かせます。それぞれの思いと努力と才能とコーチたちを是非楽しんで欲しい。

三省堂書店海老名店・コミック担当 / 近西良昌

- キャラが増えてどんどん面白くなってきた感。その割にはテンポよく話が進んでいて快い。どこに出しても良い「清く正しく美しい」作品。

図書館員 / 金田健太郎

- 美しいスケートिंगが目に浮かぶような絵、とても読みやすい話のテンポ感、個性際立つ登場人物達、どこをとっても素晴らしい作品です。司先生が好きすぎる……！

会社員 / 竹本慧

- フィギュアスケートを題材にした王道スポーツ漫画。普段テレビ等で目にするようなトップ選手の世界ではなく、競技会に出る手前のところから描いているのも面白いです。キャラクターの表情の生き生きとした描かれ方もいいし、何よりも演技中の絵が素晴らしく説得力がある。脇を固めるキャラクターのそれぞれ違う努力の形も丁寧に描かれていてみんな応援したくなります。タイミング的には北京オリンピック前に読まれてほしい漫画。

会社員 / 津田圭

- どストレートなスポ根漫画

会社員 / 齋藤隼

「メンタル強め美女白川さん」獅子

- 2巻を読みながらずっと泣いてたんですけど疲れてんのか…？デトックス効果があり美容や(心の)健康にもいいのでサウナだと思って読んでください。

金海堂イオン隼人国分店コミック担当 / 園田美智子

「焼いてるふたり」ハナツカシオリ

- 「恋愛」と「料理」の合体までは読めましたが、交際ほぼゼロ日結婚をドッキングさせると、こんなにほんわかするのかと……。自分が、キャラクターのご近所さんになった気分させられる、不思議な作品です。

サブカル専門ライター / 河村鳴紘

「ヤコとポコ」水沢悦子

- 可愛い世界観とヤコポコのほんのり優しいやり取りにほっこりしつつ、夢を追うことや自分を貫くことの難しさ、何かを生み出すことの難しさに胸をギュッとさせられます。次巻で完結ということで大分お話も佳境に入ってきましたので、ぜひ今このタイミングで多くの方に読んで欲しいです。「情報」に囲まれ過ぎることの是非についても、この作品を通して改めて考えたいですね。

会社員 / 畑中瀬路奈

「矢野くんの普通の日々」田村結衣

- 表紙だけを見ると痛そうな漫画かと思いがちですがそんなことはなく、ほっこりする青春日常漫画です。抜けていて、いつもどこかにぶつかっては怪我ばかりして生傷の耐えない矢野くんが、純粹でいい子過ぎて庇護欲を掻き立てるので、漫画の中の他のキャラクターたちが矢野くんをお世話している様子を愛でてニヤニヤするという漫画です。とにかく心が癒やされます。

丸善ジュンク堂書店 営業本部 / 小磯洋

「山田くんと Lv999 の恋をする」ましろ

- 今年かなりおすすめラブもの。人物像がまっすぐで素敵だし、キャラがそれぞれ際立っていていいです。少しずつ進展する様子やちょっとした言動からの表情などもなかなかのキュン。絵が可愛くてカッコいい！

フリーアナウンサー・本屋 SENSE OF WONDER / 松尾翠

「やり直し令嬢は竜帝陛下を攻略中」柚アンコ、永瀬さらさ、藤未都也

- 流行りの、と言うか、流行り過ぎて玉石混交具合が物凄い事になっているジャンルですが、ざまあの対象が権力を笠に調子に乗っているだけの馬鹿ではなく、キチンの頭の回る悪役、かつ逆境回避の為に軍事作戦的なモノがキチンと描かれている作品は、流行り廃り関係無く魅力的です。男女どちらが読んでも楽しいと思います。

元書店員 / 井出麻悠美

「勇気あるものより散れ」相田裕

- 明治といった時代設定と不死の少女。この時代設定の中でどう戦っていくのか、またこのストーリーに歴史上の人物がからんだりするのかと思うと楽しみでならないです。

デザイナー / 平沼寛史

「夜明けの唄」ユノイチカ

- 今時は主人公の性的嗜好がどうでも、そこに主体を置いて居ないのであれば、学園モノとかお仕事モノといった内容のみのジャンル別けで良いのではないかと思いますので、この作品は単に冒険ファンタジーとしておすすめしたいです。世界観もよく作り込まれていて、今作が初コミックスだなんてと驚く半面、著者さんがこの先どんな物語を紡いでいくのか、非常に楽しみでもあります。

元書店員 / 井出麻悠美

「ヨリシロトランク」鬼頭莫宏、カエデミノル

- 殺した人間を殺せば殺された人間が蘇る世界に改変された後の世界をベースに、時代や場所を縦横無尽に駆け巡り、様々な人物に焦点を当てたショートストーリーが展開される。いわゆる「目には目を歯には歯を」の世界であるため、愛する人を失った者がその人を復活させようと殺人を企てるといった誰もが想像できるストーリーもあるが、人の死と蘇生を時間や空間の移動手段として用いるなど、想像もつかない利用法を提示するストーリーもあり、この改変された世界を前提とした思考実験として面白い。改変後の世界における「殺人」とは何なのかを常に読者に示し、考えさせ、その定義を変えてみせる作者の着想や思考に脱帽するばかりである。

弁護士・三村小松山縣法律事務所 / 三村量一

- 「殺された人が生き返れる」という、とあるルール改変でできるようになったらどうなるか。ある種チート感を感じるのだけど、ものすごい設定で描かれるストーリー。改変ルールを理解するのに最初頭が混乱していくのだけど、巻数を進めていくと同じ設定のオムニバスになって行って、かなり作品としても色々冒険している感じがします。その絵の可愛さと、中身のシュールさに引き込まれる作品です。

女優・ジェネラリスト / 大倉照結

「夜の名前を呼んで」三星たま

- 完っっ全に表紙買いしました。気合の入った細かい描写や黒の描写が素敵。ロゴや枠線の装飾等細かいところ隅々まで作者のこだわりが感じられて、こんなマンガが読みたかった！と改めて思われました。

フリーランス / 金輪英恵

「らーめん再遊記」久部緑郎、河合単

- 我らがラーメンハゲが帰ってきた！シリーズ3作目にしてあの芹沢さんが主役の大立ち回り。人の不幸は蜜の味みたいな雰囲気を出しつつも、結果的に丸く収めてしまうのは人徳ですね。続刊も楽しみです。

めがねっ娘教団 大司教 / 田中海渡

「RAIDEN-18」荒川弘

- 『鋼の錬金術師』で生命の尊厳を謳った作者による、死者の尊厳を踏みにじる感じのコメディ。不謹慎だけど面白い。笑ってしまってすみません。

八重洲ブックセンター宇都宮パセオ店コミック担当 / 山本さとみ

「ライドンキング」馬場康誌

- 家族で楽しめる作品。信条を持つ生き方にとときどきグッと胸を掴まれます。

自営業 / 小野裕子

- 異世界転移ギャグ漫画、設定、成長するストーリーとある大統領にそっくりなキャラ大好きです！

Hair Make Lounge tetote 代表 / カ丸真

「リズムナシオン」マツモトトモ

- 三浦大知さんや s**t kingz さんや yurinasia さんが好きな方、剣道部の方、実家に犬がいる方、そしてにこやかな最強に弱い方におすすめです。

金海堂イオン準人国分店コミック担当 / 園田美智子

「竜王の娘 中国幻想選」鮫島圓

- 中国の怪異小説を題材とした幻想奇譚、怪異小説としてはオーソドックスな話でありながら、独特の筆致が漫画としての面白さを際立たせている。世に上手い絵やイラストは多々あれど、ストーリーと両輪を成すくらいにマッチした絵柄というのは中々に出会いがたいもので目を引かれた作品。

住職・ライター / 蟬丸 P

「龍と苺」柳本光晴

- まさか四冠になってしまうとは思わなかった藤井聡太竜王の誕生で、大きな注目を集めた竜王戦で戦っている女子中学生がいると言ったら果たして信じてもらえるだろうか。もちろんフィクションだが、それですらあり得ないと思わせることを不思議と納得させられる描写で繰り広げているところが、柳本光晴『龍と苺』の凄いところだと言えるだろう。 クラスメイトにいじめを繰り返していた男子生徒を、椅子で殴り倒した14歳の女子中学生、藍田苺を元校長で今はスクールカウンセラーをしている宮村が将棋に誘う。金や銀の動かし方どころか、駒の並べ方すら知らない将棋のド素人だったはずだったが、少し教わっただけで将棋の根本を理解して、熟達者の宮村を追い詰めていく。そして始まる苺の快進撃。とにかく圧倒的な強さを見せて上級生を破り女流棋士を破りアマ竜王から竜王戦の本選へと出て目下並み居るプロ棋士たちを相手に勝利を重ね続けている。追い込まれても決して諦めない根性。常識にとらわれず徹底的に考え抜く執念。それらが奇行ぶりとは裏腹の天才性を裏付けして、苺だったら勝ち続けても不思議ではないと思わせる。 もっとも、さらに上位のプロ棋士には負け続けているところは、将棋の世界が生半可ではないことを教えてくれる。何しろ苺に負けないくらいの奇行者ばかり。そんな相手にたどり着い

て撃破する日が来るのか。それ以前に一度は挫折を味わってからの再帰へと至るドラマが繰り広げられるのか。臥薪嘗胆が似合わないキャラクターだけにどんな展開を見せてくれるかが楽しみで仕方が無い。その活躍に刺激され、藍田苺のような将棋指しが現れ、現実には未だ誰一人として存在していない女性のプロ棋士になって欲しいと思いつきながら読んでいこう。

書評家／ライター／タニグチリウイチ

「るなしい」意志強ナツ子

■ アングラ感の強い独特の絵柄をもつ意志強ナツ子さんにぴったりの内容は宗教ものだったのか！とこの組み合わせに感動すら感じた。エンタメのバランスが絶妙で、気持ち悪さもいい塩梅、沢山の人に勧めまくったこれからの楽しみの作品。

bar 図書店主 / 岡部愛

「瑠璃の宝石」渋谷圭一郎

■ 鉱物を探す物語です。地形を読み仮説を立て、フィールドワークで検証し、仮説を修正するという科学的なアプローチを繰り返して、目的の鉱物のありかを明らかにしてゆく。知恵を使って現実世界を探索する地道で静かな宝探しを描いています。このマンガは冒険は現実世界にも転がっていて、少しの工夫と好奇心で、今まで見えてなかったものも価値のあるものに変えられることを教えてくれるような気がします。現実世界に退屈を感じている人におすすめのマンガです。

システムエンジニア / 廣瀬公将

「恋愛マトリョシカガール やさぐれ女とダメ恋女」山本白湯

■ ダメな男に引っかかってしまう女の子の描写がめちゃくちゃリアルだなと思いました。わ、わかる…こいつはアカンって分かっててもそうなっちゃうんだよね…あるある…みたいな。ダメ男に傷つけられつつも、徐々に自分を取り戻して立ち上がっていく姿も良かったです。

会社員 / 畑中瀬路奈

「ロジックツリー」雁須磨子

■ 人間関係とコミュニケーションと人の気持ちと……という（全部同じともいえませんが）いわばこの世に生きる人間の関心事が2冊の中に圧縮されたようにぎゅうぎゅうに詰め込まれていて読後の充足感がものすごい。ぎゅうぎゅうだけど読んでいて「シン」としてしまふ瞬間も多々あって、「ああああ……」という声が何度も出そうになった（雁作品はいつもそうですが）。

ライター / 門倉紫麻

「ロスト・ラッド・ロンドン」シマ・シンヤ

■ まるで一つの映像作品を見終わったかのような読後感。主人公は突然、殺人の第一容疑者となる。人生のどん底にも感じられるような物語はその後、一人の警察官との真犯人探しへと進む。冒頭に「人生なんて」「たった一つの出来事で変わっちゃうもんだ」というセリフがある。今作の序盤、このセリフが非常に印象的であった。実際に何か一つの物事が人生を大きく変えてしまうことは往々にして存在するだろう。しかしその引っかかりやつまづきに過度に固執することなく生きていくことができたとすれば、きっとそれ自体はそこまでネガティブな要因にならない。自分自身でコントロールすることが難しいこともきっと多いだろう。生い立ちや人種・性別といった理不尽な要素で不当な扱いを受けることや、捨て切れない怒りや憎しみ、忘れられない後悔の念。それから生じるエネルギーは相当なものだ。しかし私はこの物語から、それらに支配されてはいけないのだというメッセージを感じた。捨てる神あれば拾う神あり。どこかで見ている人がいる。「たった一つの出来事」は登場人物たちの物語をどのように変えていくのか、是非とも読んで欲しい作品。

会社員 / 杉佳尚

「ワールド イズ ダンシング」三原和人

- 前作で天才少年を描いた三原和人が、その演出で若き日の世阿弥を描くわけですから面白くないわけがない。常人とは違う世界を見聞し、その異界を追い求める少年の衝動が、社会の求める「芸」のあり方と衝突し、そしてそれを昇華させる。このダイナミズムにゾクゾクします。

会社員 / 末永龍介

- 世阿弥が幼名の「鬼夜叉」と呼ばれていた頃から物語は始まる。父親の観阿弥も健在。まだ足利義満に寵愛される前。ヒトはなぜ踊るのか？という大きな疑問を抱えつつ、好奇心の塊のようにいろんなことに首を突っ込んでいく…。幽玄をどんなふうに表現するのか？ 複式夢幻能をどうやって完成させたのか？ 犬王（道阿弥）とはどう出会うのか？ いや、既に出会っているのか？ あとあと、息子である元雅が死んだときにどんな表情を見せるのか？ しあわせな数学マンガ、『はじめアルゴリズム』を描いた三原和人先生がどうやって表現するのか興味津々。瀬戸内寂聴の『秘花』、白洲正子の『世阿弥』、杉本苑子の『華の碑文』などとは違ったマンガならではの世阿弥が読めるに違いない。

鳥取県立図書館司書 / 野間勤

「私にできるすべてのこと」池辺葵

- 人間、とくに女性の生きる姿をていねいに描く池辺葵さんの上質なSF。マンガの「余白」が好きな人は、池辺葵さんの作品を読むことをお勧めします。緻密に描きこまれた絵と対照的な余白の表現で、世界の奏でる余韻のようなものを贅沢に楽しむことができます。赤が映える装丁もとても美しく、手に取って表紙をめくだけでもうワクワクします。画面の隅までキラキラと輝いて見える素敵な本です。

伊吉書院 類家店 / 中村深雪

「わたしのカッコウたち—児童養護施設のふつう—」大須賀こすも

- 傑作の予感を残して幕を閉じてしまった『図書館の騎士団』の大須賀こすも先生が、此度は一転、現代を舞台に、しかも児童養護施設という抜き差しならない空間を舞台にした作品。各章には登場人物たちの名前が掲げられている。そう、誰もが他の誰でもない自分の名前を持つ存在だということが、そして、誰もがその自分の人生という物語を生きる唯一無二のかけがえのない存在だということが、この作品の大前提にある。そしてその人生はむずかしい。児童福祉というデリケートな問題を扱うに、大須賀先生はきっと綿密な取材をし、この物語が誰かのやわらかいところに触れてしまうかもしれないことに、きっと神経をとがらせて慎重に慎重に表現を選んだのではないかと思います。現代社会の現実を知るほどに、心の底には怒りを忍ばせながら？しかし主人公・岡本亜希のように？思うままにペンをふるうのではなく、落ちついて、冷静に、丁寧にこの物語を届けようとしてくれたのではないかと思います。

教員 / 戸田穠

「私のジャンルに「神」がいます」真田つづる

- 私は小説系同人ライフには詳しくはないのですが、それでも感情移入してしまいます。Twitterやpixiv等のSNSに触れた事のある方には分かる、鬱陶しくも憧れてしまい、どうにも成らない感情が詳しく描かれている漫画です。分かる分かる！面白い！と頷きながら、憧れの推し作家さんへの気持ちが分かり過ぎて泣きそうになる。

主婦 / 岸本しのぶ

「私の息子が異世界転生したっぽい」かねもと

- 飽和する異世界モノへの強烈なアンチテーゼに、頭をガツンと殴られた気がしました。「私の息子、3か月前に事故で死んだの。…私は死んだんじゃなくて異世界転生ってやつだと思ってる」と母親。世の異世界モノにはあまり見られない視点。そもそも異世界なんて無いし。残された家族目線は、実は切なくて悲しく、何よりどう受け止めていいかわからないという戸惑い。そして、後悔。もっと息子と向き合えばよかった、と。（なお、こちらは原作のほうです。）

第75期司法修習生 / 三葛敦志

「ワルプルギス実行委員実行する 速水螺旋人作品集」速水螺旋人

- 可愛くわちゃわちゃした絵柄ながら内容はエグいというジャンルも最近は一般化してきましたが、そういった作風
の古参として「大砲とスタンプ」を書き上げた異才の書き上げる短編集。博覧強記と読書量に裏打ちされた何気な
い一コマやギャグも含蓄に富んでおり、特にスラブの民話や伝説などを題材にした表題作をはじめとして荒唐無稽
な話から歴史に題材をとった話まで無限の引き出しを感じさせる作品

住職・ライター / 蟬丸 P

「ワンダンス」珈琲

- いま日本で一番ダンス描写がかっこいいマンガです。わんださんがめっちゃくちゃかわいいです。最高！

小説家 / 海猫沢めろん

- 2021 年最も「熱い」マンガといえばこれに尽きる！ ダンスを絵で表現する超絶画力にも圧倒されるわけですが、
バトルでの互いの意地の張り合い——踊りたい、もっともっと自分を解放したいというエネルギーのぶつかり合い
にはページの向こうから熱風が吹き付けてくるようで、毎話火傷しそうに読んでました。

会社員 / 末永龍介

「ワンナイト・モーニング」奥山ケニチ

- タイトルのままに、男女が一夜を過ごした後の朝ごはんを描くショートストーリーです。様々なワンナイトカップ
ルが朝食べる「思い出の味」。その朝は、ようやく成就した幸せなひと時であったり、結局は叶わず玉砕、ただの
勢いで冷静になったら？ などなど様々です。その時に食べる朝ごはん手作だったり、ファーストフードだったり、
これがとてもリアルです笑。酸っぱい青春を通り越した先にある、ちょっと苦味のある大人の恋愛短編集です。

会社員 / 佐藤優